

東方西口遺跡発掘調査報告書 1

—大相模保育所建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023

越谷市教育委員会



東方西口遺跡出土遺物 集合写真

序

埼玉県越谷市は、埼玉県東南部、東京都心から25km圏内に位置しており、市域の中央に元荒川、西に綾瀬川、東に古利根川が流れ、新方川や葛西用水、八条用水など多くの河川や用水が流れており、水の景観が本市の大きな特長となっています。

このたび、市立大相模保育所建設工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施したところ、遺跡の存在が明らかとなり、関係者からの多大なる理解と協力を得ながら、越谷市教育委員会で発掘調査を実施することができました。

発見された東方西口遺跡は元荒川右岸の自然堤防上に立地する、中世から近世にかけての遺跡です。遺跡の北側には文明年間に太田道灌に仕え、江戸時代初期から旧東方村下組の名主を勤めた中村氏の居宅が位置していました。現在、中村氏の居宅は越谷市指定有形文化財・旧東方村中村家住宅として越谷市レイクタウン地内に移築され、保護が図られています。

このような歴史的背景のある土地から当該期の遺跡が発見されたことは大変意義深いことであり、東方西口遺跡と旧東方村中村家住宅との関係性を考慮せずにはいられません。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護および普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

結びに、発掘調査から本書の刊行にあたり特段のご理解とご協力を賜りました土地所有者様、地域の多くの方々、関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

令和5年3月

越谷市教育委員会
教育長 吉田 茂

例　　言

- 1 本書は、埼玉県越谷市大成町二丁目に所在する東方西口遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳における県遺跡番号と調査・整理時の略号は以下のとおりである。
　　東方西口遺跡（No.78-019）、略号：東方西口
 - 3 本調査は、市立大相模保育所建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、越谷市教育委員会が調査主体者となり実施した。
 - 4 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行は第Ⅰ章2に示した組織により実施した。
 - 5 発掘作業は以下の期間で実施した。
 - (1) 北・東側よう壁部分：平成29年8月28日から平成29年10月6日まで
 - (2) 西側よう壁部分：平成29年12月4日から平成29年12月13日まで
 - (3) 本体・外構部分：令和元年9月30日から令和2年2月10日まで
 - 6 整理等作業、報告書作成・刊行は発掘作業実施時から順次行い、令和5年3月31日まで実施した。
 - 7 発掘作業は上記5（1）を橋本、（2）（3）を苑原が行った。整理等作業、本報告書の編集及び執筆は苑原が担当した。遺物の実測及びトレースは鬼塚・安井が、遺構及び遺物の写真撮影は苑原が行った。
 - 8 発掘作業に係る基準点測量・水準測量・平板測量（平面図作成）・空中写真撮影は株式会社中野技術が行った。
 - 9 出土遺物の保存処理・樹種同定は株式会社東都文化財保存研究所が行った。
 - 10 本書にかかる記録類及び出土遺物等は、越谷市教育委員会が保管している。
 - 11 本報告書については、発掘調査成果の周知と活用又は学術研究、教育等を目的とする場合は、越谷市教育委員会の承諾なく無償で複製して利用できる。
 - 12 発掘調査の実施にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。
- 発掘作業参加者（敬称略、五十音順）
- (1) 平成29年度
- 越谷市教育委員会
　　鬼塚千花　安井陽子
越谷市シルバー人材センター
　　奥角惇　小久保隆雄　坂本信男　高岡資明　高橋隆夫　浜屋富男

(2) 令和元年度

越谷市教育委員会

鬼塚千花 安井陽子

越谷市シルバー人材センター

井上幾央 近江谷隆 岡崎勉 奥角惇 木村保 小松敏夫 酒井孝夫 坂本信男

佐々木孝之 佐々木伸子 添田武治 高岡資明 高橋興四郎 高橋孝雄 高橋裕俊

花卉幸雄 宮下勇 八木誠一

越谷市文化財ボランティア

泉隆 木村範子 小林和子 斎藤伸巨 高橋美香 高柳時男 田幡隆 土屋礼子 中園金吾

横山朋和

整理等作業参加者（敬称略、五十音順）

越谷市教育委員会

鬼塚千花 木内亜沙美 小西明子 盛江やよい 清水典子 福島美奈津 安井陽子

越谷市文化財ボランティア

木島栄一 木村範子 國吉奏慧 小林和子 斎藤伸巨 高柳時男 田幡隆 土屋礼子

中園金吾 矢島文太郎 横山朋和

13 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。

（敬称略、五十音順）

小澤正直 鬼塚知典 小野充 折原覚 河井瞳子 栗岡眞理子 関絵美 高崎光司 高橋杜人

瀧瀬芳之 長島正弘 中村智美 中村宗 中村治雄 別所鮎実 村山卓 元林恵子 山田琴子

油布憲昭

株式会社ヤスナミ測量設計 公益財団法人いきいき埼玉

公益社団法人越谷市シルバー人材センター 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県立さきたま史跡の博物館 東部地区文化財担当者会 八潮市立資料館 山崎建設株式会社

凡　例

- 1 本報告書におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）である。
- 2 各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。
- 3 調査で使用した大グリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲とし、この中を2m×2mの25小グリッドに細分した。
- 4 大グリッドの名称は、北西を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。
大グリッドはおおむね越谷市指定有形文化財・旧東方村中村家住宅の移築前の土地を網羅するよう設定し、A1グリッド北西隅の座標をX = -12650.000、Y = -1500.000とした。
- 5 大グリッドが属する範囲の北西隅に設置したグリッド杭に大グリッド名称を付した。
- 6 小グリッドの名称は北西側を1とし、東に向かって1～5、2段目は6～10、以下同様にして続き、5段目で21～25とした。
- 7 平面図や遺構断面図に記した水準数値は、海拔標高（単位m）を表す。
- 8 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。なお、遺構一覧表の計測値はm単位とし、()は残存値を示す。
SK … 土坑 SD … 溝跡 P … 小穴（ピット）
- 9 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・遺物計測値は大きさをcm、重さをg単位とした。
 - ・計測値の()は残存値を示す。
- 10 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」2008年版（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 11 「主軸」は長軸を主軸とみなした。「主軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N - 10° - E、N - 10° - W）
- 12 遺構図に配置した遺物実測図の縮尺は任意である。
- 13 木製品実測図中のトーンは以下のとおりである。
 … 黒漆  … 赤色漆

目 次

卷頭写真

序

例言

凡例

目次（挿図目次・挿表目次・写真図版目次）

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行の組織	4
(1)	発掘作業	
(2)	整理等作業及び報告書作成・刊行	
II	遺跡の立地と環境	6
1.	地理的環境	6
2.	歴史的環境	7
III	調査の方法と成果	9
1.	調査の概要	9
2.	基本層序	10
3.	遺構	11
4.	遺物	49
IV	出土遺物の保存処理・樹種同定	87
1.	木製品	87
2.	鉄製品	89
V	総括	92
1.	東方西口遺跡と旧東方村下組中村家の関係	92
2.	発掘調査区と絵図・地図との対比	96
3.	SD08足場状痕跡について	98

写真図版（遺構・遺物）

挿図目次

第1図 越谷市の位置.....	1
第2図 調査範囲と実施時期.....	3
第3図 埼玉県の地形.....	6
第4図 越谷市の地形.....	8
第5図 グリッド配置図.....	10
第6図 調査区全体図.....	21
第7図 調査区分割図1.....	22
第8図 調査区分割図2.....	23
第9図 調査区分割図3.....	24
第10図 調査区分割図4.....	25
第11図 調査区分割図5.....	26
第12図 調査区分割図6.....	27
第13図 調査区分割図7.....	28
第14図 調査区分割図8.....	29
第15図 遺構図（SK01）.....	30
第16図 遺構図（SK02・SK03・SK04）.....	31
第17図 遺構図（SK05・SK06・SK07・SK10）.....	32
第18図 遺構図（SK08・SK09・SK13）.....	33
第19図 遺構図（SK11・SK12・SK14・SK16）.....	34
第20図 遺構図（SD01・SD09・SD11）.....	35
第21図 遺構図（SD02・SD03・SD04・SD05）.....	36
第22図 遺構図（SD06・SD07）.....	37
第23図 遺構図（SD08広域）.....	38
第24図 遺構図（SD08詳細）.....	39
第25図 遺構図（SD08カゴ状木製品出土状況・土層断面）.....	40
第26図 遺構図（SD09）.....	41
第27図 遺構図（SK15・SD10・SD13）.....	42
第28図 遺構図（SD11・落ち込み）.....	43
第29図 遺構図（調査区東壁断面）.....	44
第30図 遺構図（SD12・SD14）.....	45
第31図 遺構図（ビット・杭）.....	46
第32図 SK01・SK02（1）出土遺物.....	57
第33図 SK02（2）出土遺物.....	58
第34図 SK02（3）・SK03・SK06（1）出土遺物.....	59
第35図 SK06（2）出土遺物.....	60
第36図 SK08（1）出土遺物.....	61

第37図	SK08（2）・SK09・SK12出土遺物	62
第38図	SK13（1）出土遺物	63
第39図	SK13（2）・SK15・SD01・SD03・SD06出土遺物	64
第40図	SD07・SD08（1）出土遺物	65
第41図	SD08（2）出土遺物	66
第42図	SD08（3）出土遺物	67
第43図	SD08（4）出土遺物	68
第44図	SD08（5）出土遺物	69
第45図	SD08（6）出土遺物	70
第46図	SD08（7）出土遺物	71
第47図	SD08（8）・SD09・SD10（1）出土遺物	72
第48図	SD10（2）出土遺物	73
第49図	SD10（3）出土遺物	74
第50図	SD11・SD12出土遺物	75
第51図	P05・P09・遺構外（1）出土遺物	76
第52図	遺構外（2）出土遺物	77
第53図	遺構外（3）出土遺物	78
第54図	木製品（No.3・No.4・No.15）光学顕微鏡写真	90
第55図	木製品（No.34・No.89）光学顕微鏡写真	91
第56図	木製品（No.94・No.95）光学顕微鏡写真	91
第57図	東方村下組中村家系譜	94
第58図	東方・見田方村絵図	96
第59図	明治期の地引番号図と平成23年白図の対比	97
第60図	明治期の地引番号図と発掘調査区の対比	97
第61図	SD08足場状痕跡復元図	99

挿表目次

第1表	市内遺跡一覧	8
第2表	遺構一覧表	47
第3表	遺物観察表（土器・陶磁器等）	79
第4表	遺物観察表（瓦）	83
第5表	遺物観察表（石製品）	83
第6表	遺物観察表（金属製品）	84
第7表	遺物観察表（骨製品・材質不明品）	84
第8表	遺物観察表（木製品）	85
第9表	木製品樹種同定結果	88
第10表	東方村下組中村家当主一覧	93

写真図版目次

写真図版1

写真1 調査区南端から旧東方村中村家を望む（昭和40年代）

写真2 調査区北端から旧東方村中村家を望む（昭和40年代）

写真図版2

写真3 調査区遠景（南から）

写真4 調査区遠景（北から）

写真図版3

写真5 調査区全景（合成写真・左が北）

写真図版4

写真6 調査区全景（1回目撮影・上が北）

写真7 調査区全景（2回目撮影・上が北）

写真図版5

平成29年度調査

写真8 SD01完掘状況（南東から）

写真9 SD01土層断面（東から）

写真10 SD09完掘状況（南東から）

写真11 SD09土層断面（東から）

写真12 SD11完掘状況（南東から）

写真13 SD11土層断面（東から）

写真14 SD01・SD09・SD11完掘状況（南東から）

写真15 落ち込み完掘状況（北東から）

写真図版6

令和元年度調査

写真16 SK01検出状況（南西から）

写真17 SK01完掘状況（南東から）

写真18 SK01漆器輪（No.3・No.4）出土状況（南から）

写真19 SK01漆器輪（No.3）出土状況（南から）

写真20 SK02検出状況（南から）

写真21 SK02土層断面（南から）

写真22 SK02板碑（No.7～No.10）出土状況（南から）

写真23 SK02完掘状況（南から）

写真図版7

令和元年度調査

写真24 SK03検出状況（南から）

写真25 SK03土層断面（南から）

写真26 SK03遺物（No.11）出土状況（南から）

写真27 SK03遺物（No.11）出土状況（南から）

写真28 SK04検出状況（南から）

写真29 SK04完掘状況（南から）

写真30 SK05検出状況（南から）

写真31 SK05完掘状況（南から）

写真図版8

令和元年度調査

写真32 SK06試掘調査時点検出状況（南から）

写真33 SK06土層断面（南から）

写真34 SK06遺物（No.12～No.14）出土状況（南から）

写真35 SK06遺物（No.12～No.14）出土状況（北西から）

写真36 SK06遺物（No.15）出土状況（南から）

写真37 SK10土層断面（南から）

写真38 SK07検出状況（南から）

写真39 SK07土層断面（南から）

写真図版9

令和元年度調査

写真40 SK08・SK09検出状況（南から）

写真41 SK08・SK09完掘状況（南から）

写真42 SK08木製品（No.22・No.23）出土状況（南から）

写真43 SK09短刀（No.26）出土状況（南から）

写真44 SK11検出状況（南から）

写真45 SK11土層断面（南から）

写真46 SK12検出状況（南から）

写真47 SK12土層断面（南から）

写真図版10

令和元年度調査

写真48 SK12木製品（No.28～No.30）出土状況（南から）

写真49 SK12完掘状況（南から）

写真50 SK13土層断面（北から）

写真51 SK13遺物（No.33～No.36）出土状況（北から）

写真52 SK14土層断面（北から）

写真53 SK15土層断面（東から）

写真54 SK16土層断面（北から）

写真55 SK16完掘状況（北から）

写真図版11

令和元年度調査

写真56 SD01漆器輪（No.38）出土状況（東から）

写真57 SD02土層断面（南から）

写真58 SD03土層断面（南から）

写真59 SD04土層断面（南から）

写真60 SD05a-a'土層断面（南から）

写真61 SD05b-b'土層断面（南から）

写真62 SD06土層断面（南から）

写真63 SD06遺物（No.40・No.41）出土状況（南から）

写真図版12

令和元年度調査

写真64 SD06遺物（No.40・No.41）出土状況（南から）

写真65 SD06b-b'土層断面（東から）

写真66 SD07土層断面（南から）

写真67 SD07木製品（No.44～No.47）出土状況（南東から）

写真68 SD08掘削状況（東から）

写真69 SD08c-c'土層断面（北から）

写真70 SD08d-d'土層断面（東から）

写真71 SD08c-c'土層断面（東から）

写真図版13

令和元年度調査

写真72 SD08b-b'土層断面（東から）

写真73 SD08b-b'土層断面（東から）

写真74 SD08a-a'土層断面（東から）

写真75 SD08足場痕跡検出状況（南から）

- 写真76 SD08足場状痕跡検出状況（南東から）
写真77 SD08足場状痕跡検出状況（南西から）
写真78 SD08遺物（No.51）出土状況（南から）
写真79 SD08遺物（No.70）出土状況（南から）
写真図版14
令和元年度調査
写真80 SD08遺物（No.48・No.63・No.69）出土状況（北から）
写真81 SD08カゴ状木製品（No.94・No.95）出土状況（北から）
写真82 SD09a-a'土層断面（東から）
写真83 SD09b-b'土層断面（西から）
写真84 SD09完掘状況（西から）
写真85 SD10b-b'土層断面（西から）
写真86 SD10遺物（No.121・No.122・No.125・No.126）出土状況（南から）
写真87 SD10遺物（No.121・No.122）出土状況（南西から）
写真図版15
令和元年度調査
写真88 SD10遺物（No.122・No.125・No.126）出土状況（南西から）
写真89 SK15・SD10完掘状況（西から）
写真90 SD12土層断面（南から）
写真91 SD12東側杭（No.135）断面（南から）
写真92 SD12西側杭（No.136）断面（南から）
写真93 SD13検出状況（南西から）
写真94 SD14土層断面（西から）
写真95 6Lグリッド落ち込み掘削状況（北から）
写真図版16
令和元年度調査
写真96 P02上層断面（南から）
写真97 P03土層断面（南から）
写真98 P04土層断面（東から）
写真99 P05遺物（No.137）出土状況（東から）
写真100 P06・P07土層断面（東から）
写真101 P08土層断面（東から）
写真102 P09土層断面（東から）
写真103 P09木製品（No.139）出土状況（東から）
写真図版17
令和元年度調査
写真104 杖1断面（南から）
写真105 杖2断面（南から）
写真106 杖3断面（南から）
写真107 杖4断面（南から）
写真108 5Kグリッド压痕（西から）
写真109 5I-11グリッド压痕（南西から）
写真110 4K-25グリッド足跡（南から）
写真111 4L-9グリッド足跡（西から）
写真図版18
SK01出土遺物
SK02出土遺物
写真図版19
SK06～SK13出土遺物
写真図版20
SK13・SK15・SD03・SD06出土遺物
写真図版21
SD08出土遺物1
写真図版22
SD08出土遺物2
写真図版23
SD08出土遺物3
写真図版24
SD08出土遺物4
写真図版25
SD08出土遺物5
写真図版26
SD08～SD10出土遺物
写真図版27
SD10・SD11・P05・P09出土遺物
写真図版28
落ち込み・グリッド出土遺物
写真図版29
グリッド他出土遺物
写真図版30
SK01・SK03・SK06・SK08出土木製品
写真図版31
SK08出土木製品
写真図版32
SK08・SK12・SD07・SD08出土木製品
写真図版33
SD08出土木製品
写真図版34
SD08出土木製品
写真図版35
遺構外出土木製品
写真図版36
SK08・SK12・SD08出土木製品
写真図版37
SD12・P09・遺構外出土木製品
写真図版38
鉄製品（No.26・No.33）X線撮影写真

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

越谷市（第1図）では、老朽化した保育所の整備を進めている。大成町一丁目に所在していた旧大相模保育所は老朽化が顕著であり、また、保育需要の高いレイクタウン地区に近接した用地に建設することで待機児童解消に寄与することから、子ども家庭部子ども育成課が担当課となり、令和2年度に大成町二丁目に新大相模保育所の建設を行うこととなった。

新大相模保育所建設予定地は埋蔵文化財包蔵地となっていたものの、埋蔵文化財包蔵地「大相模次郎能高館跡」（県遺跡番号78-004）に近く、さらに建設予定地が東方村の名主を勤めた中村氏の居宅が存在する自然堤防上の南側隣接地に位置することから、埋蔵文化財が存在しないとは言い切れないと推測された。よって、越谷市教育委員会では、子ども育成課との協議ののち、平成29年3月13日から23日の間の5日間で工事に先立ち埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、水田耕作土下約20cmで溝・土坑等の遺構が確認され、遺構に伴う遺物として中世の土器・陶磁器や板碑等が出土した。

そのため、平成29年3月31日付で埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カードを県教育委員会に提出し、埋蔵文化財包蔵地の周知を図った。なお、遺跡名はかつて使われていた地名である大字「東方」字「西口」をとって、東方西口遺跡とした。

試掘調査の結果を受けて子ども育成課と協議を行い、開発行為と埋蔵文化財保護の調整を行ったところ、保育所建設工事の計画に変更はないことが確認された。また、設計が定まっていないものの、建設範囲の多くの場所では地盤改良工事が必要となる見込みであり、それにより埋蔵文化財が破壊されるため、記録保存のための発掘調査が必要となることが想された。

平成29年度には本体工事に先行して、土留めよう壁を設置することとなり、工事内容からみて埋蔵文化財の現状保存は困難であると判断されたため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は北・東側よう壁部分と西側よう壁部分の2回に分けて実施した（第2図）。

その後、保育所本体及び外構工事の設計に先立ち、越谷市教育委員会としては遺跡を現状のまま保存することを原則とする立場から、平成31年1月30日付けで埋蔵文化財の現状保存に配慮した新大相模保育所の設計について、子ども育成課と設計を行う建設部營繕課に対して依頼を行った。

しかしながら保育所の機能等を満たすためには埋蔵文化財の現状保存は困難であったため、令和元年に記録保存のための発掘調査を実施することになった。ただし、園庭や駐車場部分は工事の掘削深さと埋蔵文化財との間に30cm以上の保護層を有し、遺跡が保護されるため、発掘調査の対象外とした。



第1図 越谷市の位置

取録した発掘調査等に係る届出・通知等の法的手続きの概要は以下のとおりである。

(1) 東方西口遺跡の遺跡台帳及び遺跡分布地図への登録

ア. 文化財保護法第95条第1項に基づく埋蔵文化財包蔵地の周知（調査カードの提出）

提出年月日・番号：平成29年3月31日付越教生第967号

(2) 平成29年度発掘作業（北・東側よう壁部分 及び 西側よう壁部分）

ア. 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知

通知者：越谷市長

通知年月日・番号：平成29年8月15日付越子育第583-2号

イ. 上記通知に対する発掘調査実施の指示通知

通知者：埼玉県教育委員会

通知年月日・番号：平成29年8月16日付教文第4-1860号

ウ. 文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

（ア）北・東側よう壁部

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知年月日・番号：平成29年8月18日付越教生第290号

（イ）西側よう壁部分

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知年月日・番号：平成29年11月29日付越教生第722号

エ. 埋蔵物の文化財認定通知（中核市のため）

通知年月日・番号：平成29年12月15日付越教生第791号

オ. 埋蔵物発見届

通知年月日：平成29年12月15日

カ. 埋蔵文化財保管証

提出日・番号：平成29年12月19日付越教生第806号

(3) 令和元年度発掘作業（本体部分 及び 外構部分）

ア. 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知

（ア）本体部分

通知者：越谷市長

通知年月日・番号：令和元年9月9日付越子育第457号

（イ）外構部分

通知者：越谷市長

通知年月日・番号：令和元年10月7日付越子育第545号

イ. 上記通知に対する発掘調査実施の指示通知

（ア）本体部分

通知者：埼玉県教育委員会教育長

通知年月日・番号：令和元年10月3日付教文資第4-977号

（イ）外構部分

通知者：埼玉県教育委員会教育長

通知年月日・番号：令和元年10月11日付教文資第4-1935号

ウ、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

(ア) 本体部分

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知年月日・番号：令和元年10月1日付越教生第595号

(イ) 外構部分

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知年月日・番号：令和元年12月2日付越教生第773号

エ、埋蔵物の文化財認定通知（中核市のため）

通知年月日・番号：令和2年2月10日付越教生第916-1号

オ、埋蔵物発見届

通知年月日：令和2年2月10日

カ、埋蔵文化財保管証

提出日・番号：令和2年2月10日付越教生第916-2号

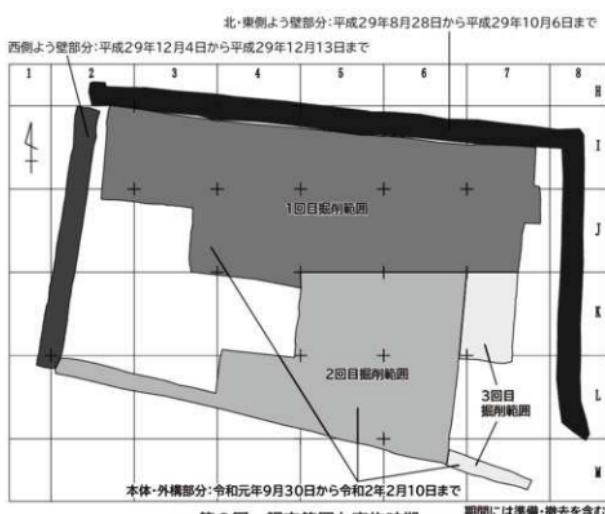
キ、出土文化財譲与申請書

提出日・番号：令和2年8月12日付越教生第39号

ク、出土品の譲与についての通知

通知者：埼玉県教育委員会教育長

通知年月日・番号：令和2年8月17日付教文資第797号



第2図 調査範囲と実施時期

2. 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行の組織

調査主体者 越谷市教育委員会

(1) 発掘作業

平成29年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	橋本 充史
教育総務部長	横川 清	生涯学習課文化財担当主事	栗原 利峰
教育総務部副部長	矢部 新治	生涯学習課文化財担当主事	荒屋 敦 舞
教育総務部副参事兼	福田 博	市立図書館主任	菟原 雄大
生涯学習課長	木村 和明	市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課調整幹		市史専門委員	安井 陽子

令和元年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	橋本 充史
教育総務部長	永福 哲	生涯学習課文化財担当主事	菟原 雄大
教育総務部副部長兼	福田 博	生涯学習課文化財担当主事	栗原 利峰
生涯学習課長	木村 和明	市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課調整幹	中野 聰	市史専門委員	安井 陽子

(2) 整理等作業及び報告書作成・刊行

令和2年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	橋本 充史
教育総務部長	鈴木 功	生涯学習課文化財担当主事	菟原 雄大
教育総務部副参事	渡辺 真浩	生涯学習課文化財担当主事	栗原 利峰
生涯学習課長	木村 和明	市史専門員	鬼塚 千花
生涯学習課調整幹	中野 聰	市史専門員	安井 陽子
		市史専門員	鈴木 健弥

令和3年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主事	菟原 雄大
教育総務部長	鈴木 功	生涯学習課文化財担当主事	栗原 利峰
教育総務部副部長	渡辺 真浩	生涯学習課文化財担当主事	喜多 春月
生涯学習課長	木村 和明	市史専門員	鬼塚 千花
生涯学習課副課長	山田健太朗	市史専門員	安井 陽子
生涯学習課文化財担当主幹	橋本 充史	市史専門員	鈴木 健弥

令和4年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	菅原 雄大
教育総務部長	鈴木 功	生涯学習課文化財担当主任	栗原 利峰
生涯学習課長	木村 和明	生涯学習課文化財担当主事	村田 琴音
生涯学習課副課長	山田健太朗	市史専門員	鬼塚 千花
生涯学習課文化財担当主幹(統括)	橋本 充史	市史専門員	安井 陽子
		市史専門員	鈴木 健弥



発掘作業風景（トレンチ掘削）



発掘作業風景（遺構掘削）



中学生社会体験チャレンジ事業



現地説明会風景



1月27日調査参加者

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

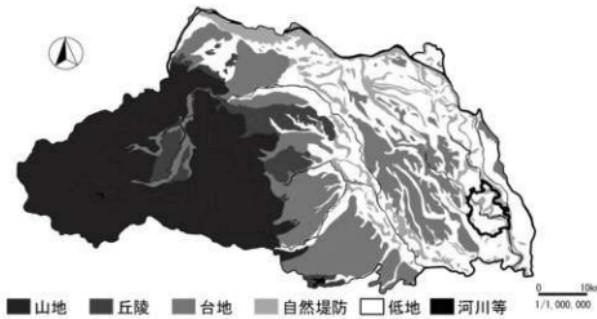
越谷市は埼玉県南東部に広く発達する中川低地のなかに位置している。中川低地は埼玉県西南部に分布する荒川低地と川口市南部で合流し、東京の下町低地に続いている。市域は元荒川・古利根川・綾瀬川の顕著な曲流によって地形が形成され、その流域に沿って自然堤防の微高地が発達していることから、市域の土地形成にはこれらの河川が大きな役割をはたしていたことが分かる。

元荒川の曲流部分については近世に大きく2か所直線化がなされているが、元荒川・古利根川の流路については比較的安定していたと考えられ、流路に沿ったかたちで自然堤防が発達している。これに比べて綾瀬川流域では自然堤防が散布しており、乱流して流路を変えていたことがうかがえる。

越谷市域の標高は北部で6m前後、南部で4m前後を示し、平均傾斜1,000分の0.4程度の非常にゆるい傾斜をしている。市域の地形としては自然堤防と後背低湿地との微地形が顕著であり、高度差1m前後のゆるい起伏が見られるにすぎない。近年までは自然堤防の微高地に住宅が集まり集落がつくられ、後背低湿地が水田として耕作されるという、地形に合わせた土地利用がなされていたが、現在では後背低湿地にも住宅等が建てられ、土地利用の様子が急激に変化している。

第4図は市域の地形に遺跡の位置を追加した図であるが、遺跡は全て自然堤防上に立地していることが分かる。調査の実施されていない遺跡がほとんどであるため、その範囲等が不明であるものの、遺跡は自然堤防の中心部というよりは、縁辺部に立地している場合が多いようである。なお、現状では元荒川由来の自然堤防上に遺跡が多く存在しているようであるが、未発見の遺跡も多く存在している可能性もあるため、詳細な分布は不明と言わざるを得ない。

東方西口遺跡は、元荒川右岸の自然堤防の先端部に位置する。現在、遺跡の南側を東西に走る主要地方道越谷流山線より以南はレイクタウンと称し、土地区画整理事業に伴う市街化が急激に進んでいるが、もともとは大相模耕地と呼ばれる水田が一面に広がっていた。今回の調査区では大相模耕地に続く後背低湿地と自然堤防の境が確認でき、北側が高く南側は低い地形となっている。



2. 歴史的環境

市域で現在のところ最古の遺跡は古墳時代前期の増林中妻遺跡である。増林中妻遺跡は表面採集により当該期の遺跡が存在するのではないかと言われていたところ、平成29年度に実施した試掘調査により豊穴住居1基、溝7条、ビット1基が確認され、当該期の低地の遺跡として貴重な発見例となった。

古墳時代後期では見田方遺跡が知られている。見田方遺跡は昭和41年、昭和42年の2回にわたって発掘調査が行われており、豊穴住居が検出され、土器、土錐、紡錘車などが出土した。本遺跡もほとんど遺跡が無いとされていた中川低地における代表的な遺跡として評価されている。

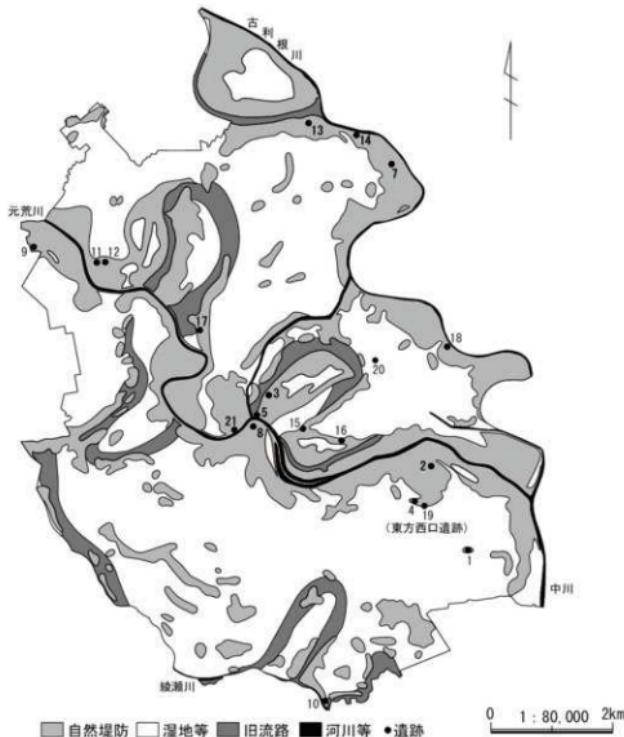
その他、草加・八潮遺跡確認調査団による昭和56年発行の『中川低地遺跡確認調査報告書』によれば、分布調査の成果として、越谷市増林地内で縄文時代の遺物が、越谷市東越谷地内で弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が、越谷市大成町地内で古墳時代中期から後期の遺物が表面採集されている。また、令和3年度に発掘調査が行われた越谷警察署前遺跡においても、原位置はとどめていないものの、弥生時代後期～古墳時代前期時代の土器細片が出土している。これらの成果を評価すれば、市域において弥生時代終末期から古墳時代にかけての遺跡が他にも複数存在する可能性がある。

古代になると遺跡が7遺跡に増える（第1表）。このうち、発掘調査事例があるのは大道遺跡・海道西遺跡・越谷警察署前遺跡である。大道遺跡は9世紀後半から10世紀前半～中葉頃の遺跡であり、豊穴住居・土師器焼成坑・土坑・溝などが確認されており、武藏型甕や新治・南比企・上総・東海・猿投産及び下総や三和産と思われる須恵器が出土している。海道西遺跡は河畔砂丘上の遺跡であり、9世紀後半から10世紀初頭の豊穴住居・土坑などが確認されている。武藏型甕や、南比企・末野・東金子・新治・三和産と思われる須恵器が出土している。越谷警察署前遺跡では9世紀後半頃の土坑1基が確認され、武藏型甕や東金子産と思われる須恵器が出土している。

遺跡以外に目を向けると、元荒川左岸には野島山浄山寺が立地している。浄山寺は寺伝によると、下野国都賀郡の豪族壬生氏の出であるとされる慈覚大師円仁が貞觀2年（860年）に開基したとされている。本尊「木造地蔵菩薩立像」は、平安時代初期にあたる9世紀に作られた、関東でも屈指の非常に古い像であり、平成28年8月には国指定重要文化財となった。仏像の年代が寺伝の開基年代及び大道遺跡・海道西遺跡における主体的な時期とも符合するため、周辺の歴史を考える上で示唆に富む発見である。

中世になると遺跡は3遺跡に減少する。ただし、市域に約130基存在している板碑の分布等から自然堤防上に集落が展開していた状況が推測され、実際には未発見の遺跡が多数存在するものと考えられる。未報告であるが近年、大道遺跡からT字状を呈する火葬土坑や板碑が埋められた土坑、14世紀の遺物を含む大溝が確認されるなど、中世の営みが遺構としても確認始めている。

近世の東方村は元禄11年（1698年）に幕府領から忍領に組み入れられ、近隣の見田方、南百、四条、別府、千疋、麦塚、柿ノ木の各村（通称柿ノ木領八か村）と共に廃藩置県まで忍領となっていた。『新編武藏風土記稿』によると民家は85。村は上組と下組に分かれ、両組に名主が置かれたため名主は2人制であった。両組の名主とも中村を名乗っており、代々世襲で名主を勤めていた。なお、上組中村家は野寺党箕勾の分流として居住した小相模次郎能高の後裔であるといわれている。下組中村家は先祖・中村左近将監は平家千葉の庶流である中村太郎・平忠將の遠裔であるとされ、太田道灌の臣となり、後に大相模郷の郷士となっている。



第4図 越谷市の地形

第1表 市内遺跡一覧

番号	県遺跡番号	遺跡名	時期
1	78-001	見田口遺跡	古墳後期
2	78-002	西口遺跡	奈良・平安・江戸
3	78-003	一番遺跡	室町・戦国・江戸
4	78-004	大相模次郎能高館跡	不明
5	78-005	会田出羽屋敷	江戸
6	欠番	-	-
7	78-007	清淨院開山塚	鎌倉
8	78-008	越ヶ谷御殿跡	南北朝・室町・戦国・江戸
9	78-009	№9遺跡	奈良・平安
10	78-010	蒲生の一里塚	江戸
11	78-011	大道第1遺跡	奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・江戸
12	78-012	大道第2遺跡	奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・江戸
13	78-013	№13遺跡	奈良・平安
14	78-014	№14遺跡	奈良・平安
15	78-015	№15遺跡	奈良・平安
16	78-016	越谷警察署前遺跡	奈良・平安・江戸
17	78-017	海道西遺跡	奈良・平安・江戸
18	78-018	増林下前遺跡	江戸
19	78-019	東方西口遺跡	室町・戦国・江戸
20	78-020	増林中妻遺跡	古墳前期
21	78-021	大沢宿籠庵屋跡	江戸

III 調査の方法と成果

1. 調査の概要

(1) 調査方法等の概要

重機による表土掘削土および人力掘削土は共に調査区域内に仮置きした。本体・外構部分にあたっては作業の進捗に応じて調査区を3分割して調査を行った。完掘後の空中写真撮影も3回実施した。

土坑は基本的に深く、半蔵では掘削しきれないこと、地山と遺構埋土に比較的明瞭な色調差が認められるが、遺構が深くなるにつれそれらの色調が近似し、深部での断面形状の正確な把握が困難であったこと、湧水が著しく遺構埋土の色調を確認しながら掘削できないことから、該当する遺構には断ち割りを行った。断ち割り前に平面プランの形状をあらかじめ計測し、平面形状が不明にならないよう努めた。断ち割り後、土層断面図作成・写真撮影等を行い完掘した。

土坑の埋土は検出面付近のしまりは良いものの、土坑内部（下層）の埋土はしまりが悪く、さらに湧水するため、掘削を急いでいる限り埋土が断ち割り側に流れ出してしまうことがあった。そのため、土層断面図や土層断面写真を作成できることもあり、エレベーションのみとなっている断面図もある。

なお、平成29年度発掘作業のうち北・東側よう壁部分については表土掘削の深さが深く、遺構が消失していると考えられ、本来は令和元年度調査で確認した遺構がそのまま延長すると思われる。

調査期間中には、越谷市中学生社会体験チャレンジ事業の受入れを行い、北・栄進・武藏野・新栄・西・光陽中学校の生徒計54名が発掘作業に参加した。また、越谷市文化財ボランティアも発掘作業を行い、のべ55名の参加があった。令和2年1月10日には現地説明会を実施し60名の参加があった。

(2) 調査成果の概要

東方西口遺跡における初の本格的な発掘調査である。調査区は「II 遺跡の立地と環境」でも触れたように元荒川右岸の自然堤防の先端部に位置し、近世初期から武藏国埼玉郡八条領東方村下組の名主を代々勤めた中村氏の居宅が、調査区北側に烟を挟んで隣接している。

調査区は平成28年まで水田となっており、遺跡は水田耕作土直下で確認される。湧水が著しく、地山をわずかに掘りくぼめるだけで水がしみ出す。地山も粘土であるため、排水は極めて悪い。

なお、遺跡発見の契機となった試掘調査において、調査区北側に隣接する烟を一部試掘したところ、地山は粘土ではなくシルト質の安定した土質となっていた。中村氏の居宅に向かうにつれて地形が高くなり、相対的に地下水位も下がるためシルト層の安定した土質になると想定される。よって中村家の居宅は地形的に高く、安定した位置に構えられていたことが分かる。

一方、調査区南側に行くにつれ、地形が緩やかに下がることとなる。Kグリッド南端付近に自然堤防と後背低湿地の境目と考えられる地形の落ち込みが確認され、その部分に灰色粘土・黒色粘土・灰黄褐色粘土・灰白色粘土が堆積し、遺物包含層となっている。

遺構は土坑16基、溝14条、ピット8基、杭4本が確認された。湧水が著しいという特徴から、井戸や水路としての性格が想定される。遺物の主体は17世紀の陶磁器、瓦質土器、木製品である。中世の遺物は板碑が中心である。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。またグリッドの設定方法は第5図のとおりである。

- (1) 保育所建設工事に伴う盛土層（厚さ80~90cm。10YR4/1褐灰色シルト、礫・コンクリート片等含む）
- (2) 水田耕作土層（厚さ約15cm。2.5Y4/2暗灰黄色シルト~2.5Y4/3オリーブ褐色シルト、しまりやや弱い、粘性強い）
- (3) 水田床土（厚さ2~4cm。場所により存在。N4/0灰色粘土、しまり強い、粘性強い）
- (4) 地山…場所により土質が変化する。以下グリッドと共に列記する。

2J-2 : 5Y3/2 オリーブ黒色シルト、自然由来と思われる炭化物を含む、しまり強い、粘性強い

2J-7 : 5Y5/1 灰色シルト、自然由来と思われる炭化物（植物遺体の炭化物）を含む、しまり強い、粘性やや強い

2J-21 : 2.5Y4/1 黄灰色シルト、黄灰色シルトまだらに含む、砂がち、しまり強い、粘性弱い

2K-6 : 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト、黒褐色シルト微量含む、しまり強い、粘性やや弱い

3J-24 : 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土、しまり強い、粘性強い

6K-5 : 5BG5/1 青灰色粘土、しまり強い、粘性強い、時間が経つと5Y5/3灰オリーブ色を呈する

6M-9 : 2.5Y7/3 浅黄色粘土、植物遺体含む、しまり弱い、粘性強い



第5図 グリッド配置図

3. 遺構

SK01（第15図）

4I-14・15・19・20グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は長軸・短軸共に幅の広いU字状を呈する。規模は長軸3.21m、短軸1.16m、深さ0.44mであり、主軸方向はN-10°-Wである。埋土は細かく細分でき、徐々に埋没したと思われる。土層断面には現れないが、厚さ1mm程度の木質痕跡が上層に広範囲に認められる。

遺物は底面から浮いた状態での出土が多く、陶器、焰烙、かわらけ、板碑、木製品、モモ核7個が出土している。なお、断面図における出土遺物の出土位置は位置関係と高さを表わしているもので、層位と対応しているわけではない。実測遺物は1～6である。出土遺物から遺構の時期は17世紀前半以降であると考えられる。

SK02（第16図）

4I-20、5I-16グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形状は長方形で底面は平坦である。規模は長軸0.77m、短軸0.60m、深さ1.39mである。埋土は板碑（8）より上位は5層に分けられる。下層に行くにつれ、湧水のためかしまりが悪くなる。6層は植物遺体が含まれるため上層よりさらにしまりが弱くなり、6層下は掘削中に崩落したため分層及び土層断面の図化はできなかった。断ち割っているため底面は把握できていると考えている。

板碑の出土状況について、まず8について碑面を上に向けて置き、8の上に碑面を下に向かた7、次に碑面を下に向けた9を置いている。8は底面より92cm上と、かなり浮いた状態で出土する。10は遺構側面にもたれかかる状態で出土している。

SK03（第16図）

4J-2グリッドに位置し、SK04と並ぶように構築されている。平面形は円形で、断面形状は底面が平坦に近いU字状を呈する。規模は長軸0.70m、短軸0.61m、深さ0.84mである。埋土は2層に分けられ、遺構の深さに対してほぼ中央付近の2層中から、紹聖元宝と棒材（11）が見つかっているほか、SK08出土遺物と接合した16、板碑細片、モモ核が出土している。

SK04（第16図）

4J-2・3グリッドに位置し、SK03と並ぶように構築されている。平面形は円形で、断面形状はU字状を呈する。規模は長軸0.87m、短軸0.84m、深さ1.25mである。断ち割り中に埋土が崩落し、土層の図化が出来なかった。また、遺構の肩も崩落したため、一部検出段階で作成した平面図と整合を取った復元線となっている。遺物は出土していない。

SK05（第17図）

4I-7グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形状はU字状を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.87m、深さ1.15mである。断ち割り中に埋土が崩落し、土層の図化が出来なかった。また、遺構の肩も崩落し

たため、一部検出段階で作成した平面図と整合を取った復元線となっている。遺物は出土していない。

SK06（第17図）

4I-22・23グリッドに位置する。試掘トレンチにより遺構の一部を切っているが、平面形は長楕円形であると考えられる。断面形状は先のやや尖り気味のU字状を呈する。長軸は現存値で0.83m、短軸0.68m、深さ1.10mである。断面は位置にもよるが一部オーバーハンプする部分がある。1層から13・14の板碑、12の香炉が出土しているが、1層は2層を掘り込むような堆積状況であることから、掘り返した部分に12～14を廃棄し、その後埋没したものと思われる。また、底面からは桶底板（15）が出土している。他にモモ核が1個出土している。14の板碑は文保二年（1318年）銘のものである。

SK07（第17図）

4I-24、4J-4グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形状は不整形なU字状を呈する。規模は長軸0.62m、短軸0.56m、深さ0.78mである。上層から下層にいくにつれしまりが弱くなり、6層には植物遺体が多く含まれる。遺物は焰烙底部細片のみが出土し、時期の判別はできないが、他遺構の焰烙の年代観から遺構の帰属時期17世紀前半以降であると思われる。

SK08（第18図）

4J-3・8グリッドに位置し、SK09と並ぶように構築されている。SK08の平面形は不整形で、断面形状はU字状を呈する。規模は長軸0.96m、短軸0.92m、深さ1.70mである。断ち割り中に3層が崩落したため十分な記録が取れなかったが、3層はさらに分層できる可能性がある。3層は植物遺体を多く含むためしまりの悪い土層となっており、崩落した要因となっている。

3層中には木製品が多く出土するが、廃棄されたような状況であり、木製品相互の関係性は認められない。16はSK03との接合遺物であり、3層途中から出土している。

SK09（第18図）

4J-3・8・9グリッドに位置し、SK08と並ぶように構築されている。SK09の平面形は円形で、断面形状はU字状を呈する。規模は長軸0.72m、短軸0.68m、深さ1.15mである。断ち割り中に2層が崩落したため観察が十分にできなかったが、2層はさらに分層できる可能性がある。2層はSK08の3層よりもしまりが良いものの、SK08と同様に植物遺体を多く含むためしまりが悪く、崩落した要因となる点は共通する。

25は1層と2層から出土したものが接合しており、底面からは短刀（26）が出土している。26は切先が北東を向き、刃部が遺構底面に向いた状態で出土している。

SK10（第17図）

3I-19・20・25グリッドに位置し、SD03に切られる。平面形は円形と思われ、底面から縁にかけて砂（4層）が堆積し、検出時には遺構の縁に砂が巡っていた。SD03の切り合い部で砂が途切れるため、SD03がSK10を切っていることは容易に把握できた。規模は長軸0.89m、短軸0.85m、深さ0.27mであり、

遺構西側が深く掘り込まれている。遺物は出土していない。

SK11（第19図）

6I-12グリッドに位置する。平面形は不整形である。規模は長軸0.67m、短軸0.56m、深さ0.12mであり、断面形状は浅い弧状を呈する。本調査区で最も浅い土坑である。遺物は出土していない。

SK12（第19図）

7I-19グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形状は箱状を呈する。規模は長軸0.94m、短軸0.93m、深さ0.56mであり、ほぼ正円形を呈するため明確な主軸を持たない。埋土には砂（2層・5層）を若干含む。4層中ほどから31が、底面付近から27～30が出土している。本製品以外に遺物は出土していない。

SK13（第18図）

6J-1・6グリッドに位置する。平面形状は円形で、断面形状はU字状を呈する。試掘調査時に検出し、今回の調査で再度掘削した土坑である。掘削を進めると湧水するだけでなく、試掘トレンチ内に存在するため試掘トレンチ内に集まつた水が遺構内に流れ込むこともあり、掘削は困難を極めた。半截や断ち割りができる状態ではなく、土層断面の確認が困難であったため、掘削した土質の違いから底面を認定した。規模は長軸0.85m、短軸0.75m、深さ1.62mであるが、試掘調査時にトレンチの掘削が深かったこともあります、本来は25cmほど高い位置で検出が可能であったと思われる。よって、深さは1.8m以上と推測される。

遺物は2層中から小刀と柄（33・34）、板碑2基（35・36）が出土した。それ以外に遺構の際に木質痕跡が認められたが、取り上げられないほど腐朽していた。35は完形であり碑面が下、36は碑面を上に向けて出土した。33は刃部と思われる側を上に向けて出土した。32の焰烙は2層よりも下から出土している。出土した焰烙から遺構の時期は17世紀前半以降であると考えられる。

SK14（第19図）

4L-18グリッドに位置する。南側が調査区外に延びている。近世遺物を含む落ち込み埋土を掘り込んでいることから、比較的新しい土坑と考えられる。規模は長軸0.60m、短軸は現存値で0.48m、深さ0.26mであり、断面形状は東西の肩の角度が異なる台形状を呈する。遺物は出土していない。

SK15（第27図）

5J-24・25、6J-21グリッドに位置する。試掘トレンチにより遺構中央の形状が不明であるが、平面形状はやや不整形な長方形を呈すると思われる。規模は長軸3.60m、短軸1.13m、深さ0.20mであり、断面形状は箱状を呈する。SD10を避けるような遺構プランとなっているが、上部が削平され、かつ底面に起伏があった場合には、本来SD10と同一遺構であってもプランが離れて検出される可能性がある。さらに埋土の色調が近似することからも同一遺構の可能性もあるが、本報告では別遺構として名称を付した。

遺物は細片のみであり、肥前系磁器、焰烙が出土するほか、モモ核6個が含まれる。モモ核が多く出

土することはSD10と似た特徴である。

SK16（第19図）

5I-21、5J-1グリッドに位置する。試掘トレンチにより遺構北側が失われているが、平面形状は円形を呈すると思われる。また、試掘トレンチに向かって遺構底面が立ち上がるため、遺構の最深部は試掘トレンチに切られていないと思われる。現存する規模は長軸0.92m、短軸0.62m、深さ1.27mであり、断面形状は不整形なU字状を呈する。最下層の4層は植物遺体を多く含みしまりが弱いため、断ち割った段階で既に崩落が始まっていた。遺物は出土していない。

SD01（第20図）

2J・3J・4Jグリッドに位置する。平成29年度調査区で3本の溝を検出したうちの最も北側の溝である。令和元年度の調査では2J-4・5、3J-1・2・3グリッドで平成29年度調査の延長部分が検出されたのち、Y = -1473ライン以東で再び検出されると、遺構の幅や深さ等様相が大きく変化する。2J・3Jグリッドの調査範囲外の部分を掘削すれば遺構形状が変化する理由が判明すると考えられる。今回の報告では、平成29年度調査区及び2J-4・5、3J-1・2・3グリッド検出部分をSD01とし、Y = -1473ライン以東をSD08として区別した。

平成29年度調査区では断面形状はゆるい弧状を呈する。規模は長軸13.92m、短軸2.00m、深さ0.23mであるが、前述のとおりSD08にSD01が含まれるため数値は便宜的なものである。

遺物は全て細片で、焰烙、肥前系磁器、瀬戸美濃系陶器のほか、実測遺物として38の木製椀（漆器椀）が2Jグリッド遺構肩部付近から出土している。

SD02（第21図）

3H-25、4H-21、3I-5・10・15、4I-1・6・11グリッドに位置する。平面形状は直線で、端部は隅丸方形である。平成29年度調査区のうち北・東側よう壁部分の調査は表土の掘削が深く、遺構上部がほとんど消失てしまっているが、それでもSD02の底面がわずかに検出されていたため、SD02が続いていることが確認されている。それを考慮した規模は、長軸は現存値で6.10m、短軸1.33m、深さ0.22mであり、主軸方向はN - 5° - Eである。断面形状は不整形であるが基本的には弧状を呈すると思われる。SD03と深さは異なるものの、主軸方向や幅がほぼ同一であることから一連の遺構の可能性がある。底面は砂に近いシルトの3層が堆積している。

遺物は肥前系磁器細片、モモ核1個、タニシと思われる巻貝の殻が出土している。

SD03（第21図）

3I-15・20・25、4I-11・16グリッドに位置する。SK10を切る。試掘トレンチにより遺構中央の形状が不明であるが、平面形状は隅丸長方形であると考えられ、断面形状は箱状を呈する。規模は長軸3.26m、短軸1.26m、深さ0.33mであり、主軸方向はN - 5° - Eである。底面には砂（7層）が堆積している。SD02でも底面に砂がちなシルトが堆積しており、埋土の様相が似ている。

遺物は全て細片で、磁器、かわらけ、モモ核1個が出土している。実測遺物は不明銅製品の39である。

SD04（第21図）

5I-9・10・14・15グリッドに位置する。平成29年度調査区まで続くと考えられるが、平成29年度調査の表土掘削が深く消失してしまっている可能性があること、遺構の深さが浅いこともあり、延長については判然としない。直線的な溝で、断面形状は凹凸がみられる。規模は現存長1.71m、短軸0.64m、深さ0.04mである。主軸は座標南北方向と一致する。SD04の西側には昭和期に存在していた畦痕跡が並行して認められ、関係するのであればSD04は比較的新しいかもしれない。遺物は出土していない。

SD05（第21図）

5I-10・15・20グリッドに位置する。平成29年度調査区まで続くと考えられるが、平成29年度調査の表土掘削が深く消失してしまっている可能性があること、遺構の深さが浅いこともあり、延長については判然としない。直線的な溝で、一度の分断が認められる。断面形状は弧状を呈する。規模は分断も含めて計測すると現存長3.75m、短軸0.30m、深さ0.04mである。SD04と同様、主軸は座標南北方向と一致する。SD05の西側には昭和期に存在していた畦痕跡が並行して認められ、SD04と同様にSD05も含め比較的新しいかもしれない。遺物は木片、モモ核1個が出土している。

SD06（第22図）

6I-12・13・14・15、7I-11グリッドに位置する。平面形状はT字状を呈し、東西方向と南北方向で様相が異なる。別の溝であることを考慮し切り合い関係を検討したが、両者に明確な切り合いは確認できなかった。なお、南北方向に延長する部分は平成29年度調査区まで続くと考えられるが、平成29年度調査の表土掘削が深く消失してしまっている可能性があり、判然としない。

東西方向に延長する部分は長軸7.23m、短軸0.65m、深さ0.10mである。主軸方向はN-84°-Wである。ここから42が出土している。

南北方向に延長する部分は現存長0.53m、短軸0.48m、深さ0.63mである。主軸は確認できるプランが限定的であるため不明である。断面形状は箱状で、埋土は5層に分けられる。遺物は全て3層からの出土である。40・41のかわらけがまとまった状態で出土しているほか、珍しいもので43の骨製サイコロが出土している。実測遺物以外の出土品は無い。

SD07（第22図）

7I-11・12・16・17グリッドに位置する。平成29年度調査区まで続くと考えられるが、平成29年度調査の表土掘削が深く消失してしまっている可能性があり判然としない。現存長2.11m、短軸1.19m、深さ0.36mを測る。主軸方向はN-2°-Eである。検出された範囲のほぼ中央部には、底面から浮いた同様なレベルで木製品がまとまって出土している。ただし木製品の形状等を見ると相互の関連性は無さそうに思われる。埋土は5層に分けられ、一部に砂が含まれるが基本的には粘土で埋没している。

遺物は実測遺物44~47の木製品のほか、培塿片が出土している。遺構の帰属時期は、出土した培塿では時期は不明だが、他遺構の培塿の年代観から17世紀前半以降であると思われる。

SD08（第23図・第24図・第25図）

3J・4Jグリッドに位置する。SD01の続きを含まれると考えられるが平成29年度調査区から様相が大きく変化することから別遺構名を付したものである。

平面形状は不整形を呈し、遺構北側から東側にかけての浅い部分と、南側の深い部分に大きく分かれ。土層の観察から、北側の浅い部分（5・6層）が埋没した後に南側の深い部分（3・4層）と東側の浅い部分（1・2層）が掘削された可能性がある。

現存長は11.74m、短軸は4.82m、深さは深い部分で0.62mを測る。主軸は全体ではN-76°-Wであるが、深い部分のみで計測するとN-60°-Wとなる。

深い部分の東端には杭が短軸方向に2群打ち込まれ、木が溝に渡されるように出土する。第V章で後述するが、これらは簡易的な足場状の機能をもった施設と想定した（足場状痕跡）。

足場状痕跡から北東側に2mほど離れた場所からはカゴ状の木製品が出土している。それ以外に陶器、焰烙、かわらけ、板碑、鉄滓等本調査区としては多くの遺物が出土しており、さらにモモ核も28個と多く出土している。モモ核は全体的に散らばるわけではなく、比較的まとまって出土している。鉄滓は合計121.1g出土している。実測遺物は48～115である。遺構の時期は遅くとも17世紀中頃までに取まると考えられる。

SD09（第26図・第29図）

2J・3J・4J・3K・4K・5K・6K・7Kグリッドに位置する。平成29年度調査区のうち西側よう壁部分から令和元年度調査区まで続き、調査区を区画するように存在する。平成29年度調査区のうち東側よう壁部分では表土掘削が深く消失してしまっている可能性があり判然としないが、おそらく遺構が続いているものと想定される。

現存長は56.12m、短軸1.56m、深さ0.47mを測る。主軸はN-77°-Wであり、SD10・SD11・SD13及び現在の道路と似た軸方向となる。底面の深さを見ると西から東に向かって下がっており、第V章で後述するが、南北方向の構堀に連結していたと考えられる。

断面形状は弧状を呈し、第26図b-b'・c-c'断面では埋土の中でひときわ色調が白い4層（灰黄色粘土層）が特徴的である。第26図a-a'の3層中にも灰黄色粘土が若干認められることから、この層は比較的広範囲に、薄く堆積していると思われる。ある時期のSD09の底面であったのだろう。

遺物は陶器、肥前系磁器碗、焰烙、キセル火皿等が出土している。実測遺物は116～120である。出土遺物から、遺構は少なくとも18世紀前半頃までは存続していたと考えられる。

SD10（第27図・第28図）

6J・6K・7Kグリッドに位置する。西端が試掘トレンチにより形状不明で、東端付近も試掘トレンチにより切られている。遺構中央付近で一段深くなり、その周辺から遺物が集中して出土する。ただし、遺物は底面から浮いた状態の検出面直下からの出土である。溝西側が深く、東に向かうにつれ浅くなり、調査区壁際で終息する。西側はSK15を避けるようなプランとなるが、溝の上部が削平され、かつ底面に起伏があった場合には今回の調査のように本来同一遺構であってもプランが離れる可能性がある。埋土の色調が近似することからも同一遺構の可能性もあるが、SD10とSK15として別遺構の名称を付し

た。規模はSD10とした部分のみで長軸15.51m、短軸2.18m、深さ0.39mを測り、主軸はN-82°-Wとなる。

遺物は陶器、磁器、熔渣、板片、瓦が出土し、モモ核6個は遺構西側にまとまって出土する。実測遺物は121-127である。17世紀初頭からそう下らない段階の埋没と考えられる。

SD11（第28図・第29図）

2K・4K・5K・6K・5L・6Lグリッドに位置する。平成29年度調査区のうち西側よう壁部分から令和元年度調査区まで続く。平成29年度調査区のうち東側よう壁部分では、表土掘削が深く消失している可能性があり判然としないが、おそらく遺構が続いているものと想定される。

平成29年度調査区では切り合いがなく検出は容易であったものの、令和元年度調査区ではSD11が落ち込みに切られしており、さらに埋土の色調がSD11と落ち込みで近似しているため、平面での検出は困難であった。よって、調査区全体図・調査区分割図・遺構図ではSD11南側肩は断面観察からの復元線（破線）となっている。SD11の現存長は50.14m、短軸2.96m、深さ0.26mを測り、主軸はN-77°-Wとなる。

第20図の断面図から見た遺構西側底面の標高は約1.86m、第29図から見た遺構東側底面の標高は約1.72mであり、西から東に向かって下がっている。

遺物は陶器、磁器、土師器、熔渣、キセル、瓦、モモ核2個が出土している。実測遺物は128-134である。遺構の時期は17世紀後半以降であると考えられる。

SD12（第30図）

2L-3・4・8・9グリッドに位置する。南側は搅乱によって切られ、北側は調査区外へ延びる。南北方向に延長すると考えられる。直線的に延長した場合にあたる3Iグリッドでは検出できないため、調査区外で終息するか、方向を調査区外の西側に変える可能性がある。現存長2.62m、短軸1.64m、深さ0.36mを測り、主軸はN-16°-Eとなる。遺構肩付近に杭が一対（135・136）打ち込まれているが、杭の深さや形状に統一性は無い。杭が地中にに入る深さは、落ち込み埋土除去後の段階において、東側の杭（135）で0.40m、西側の杭（136）で0.58mである。落ち込み埋土がSD12埋土を覆っているため、SD12は落ち込みよりも古い。遺物は135・136以外には出土していない。

SD13（第28図）

6K・7Kグリッドに位置する。西側は終息し、東端は試掘トレンチにより切られている。現存長7.58m、短軸0.52m、深さ0.08mを測り、主軸はN-82°-Wとなる。断面形状は弧状を呈する。遺物は摩滅したかわらけ細片が出土している。

SD14（第30図）

4K-25、5K-21グリッドに位置する。西側は調査区外に延び、東側は終息する。現存長2.15m、短軸0.52m、深さ0.11mを測り、主軸はN-80°-Wとなる。遺物は出土していない。

P02（第31図）

6K-10グリッドに位置し、P03と並ぶように構築されている。平面形は円形である。規模は長軸0.36m、短軸0.30m、深さ0.32mであり、内部を一部だけ深く掘り込んでいる。遺物は陶器細片、摩滅したかわらけ細片が出土している。

P03（第31図）

6K-10グリッドに位置し、P02と並ぶように構築されている。平面形は円形である。規模は長軸0.37m、短軸0.37m、深さ0.35mであり、断面形状は不整形なU字状を呈する。遺物は長さ1.5cm程の銅線、筆軸かと思われる木製品が出土している。

P04（第31図）

5K-2グリッドに位置し、P06・P07と密集して構築されている。平面形は不整形である。規模は長軸0.56m、短軸0.46m、深さ0.15mであり、底面は平坦で北側が垂直気味に立ち上がるのに対し、南側はゆるやかに立ち上がる。遺物は出土していない。

P05（第31図）

6K-6グリッドに位置し、P08・P09と密集して構築されている。平面形は不整形である。規模は長軸0.91m、短軸0.70m、深さ0.09mであり、断面形状は浅い弧状を呈する。遺物は細片の陶器、焰烙、かわらけが出土している。実測遺物は137の磁器碗である。

P06（第31図）

5K-2・7グリッドに位置し、P07と並ぶように構築されている。平面形は不整形である。規模は長軸0.38m、短軸0.23m、深さ0.04mであり非常に浅い。遺物は出土していない。

P07（第31図）

5K-2グリッドに位置し、P06と並ぶように構築されている。平面形は不整形である。規模は長軸0.22m、短軸0.19m、深さ0.08mである。遺物は出土していない。

P08（第31図）

6K-1・2・6・7グリッドに位置し、P05・P09と密集して構築されている。平面形は不整形である。規模は長軸0.27m、短軸0.20m、深さ0.11mである。遺物は出土していない。

P09（第31図）

6K-7・8グリッドに位置し、P05・P08と密集して構築されている。平面形は不整形である。規模は長軸1.91m、短軸0.73m、深さ0.17mである。遺構西寄りの底面から木製品（139）が出土し、それに沿うように細い木が1本打ち込まれている。遺物は他に細片の陶器、肥前系磁器、焰烙、かわらけが出土している。実測遺物は139の他に138の陶器片底部がある。

杭1・杭2・杭3（第31図）

6K-10グリッドに集中する。地中に入る深さ、加工もまちまちであり、相互の関係性は不明である。全て杭中心を通るように断ち割ったが掘り込みは確認できず、全て打ち込まれたものと判断できる。

杭1は側面4面を平滑に加工し、先端は2方向から尖らせ両刃状にしている。やや斜めに打ち込まれており、地中に入る深さは0.29mを測る。

杭2は先端を2方向から削り杭先としている。側面は基本的に加工されず、何か所か存在する枝分かれ部分を切り落としているが、根元から切っていないため突起状に残っている部分がある。まっすぐに打ち込まれており、地中に入る深さは0.18mを測る。

杭3は途中で裂けているが、これは表土掘削時に重機のバケットが引っかかり裂けてしまったものである。重機で地山は掘削していないため、地山直上の水田耕作土下位に杭の頭が少し出していた事が分かる。地中に斜めに入っているが、断ち割り断面の観察から地山に乱れがないため、重機の影響で傾いてしまったというより当初から傾いて打ち込まれていたものと思われる。先端を加工し尖らせる。側面は基本的に加工されず、何か所か枝分かれした部分を切り落としているが根元から切っていないため突起状に残っている部分がある。地中に入る深さは0.71mを測る。

杭4（第31図）

5K-8グリッドに独立して存在する。杭中心を通るように断ち割ったが掘り込みは確認できず、打ち込まれたものと判断できる。側面は全面平滑に加工されており、先端は3方向から切り落とすことで杭状に尖らせている。地中に入る深さは0.64mを測る。

落ち込み（第28図・第29図）

Kグリッド南端付近に自然堤防と後背低湿地の境目と考えられる地形の落ち込みが確認されている。令和元年度調査区において第28図土層断面を見ると、落ち込み埋土はSD11の北側肩とほぼ同じ位置から確認でき、第29図を見てもSD11北側肩付近に落ち込み埋土のD層が堆積している。よって落ち込みはSD11北側肩付近から始まっていると考えられる。

平成29年度調査区においては第20図を見るとSD11の南約5mから落ち込んでいるため、落ち込みは東に向かうにつれ北側に張り出していると考えられる。埋土はA～Fの5層に分けられ、ほぼ水平に堆積する。

遺物は陶器、磁器、焰硝、瓦、石製品、鉄製品が出土している。実測遺物は141～143・145～148・157・159・160であり、18世紀中ごろには埋没していた可能性がある。

圧痕（第6図・第7図・第9図・第12図・第13図）

4I・5I・6Iグリッド、5K・6Kグリッドで確認できる。基本的には円形の圧痕が直線状に並ぶものであるが、場所により様相が異なる。圧痕は直径6cm程度と小さく、深さは3cm以下と浅い。遺構検出面直上が水田耕作土であるため圧痕が耕作の影響で消失している可能性や、調査時の遺構検出作業で消失している可能性がある。車輪を持つ民具の痕跡と考えられるが、どのような民具でどのような目的の痕跡なのかは分からぬ。大きく3つのグループ、計5条確認できる。

4I・5I・6I グリッドでは円形の圧痕が一直線的に並ぶが、両側にいくにつれてその配置が乱れていく。直線的に並んだ部分の長さは11.92mを測る。圧痕が延長する方向はN-86°-Wである。

5K・6K グリッドでは①東西方向に並行して延びる2条、②南北方向に並行して延びる2条の計4条確認できる。

①東西方向に並行して延びる2条の間隔は芯々距離で0.45mを測る。そのうち北側の圧痕列は長さ4.59mを測り、延長する方向はN-85°-Wである。擾乱や試掘トレンチをまたいだ東側には延長していない。擾乱は昭和期のものと考えられるため、圧痕はそれより古いものの可能性が高い。試掘トレンチ以東にも続いており、南側の圧痕列は長さ11.29mを測る。延長する方向はN-86°-Wである。圧痕は円形圧痕のみではなく、長方形圧痕とセット関係にあり、「|○○○|」で一単位となる。北側の圧痕と南側の圧痕が同じ単位で並行するため、2輪の民具を動かした痕跡の可能性がある。

②南北方向に並行して延びる2条の間隔は芯々距離で0.56mを測る。そのうち西側の圧痕列は長さ6.15mを測り、延長する方向はN-3°-Eである。東側の圧痕列は長さ0.44mと短く、延長する方向はN-3°-Eである。前述の東西方向の圧痕に対して約90°振れている。圧痕は「|○○|」で一単位となり、東西方向に並行して延びる圧痕と比べ、長方形圧痕間の円形圧痕数が1つ少ない。SD09との切り合い関係は確認していない。

足跡（第12図）

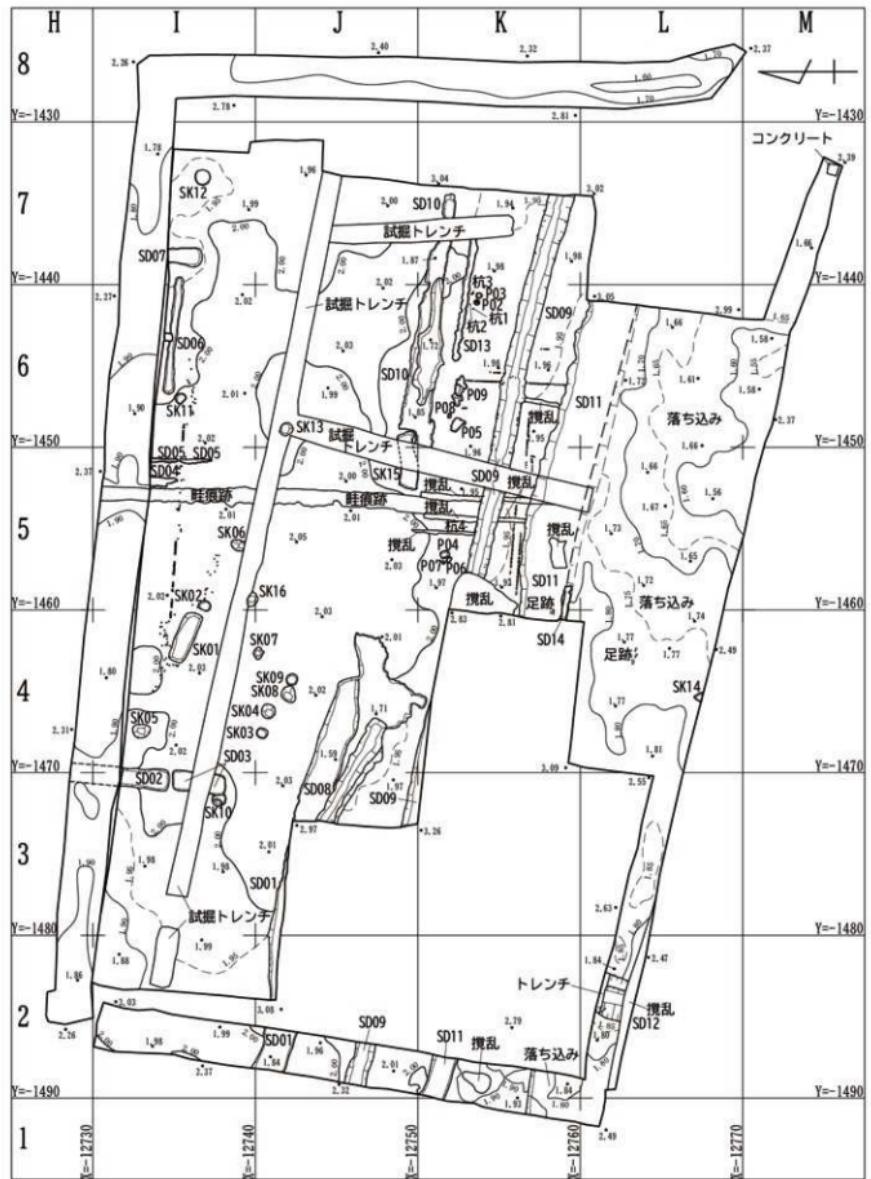
SD11内である4K-25 グリッドと、落ち込み内である4L-9 グリッドにおいて確認され、プランから足跡と推測した。落ち込み内の地山には無数の黒色粘土が入り込んでいるため（写真図版17写真111）、本例が足跡であれば地山内に入り込む黒色粘土も、プランからは判別できない足跡の可能性がある。その場合、調査区内には無数の足跡が存在することになる。

4K-25 グリッドの足跡が進む方向はSD09やSD11と概ね平行するため、当時の地形に沿った方向に向かって歩行していることになる。

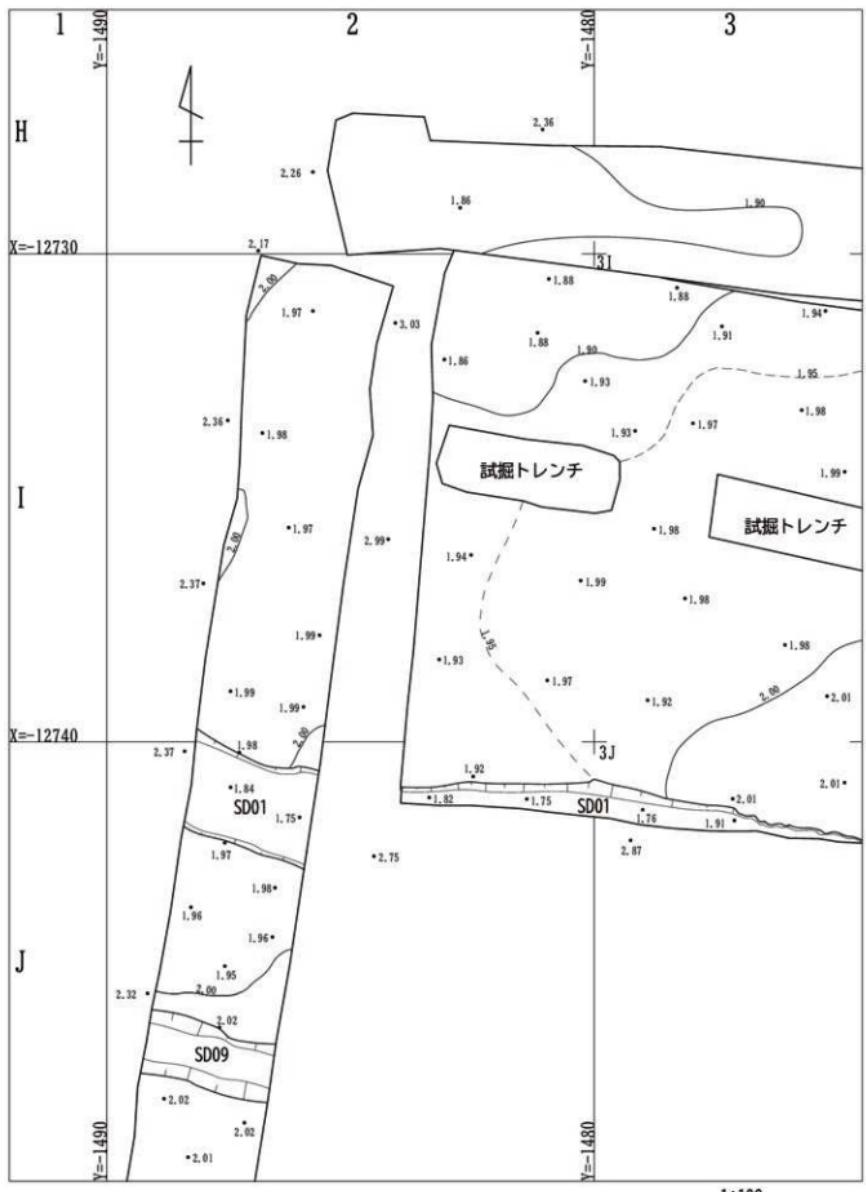
畦痕跡（第6図・第9図・第13図）

5I・5J・5K グリッドで確認できる。この部分が黄褐色粘土を呈するため検出できる。土地所有者である中村治雄氏によれば、畦痕跡部分にかつて畦があり、そこを境に水田が2枚に分かれていたが、その後水田を1枚になるよう整理したことである。

5K グリッドでは畦痕跡の両側に現代遺物を含む擾乱が認められる。第V章で後述するが、明治9年作成と思われる地引番号図には畦痕跡の位置に対応する部分に南北方向の土地の区割り線が引かれていることから、少なくとも明治9年には畦が存在していたと考えられる。

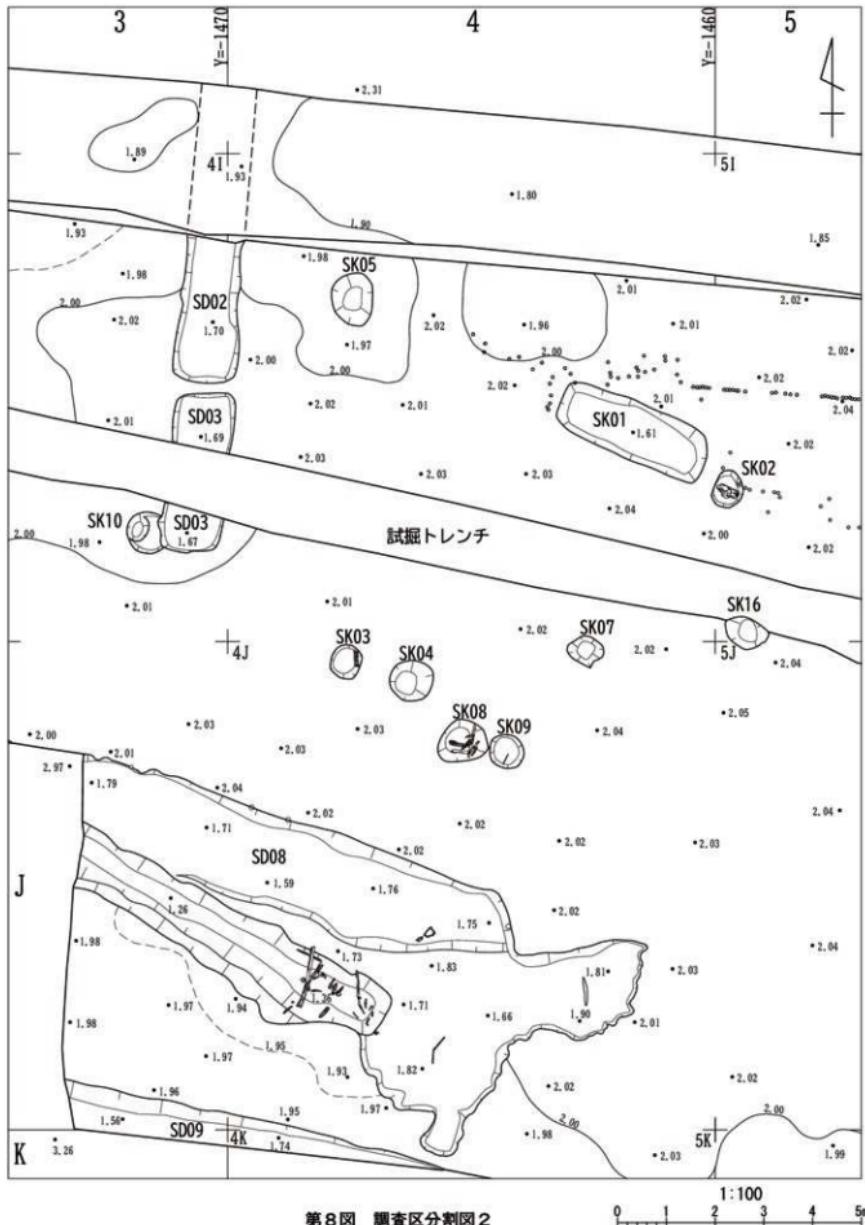


第6図 調査区全体図

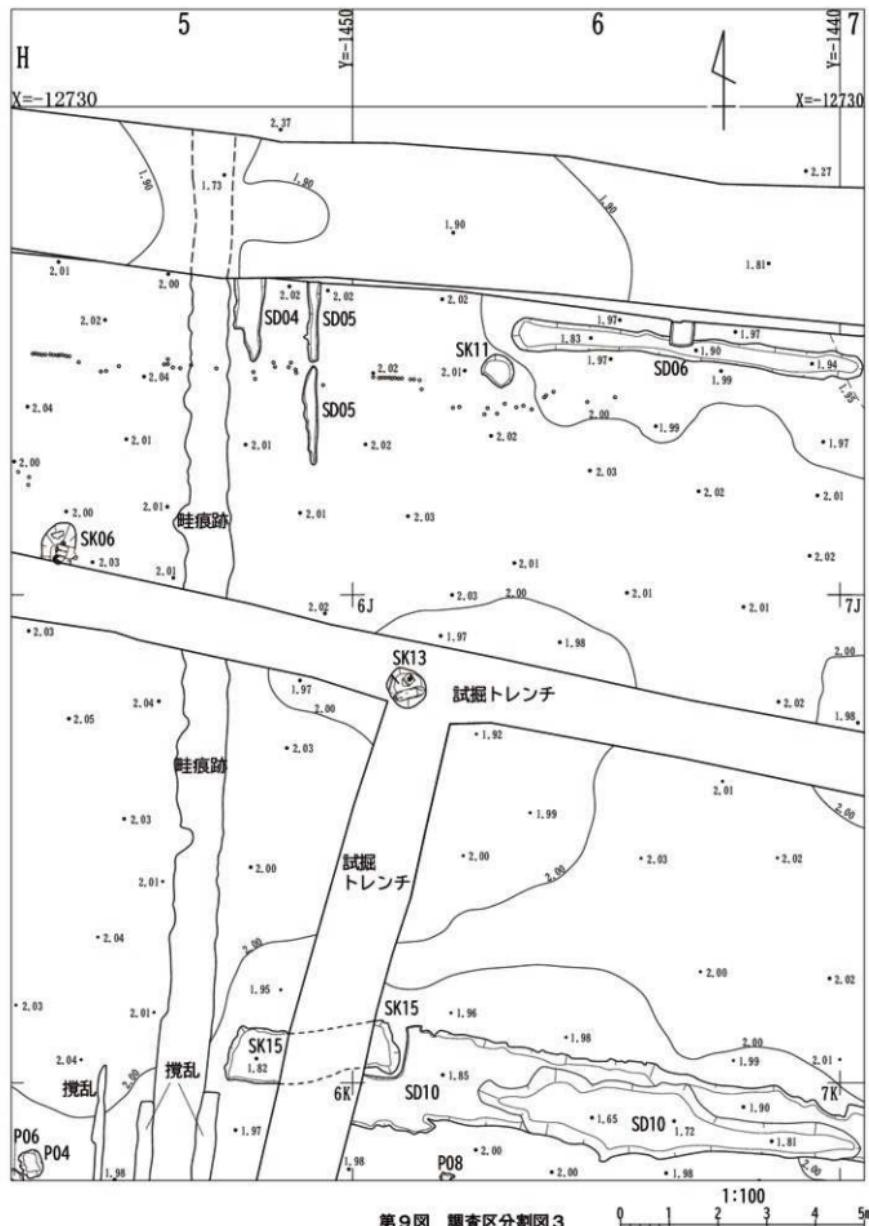


第7図 調査区分割図 1

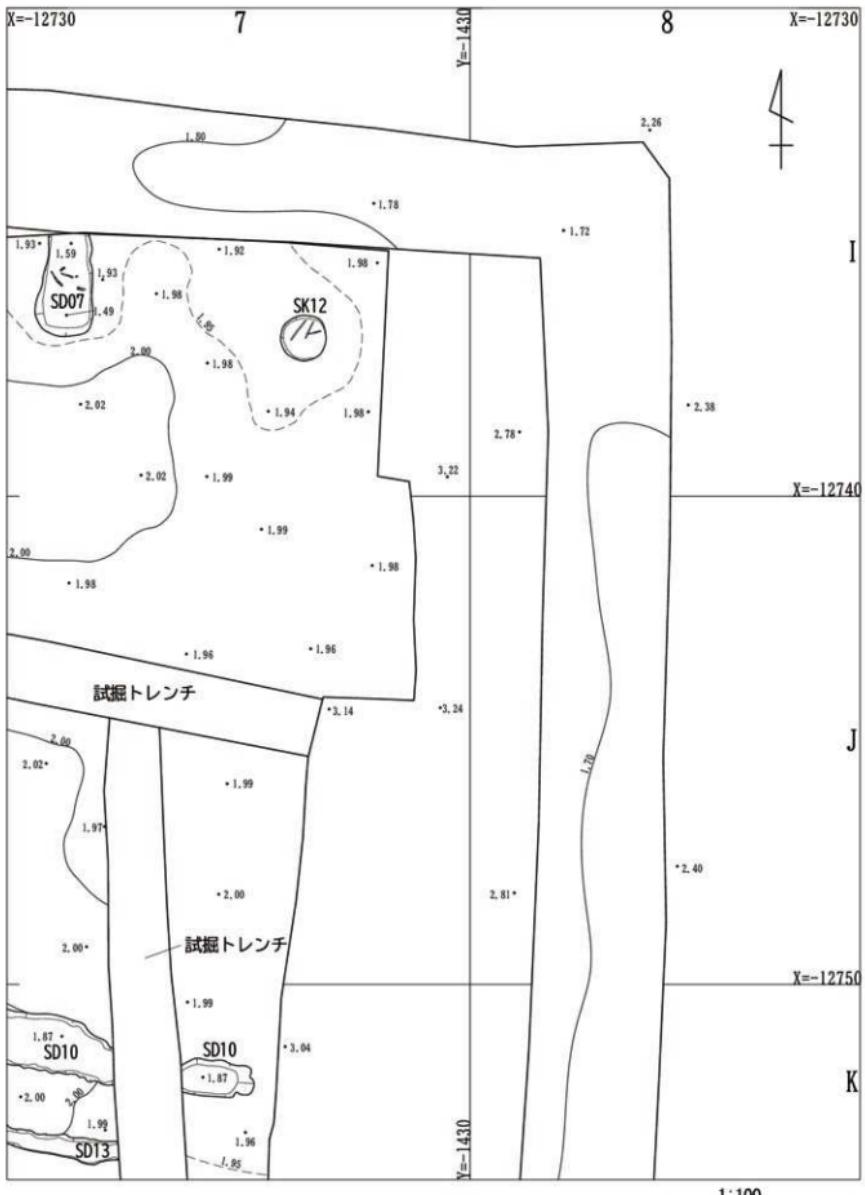
1 2 3 4 5m



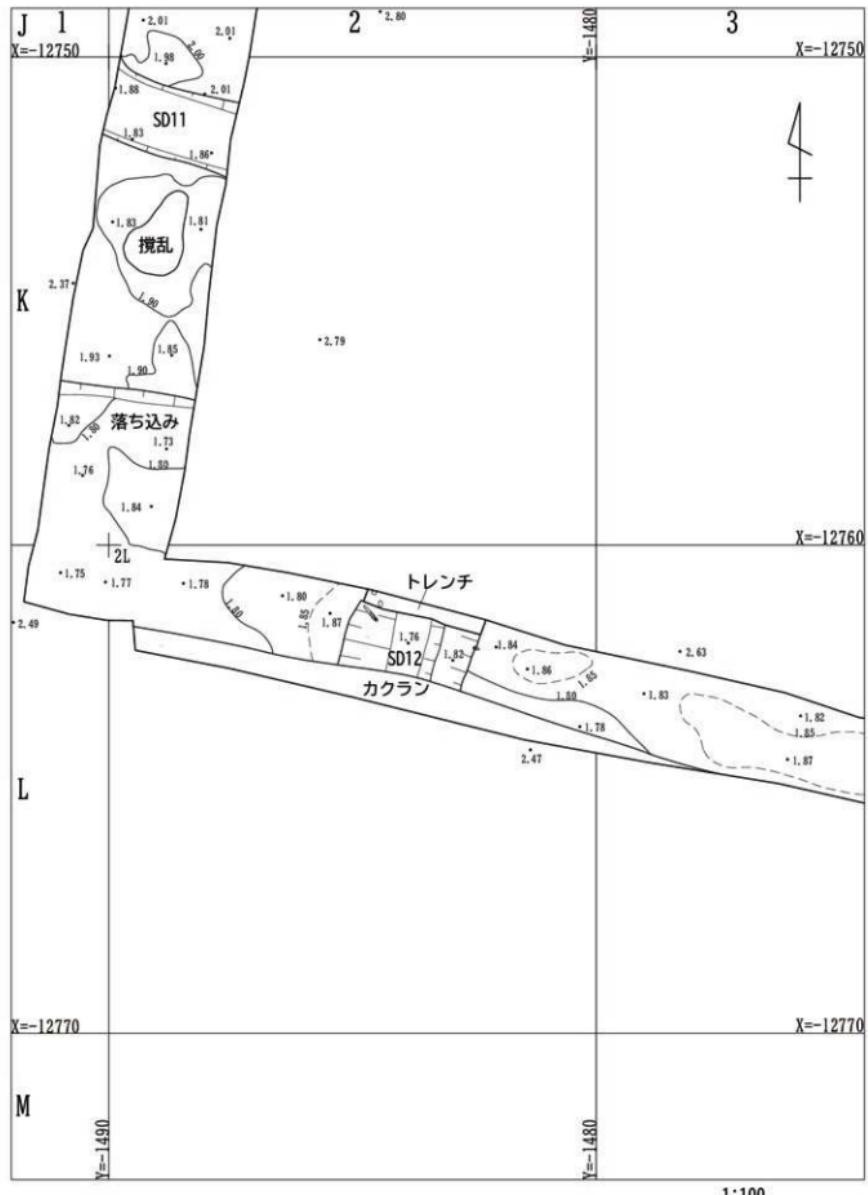
第8図 調査区分割図2



第9図 調査区分割図3

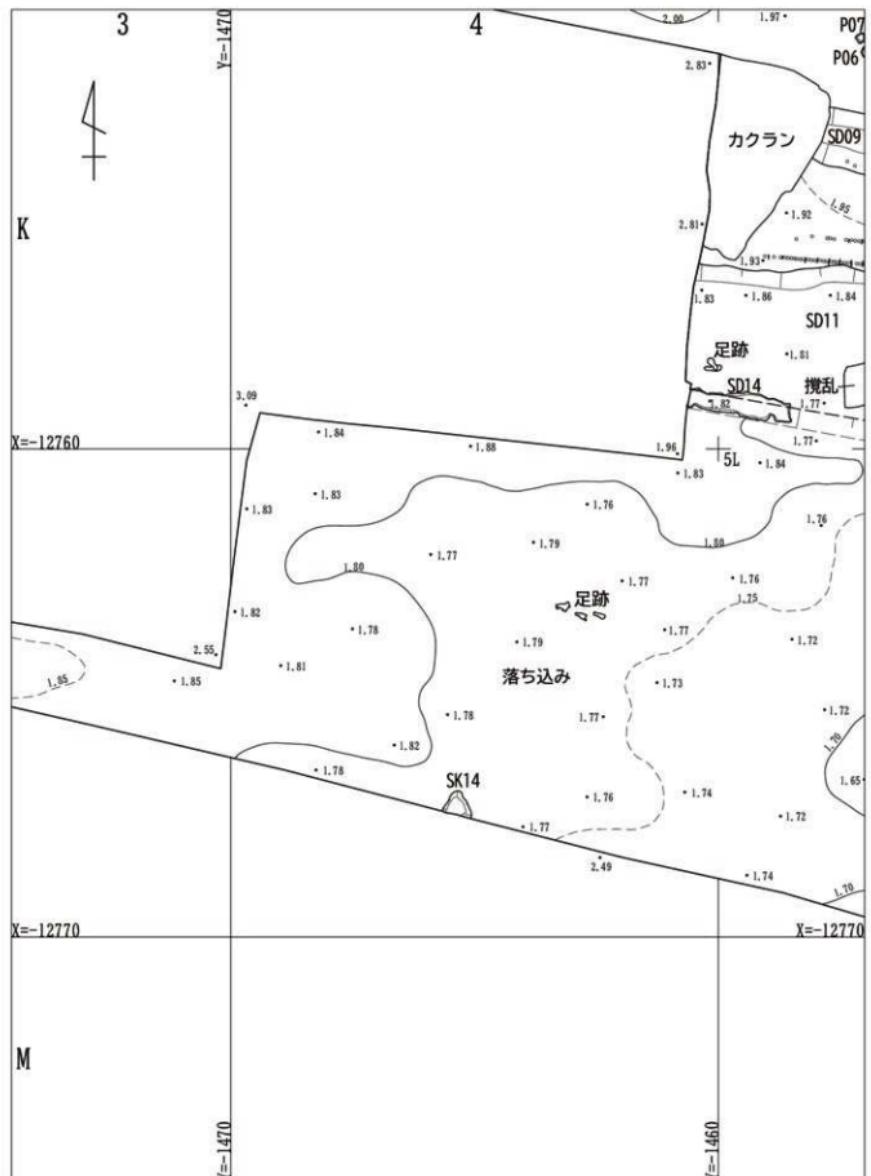


第10図 調査区分割図4



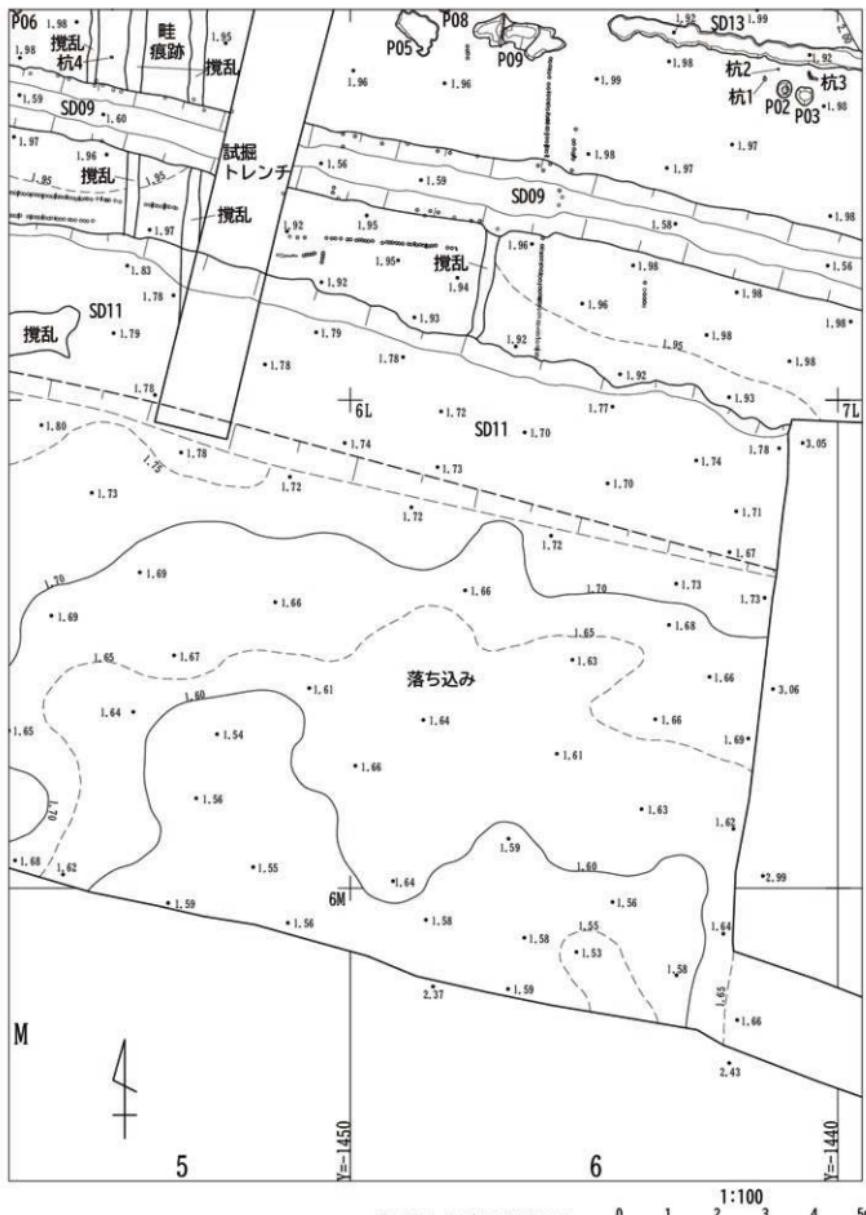
第11図 調査区分割図5

1:100
0 1 2 3 4 5m

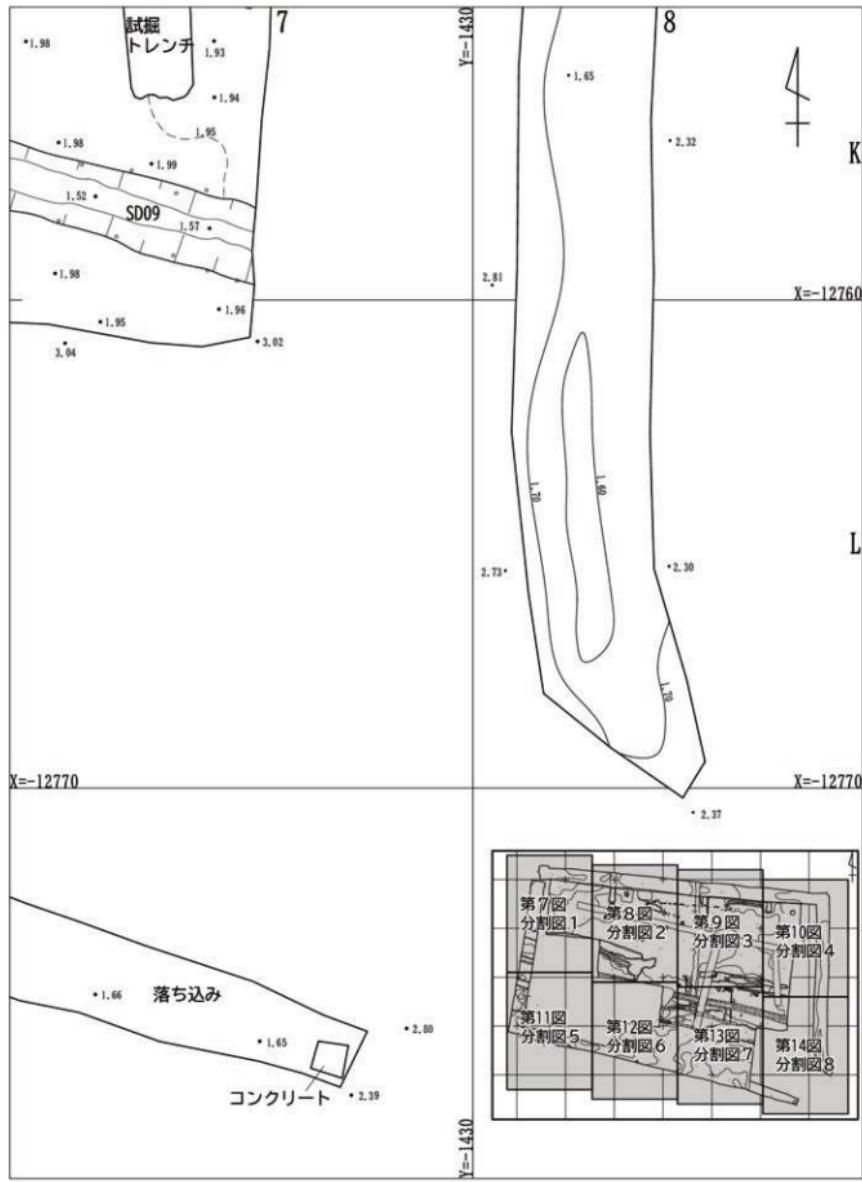


第12図 調査区分割図6

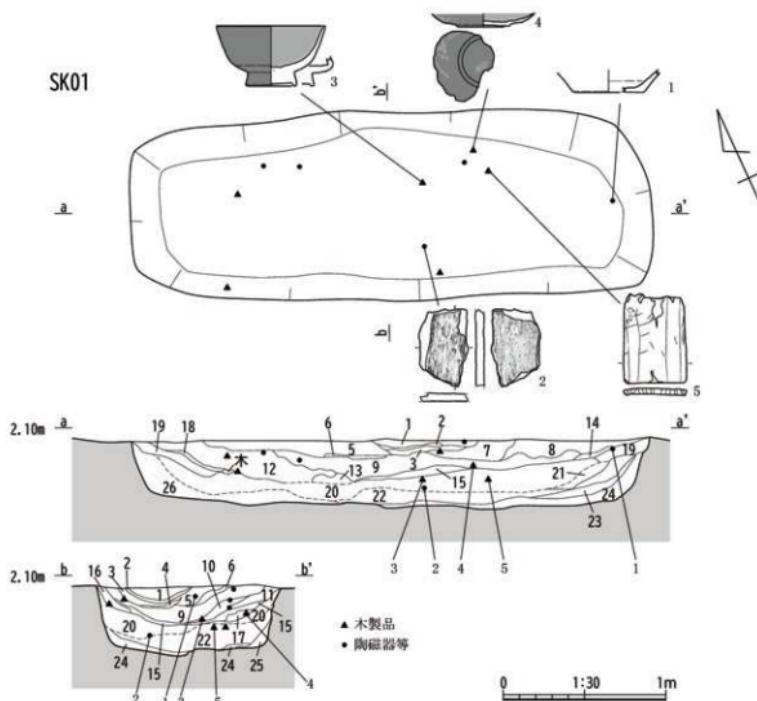
1:100
0 1 2 3 4 5m



第13図 調査区分割図7



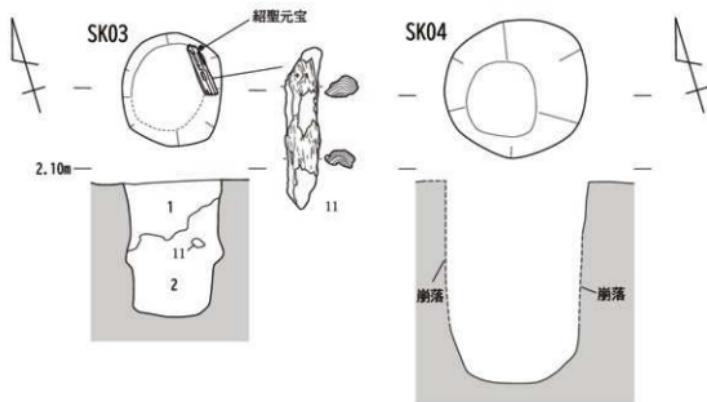
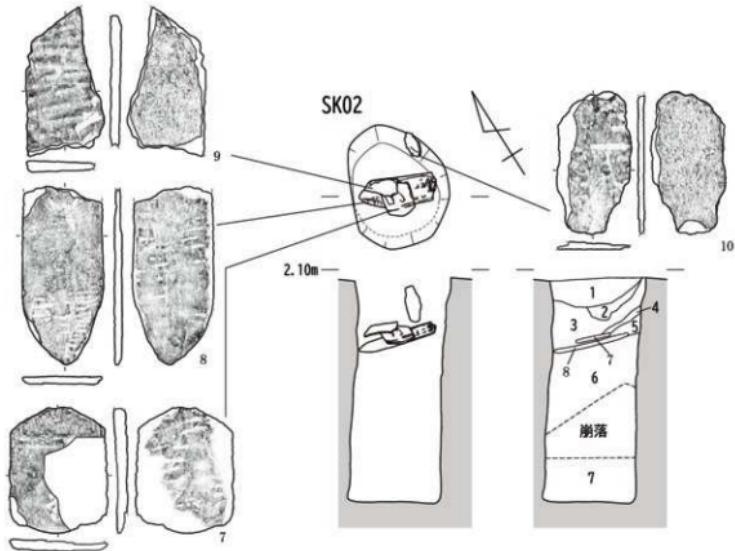
第14図 調査区分割8



SK01

- 1 7.5Y 4/1 灰色粘土 しまり強い 粘性強い
- 2 炭屑
- 3 10Y R 5/2 灰黄褐色粘土 にぶい黄橙色粘土粒10%含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い 木質痕跡か?
- 4 10Y R 4/2 灰黄褐色粘土 しまり弱い 粘性弱い 木質痕跡か?
- 5 25Y 4/2 崩灰黄色粘土 オリーブ灰色粘土を10%含む 明黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 6 炭屑
- 7 7.5Y 3/2 オリーブ黑色粘土 灰白色粘土粒微量含む 炭化物や多く含む しまり強い 粘性強い
- 8 7.5Y 5/1 灰色粘土 灰白色粘土ブロック微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 9 25Y 3/2 崩灰黄色粘土 明黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 10 炭屑 下層との境に木質痕跡(厚さ1mm程度)あり
- 11 25Y 4/2 崩灰黄色粘土 7刷に近似するが混入なし
- 12 25Y 3/2 黒褐色粘土 灰白色粘土ブロック30%含む 混入物により汚い印象 炭化物や多く含む しまり強い 粘性強い
- 13 7.5Y 4/1 灰色粘土 しまり強い 粘性強い
- 14 25Y 4/2 崩灰黄色粘土 明黄褐色粘土40%含む しまり強い 粘性強い
- 15 炭屑
- 16 7.5Y 4/1 灰色粘土 しまり強い 粘性強い
- 17 7.5Y 8/1 灰白色粘土 オリーブ黑色粘土30%含む しまり強い 粘性強い
- 18 10Y R 3/2 黑褐色粘土 木質痕跡 しまり強い 粘性強い
- 19 25Y 5/2 崩灰黄色粘土 灰白色粘土ブロック微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い うらごめ土?
- 20 崩壊のため上層注記できず
- 21 5Y 2/1 黒色粘土 しまり強い 粘性強い
- 22 7.5Y 7/1 灰白色粘土 オリーブ黑色粘土40%含む しまり強い 粘性強い
- 23 5Y 2/1 黒色粘土 炭化物や多く含む 植物遺体多く含む しまり弱い 粘性強い
- 24 7.5Y 7/2 灰白色粘土 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 25 7.5Y 7/2 灰白色粘土 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 26 7.5Y 4/1 灰色粘土 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い

第15図 遺構図 (SK01)



SK02

- 1 N 4/0 灰色粘土 明緑灰色粘土ブロック微量含む しまり強い 粘性強い
- 2 10 Y 5/1 黒色シルト しまり強い 粘性弱い
- 3 5 Y 4/1 灰色粘土 しまりやや弱い 粘性強い
- 4 5 Y 4/1 灰色粘土 明オリーブ灰色粘土ブロック微量含む しまり強い 粘性強い
- 5 5 Y 4/1 灰色粘土 しまり強い 粘性強い
- 6 5 Y 2/1 黒色粘土 植物遺体多く含む しまり弱い 粘性強い
- 7 5 G Y 4/1 墓オリーブ灰色粘土 植物遺体わずかに含む しまり強い 粘性強い 6層に比べると格段に固い

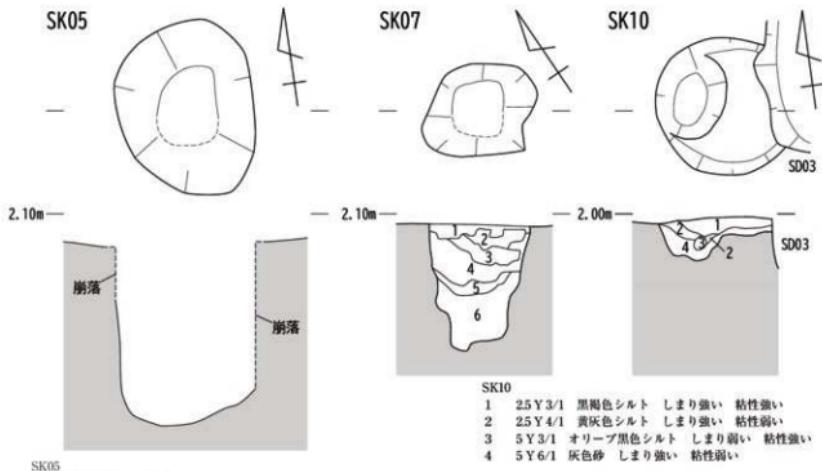
SK03

- 1 N 15/0 黒色粘土 3cm 大のN 6/0灰色粘土ブロックを微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 2 10 Y 2/1 黒色粘土 植物遺体をやや多く含む 3cm 大の明オリーブ灰色粘土ブロック微量含む しまりやや強い 粘性強い

SK04

崩壊のため土層確認できず

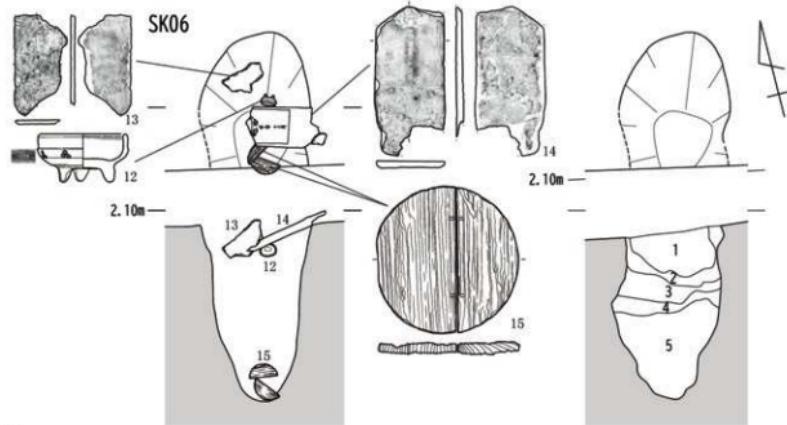
第16図 遺構図 (SK02・SK03・SK04)



SK05
崩落のため土層確認できず

SK07

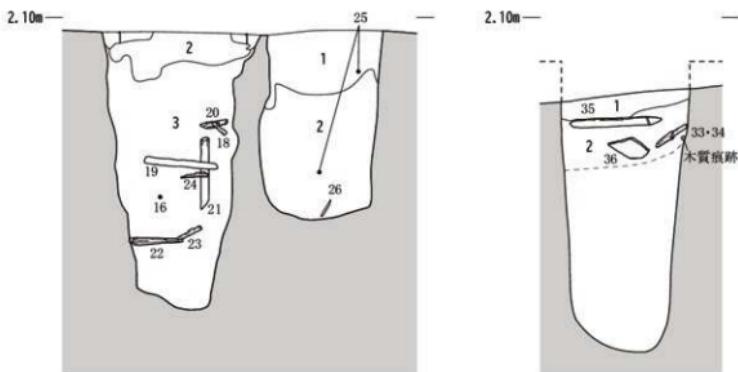
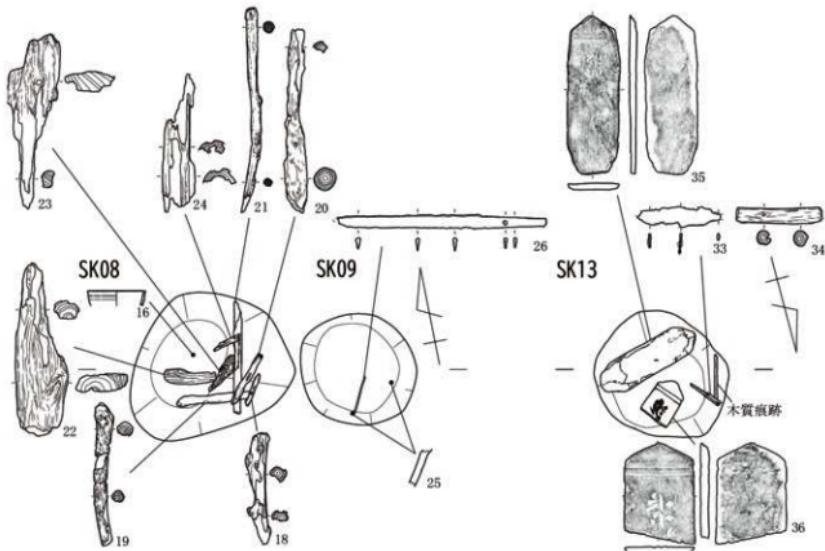
- 1 7.5 Y 4/1 灰色粘土 2層ブロック20%含む しまり強い 粘性強い
- 2 2.5 Y 7/1 灰白色粘土 しまり強い 粘性強い
- 3 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色粘土 2層ブロック30%含む しまり強い 粘性強い
- 4 2.5 Y 3/1 黑褐色粘土 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 5 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト しまりやや弱い 粘性やや強い
- 6 2.5 Y 2/1 黑色粘土 植物遺体多く含む しまりやや弱い 粘性強い



SK06

- 1 2.5 Y 5/1 黄灰色粘土 鉄分多く含み部分的に硬化する 炭化物微量含む しまり強い
粘性強い 握り返しがある
- 2 2.5 Y 7/1 灰白色粘土 しまり強い 粘性強い
- 3 N 4/0 灰色粘土 しまりやや弱い 粘性強い
- 4 2.5 Y 7/1 灰色粘土 しまりやや弱い 粘性弱い
- 5 N 4/0 灰色粘土 オリーブ灰色砂微量含む 炭化物やや多く含む しまりやや強い 粘性強い

第17図 遺構図 (SK05・SK06・SK07・SK10)



SK08

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 オリーブ灰色粘土微量含む 灰化物微量含む しまり強い 粘性強い
 2 25Y4/3 オリーブ褐色シルト シルト質のため削り易い 灰化物微量含む しまり強い 粘性やや弱い
 3 5Y2/1 黒色粘土 植物遺体多く含み、そのためしまりが弱い 粘性強い 塊が立たない

SK09

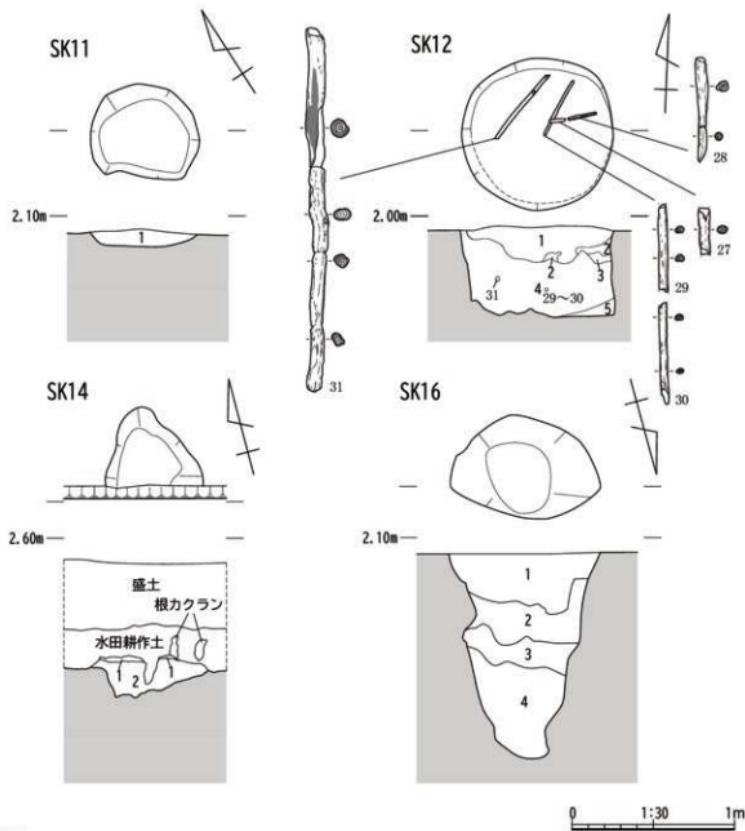
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 灰白色粘土粒微量含む 灰化物微量含む しまり強い 粘性強い
 2 5Y2/1 黒色粘土 植物遺体多く含む しまり弱い 粘性強い SK08の3層よりしまる

SK13

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 灰オリーブ色シルト10%含む しまり強い 粘性強い
 2 潜水著しく半乾できなかったため土層注記できず

0 1:30 1m

第18図 遺構図 (SK08・SK09・SK13)



SK11
1 25Y3/1 黒褐色粘土 しまり強い 粘性強い

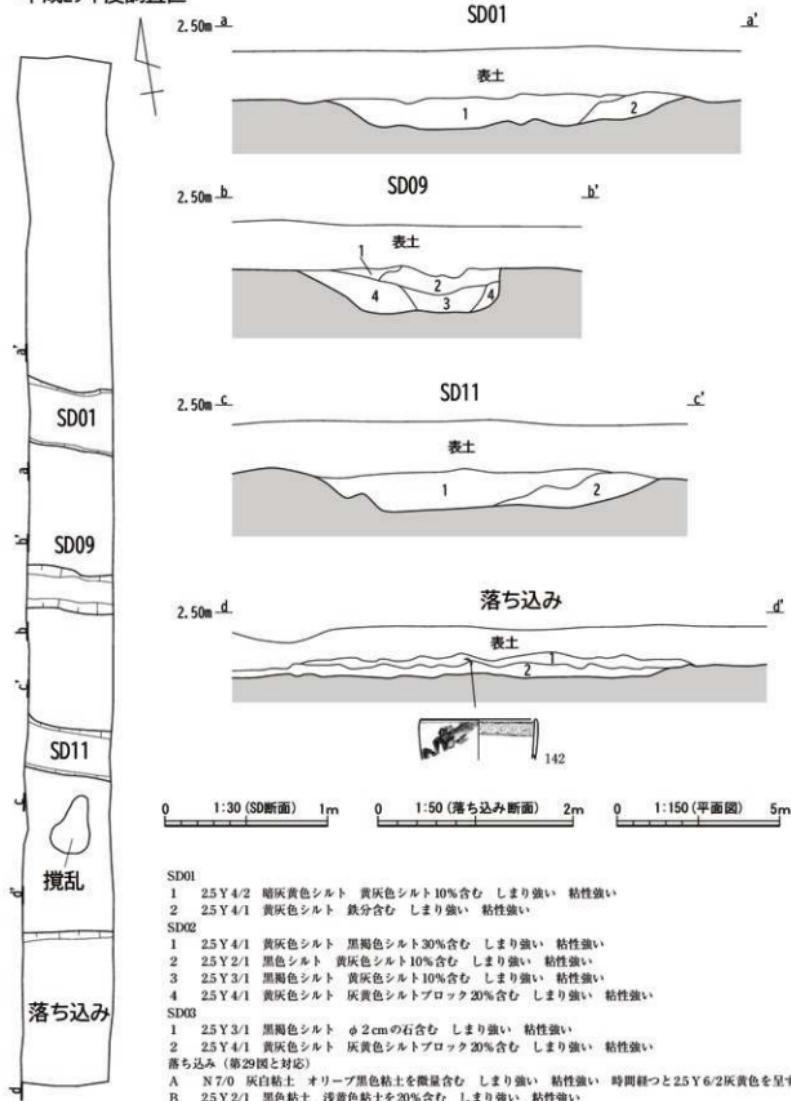
SK12
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまり強い 粘性強い
2 7.5Y6/1 灰色砂 しまり弱い 粘性弱い
3 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまり強い 粘性強い
4 7.5Y2/2 オリーブ黒色粘土 灰色粘土微量含む しまり強い 粘性強い
5 7.5Y6/1 灰色砂 しまり弱い 粘性弱い

SK14
1 25Y3/1 黑褐色粘土 しまり弱い 粘性強い
2 7.5Y2/1 黑色粘土 灰白色粘土20%含む しまり強い 粘性弱い

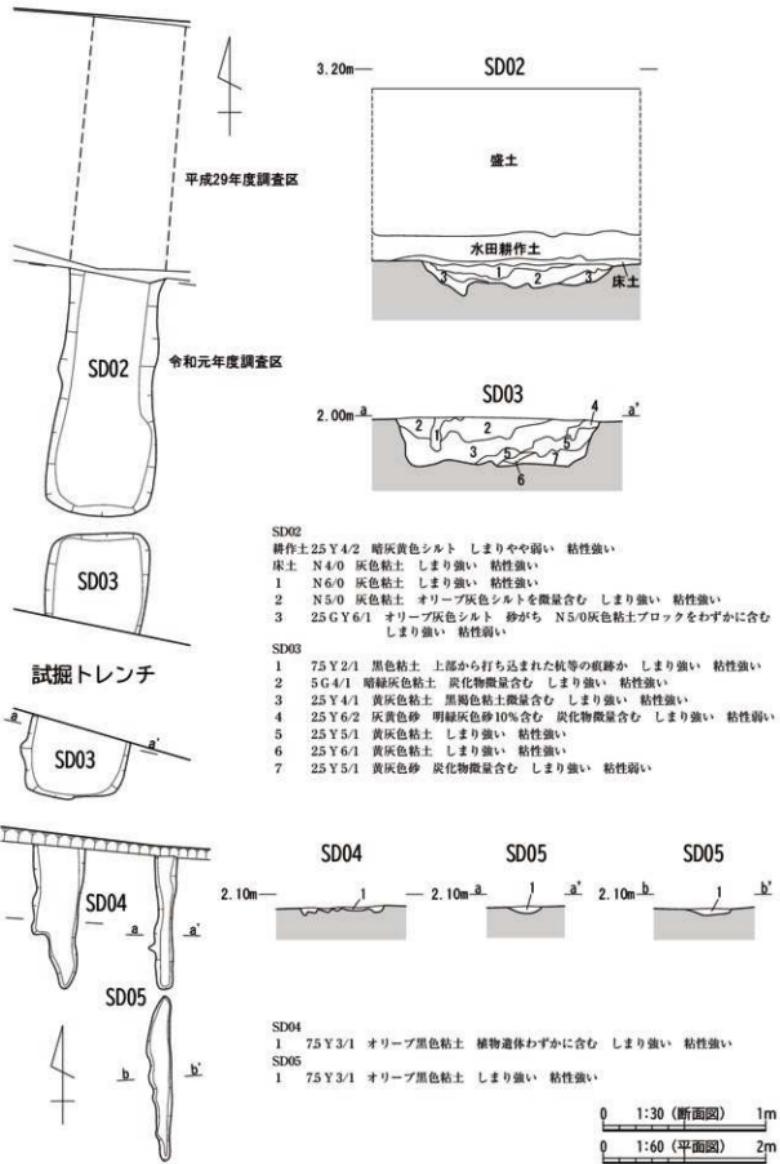
SK16
1 7.5Y5/1 灰色粘土 黑色粘土を微量含む 灰白色粘土微量含む しまり弱い 粘性強い
2 7.5Y4/1 灰色粘土 しまり強い 粘性強い
3 7.5Y2/1 黑色粘土 しまり強い 粘性弱い 水分量多い
4 7.5Y2/1 黑色粘土 色調は3層と同一だが、しまりと植物遺体の多さに違いあり 植物遺体多く含み、しまり弱い 粘性強い
水分量多い

第19図 遺構図 (SK11・SK12・SK14・SK16)

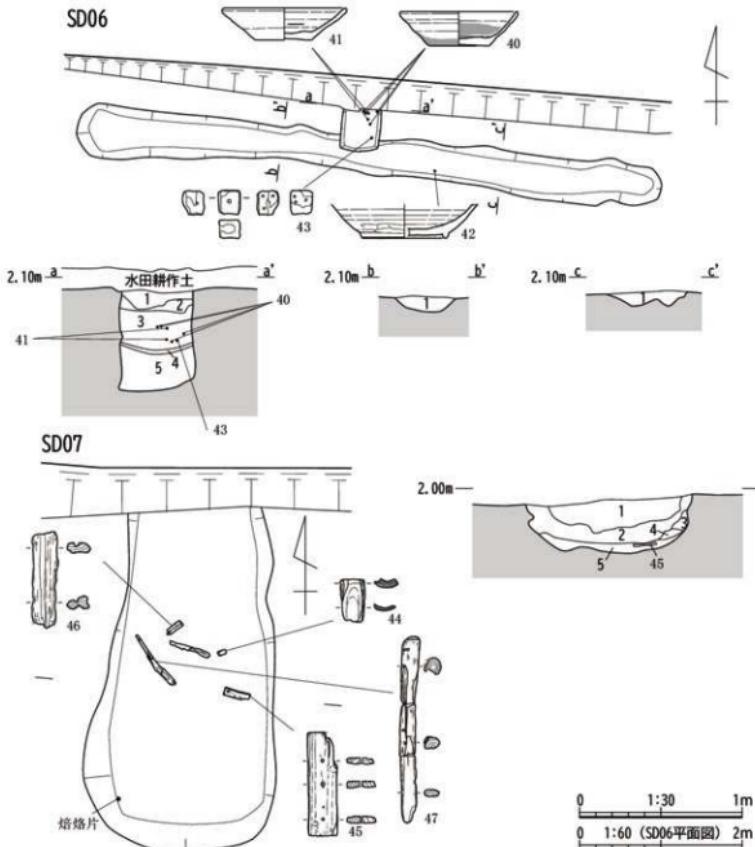
平成29年度調査区



第20図 遺構図 (SD01・SD09・SD11)



第21図 遺構図 (SD02・SD03・SD04・SD05)



SD06 (aa')

耕作土 25 Y 4/3 オリーブ褐色シルト

- 1 N 5/0 灰色粘土 淡黄色粘土ブロック微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 2 N 5/0 灰色粘土 しまり強い 粘性強い
- 3 75 Y 2/1 黒色粘土 しまり強い 粘性強い (1・2層より強い)
- 4 75 Y 2/1 黒色粘土 灰オリーブ色粘土を30%含む しまり強い 粘性強い
- 5 75 Y 2/1 黒色粘土 しまり強い 粘性強い

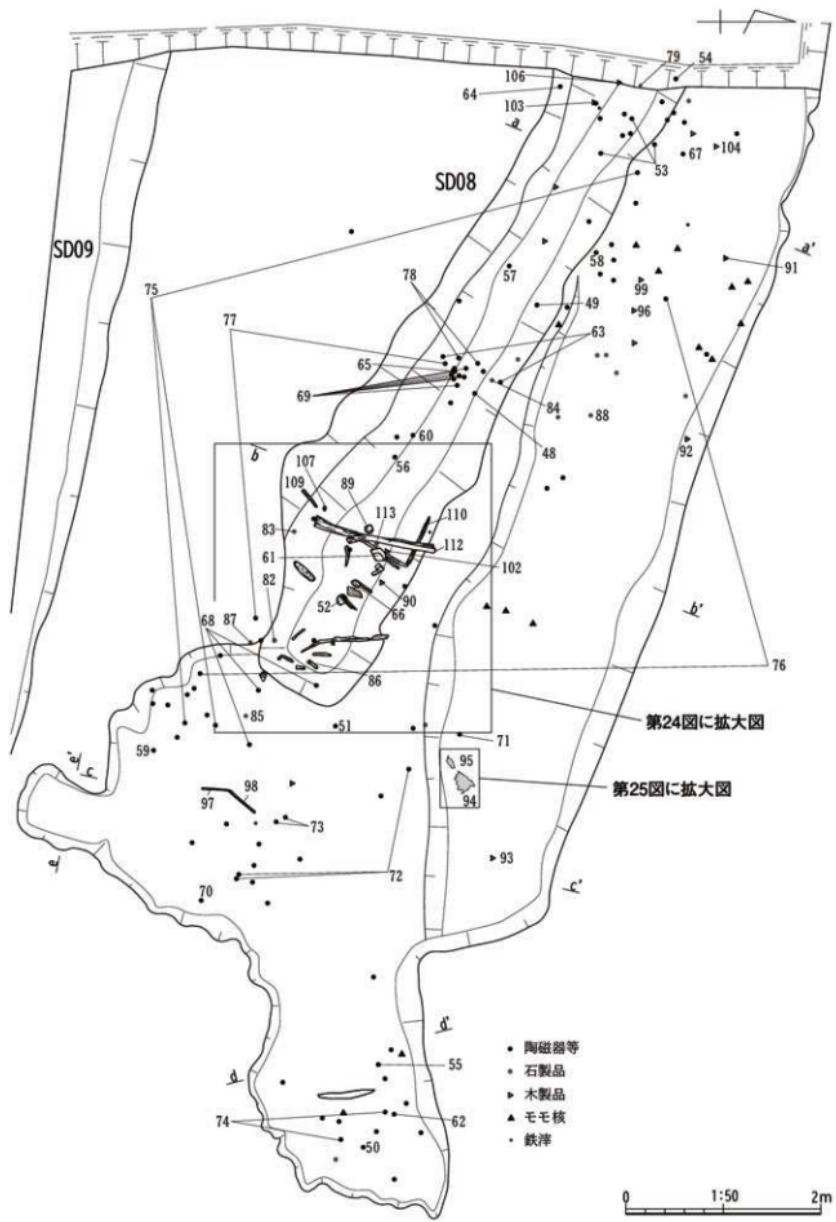
SD06 (bb', cc')

- 1 5 Y 3/1 オリーブ黑色粘土 オリーブ灰色粘土10%含む しまり強い 粘性強い

SD07

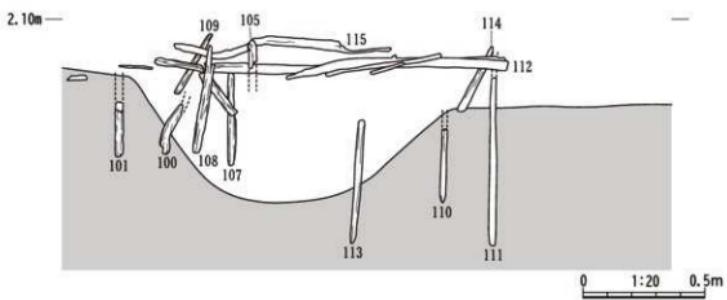
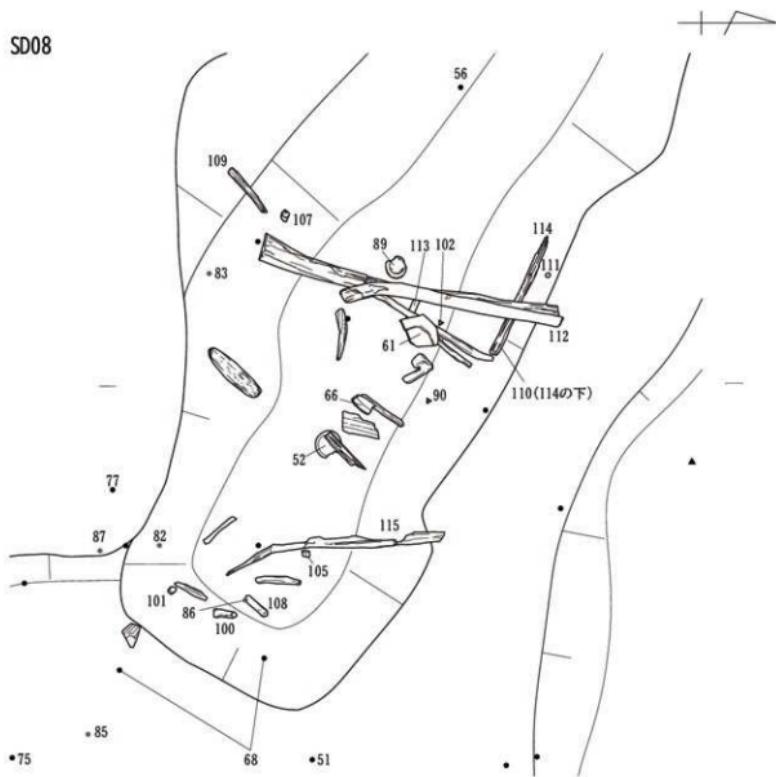
- 1 5 G 5/1 緑灰色粘土 灰白色粘土10%含む 明黄褐色粘土10%含む 黑褐色粘土10%含む 炭化物やや多く含む しまり強い 粘性強い
- 2 25 Y 4/2 嫌褐色粘土 灰白色粘土粒微量含む しまり強い 粘性強い
- 3 25 Y 6/2 灰黃色砂 しまり強い 粘性弱い
- 4 75 Y 7/1 灰白色粘土 炭化物やや多く含む しまり強い 粘性強い
- 5 25 Y 6/1 黄灰色粘土 灰白色粘土微量含む しまり強い 粘性強い

第22図 遺構図 (SD06・SD07)

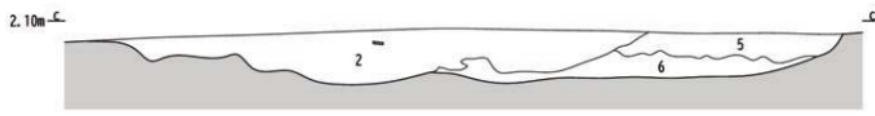
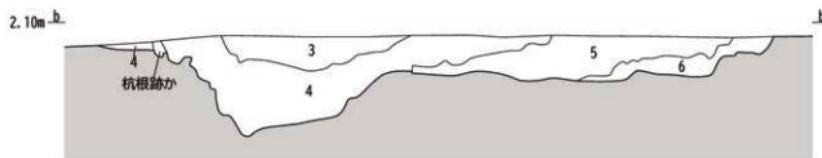
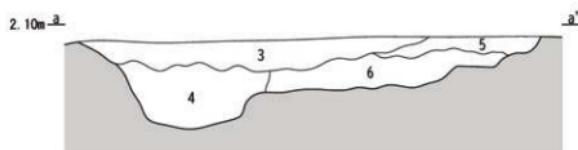
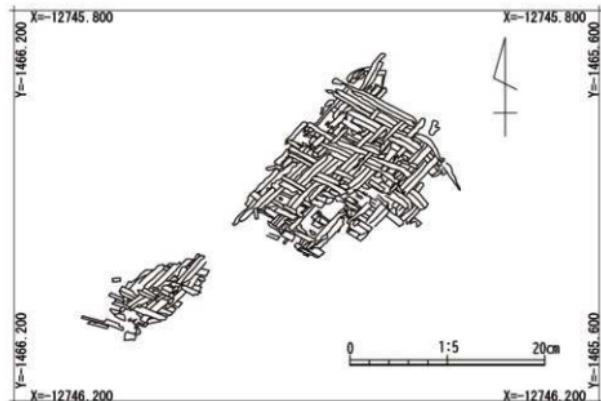


第23図 遺構図 (SD08広域)

SD08



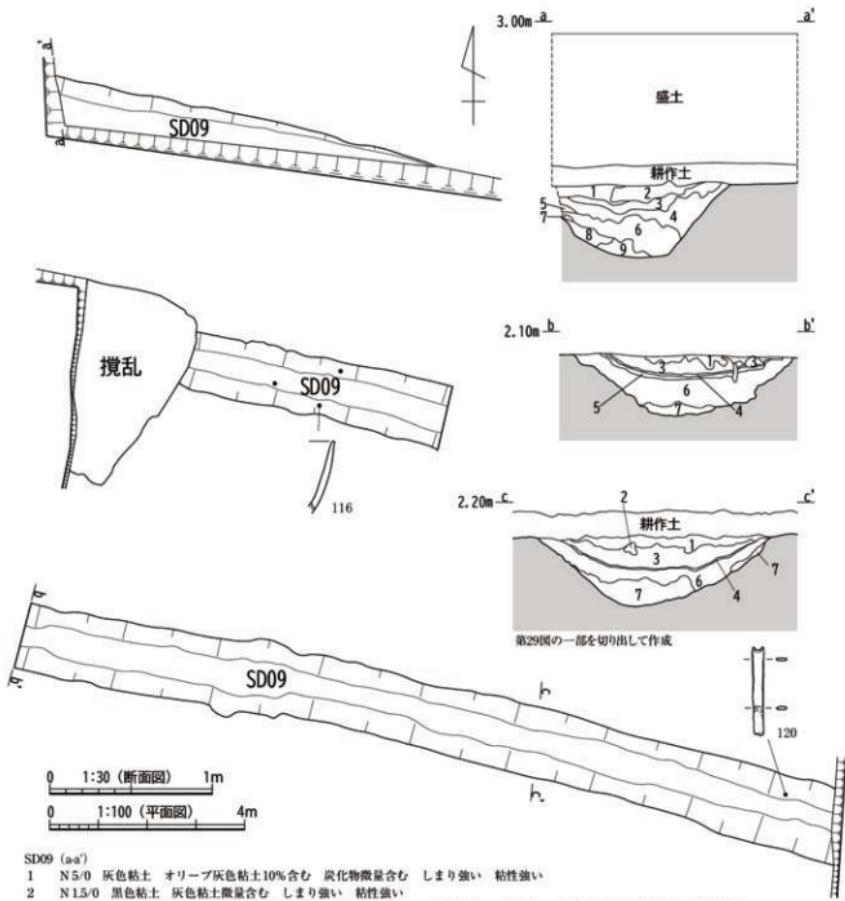
第24図 遺構図 (SD08詳細)



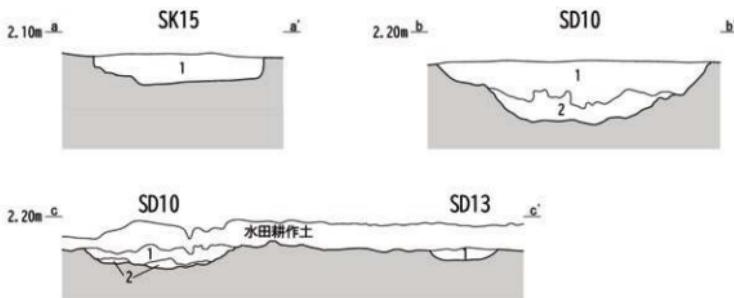
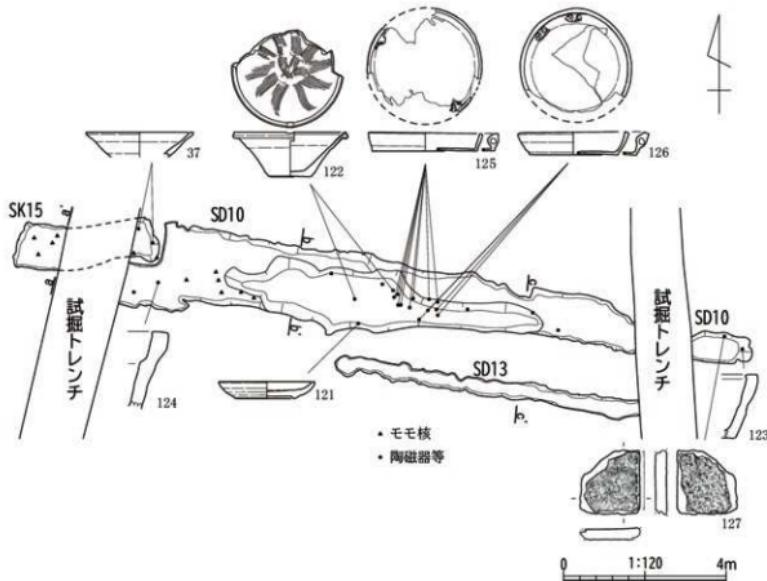
SD08

- 1 2.5Y 4/1 黄灰色粘土 灰白色粘土ブロック10%含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 2 7.5Y 2/1 黒色粘土 オリーブ灰色粘土ブロック微量含む 淡黄色粘土ブロック10%含む しまり強い 粘性非常に強い
- 3 7.5Y 3/1 オリーブ黑色粘土 鉄分含み部分的に炭化する 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 4 5Y 3/1 オリーブ黑色粘土 灰色粘土ブロック微量含む 植物遺体含む 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性強い
- 5 5Y 4/1 灰色粘土 灰白粘土ブロック20%含む 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性強い
- 6 7.5Y 4/1 灰色粘土 灰白色粘土微量含む 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性強い

第25図 遺構図 (SD08カゴ状木製品出土状況・土層断面)



第26図 遺構図 (SD09)

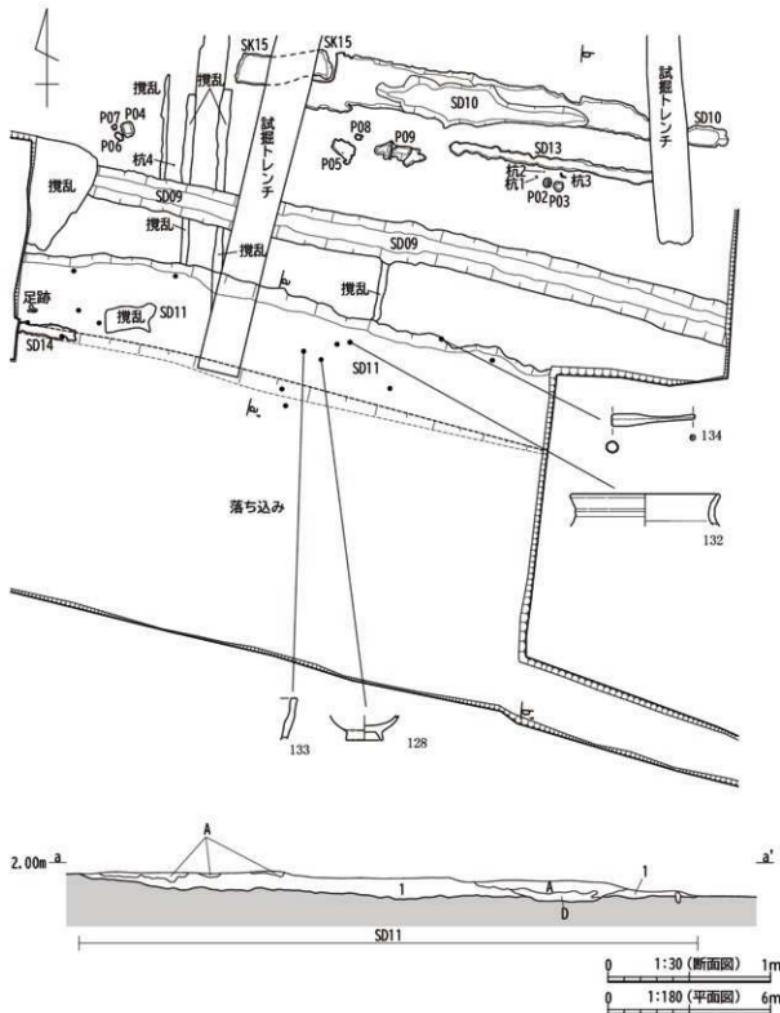


第29図の一部を切り出して作成

- SK15
1 7.5 Y 4/1 灰色粘土 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
SD10
1 7.5 Y 6/1 灰色粘土 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
2 7.5 Y 6/1 灰色粘土 浅黄色粘土を30%含む しまり強い 粘性強い
SD13
1 10 Y 2/1 黒色粘土 灰オリーブ色粘土微量含む しまり強い 粘性強い

0 1:30 1m

第27図 遺構図 (SK15・SD10・SD13)



落ち込み (第29図と対応)

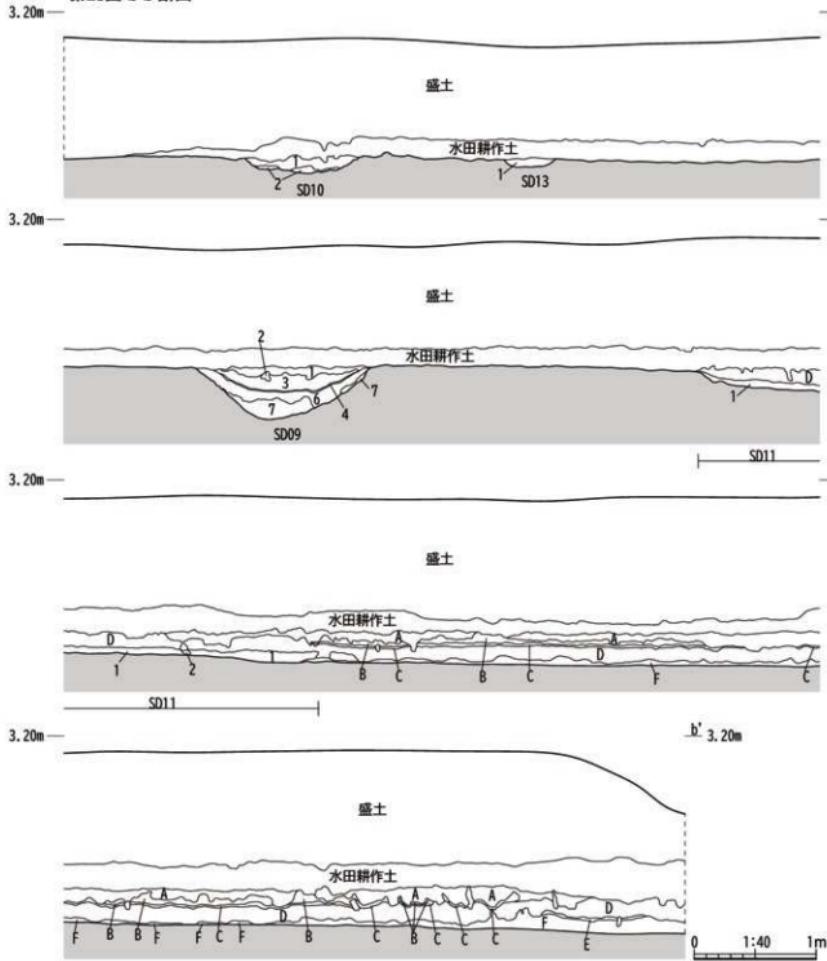
A N7/0 灰白色粘土 オリーブ黑色粘土を微量含む しまり強い 黏性強い 時間が経つと2.5Y6/2灰黄色を呈する
D 2.5Y2/1 黒色粘土 灰黄色粘土層 (厚さ1mm程度) が部分的に水平堆積する しまり強い 黏性強い

SD11

1 2.5Y2/1 黒色粘土と5Y7/2灰白色粘土層の互層堆積 しまり強い 黏性強い

第28図 遺構図 (SD11・落ち込み)

第28図 b-b'断面



落ち込み

A N7/0 灰白色粘土 オリーブ黒色粘土を微量含む しまり強い 粘性強い 時間経つと25Y6/2灰黄色を呈する

B 25Y2/1 黒色粘土 浅黄色粘土を20%含む しまり強い 粘性強い

C 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまり強い 粘性強い

D 25Y2/1 黒色粘土 灰黄色粘土層(厚さ1mm程)が部分的に水平堆積する しまり強い 粘性強い

E 7.5Y7/1 灰白色粘土 D層を30%含む しまり弱い 粘性強い

F 25Y7/3 浅黄色粘土 植物遺体を含む しまり弱い 粘性強い

SD09・10・13

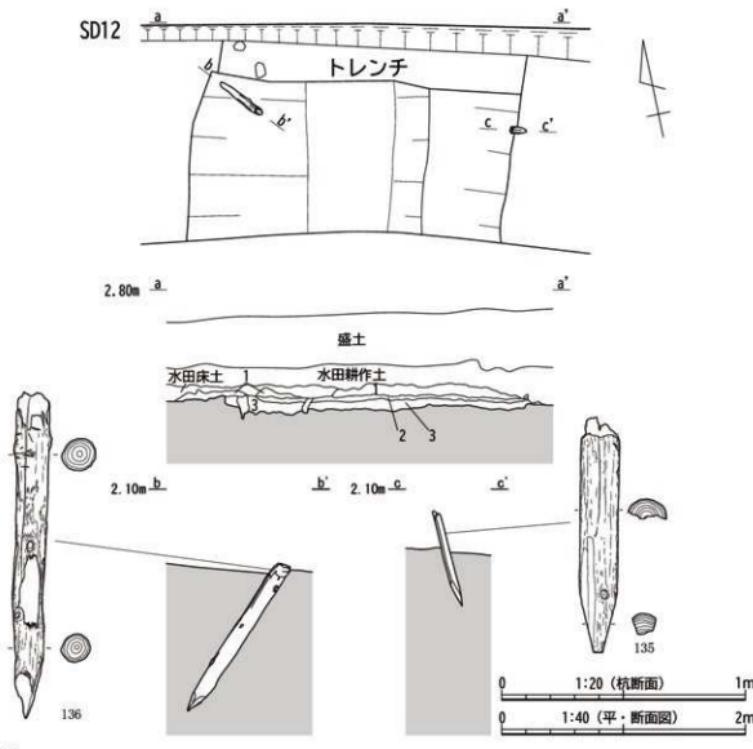
第26図・第27図参照

SD11

1 25Y2/1 黒色粘土と5Y7/2灰白色粘土層の互層堆積 しまり強い 粘性強い

2 25Y2/1 黒色粘土 しまりやや弱い 粘性強い

第29図 遺構図 (調査区東壁断面)



SD12

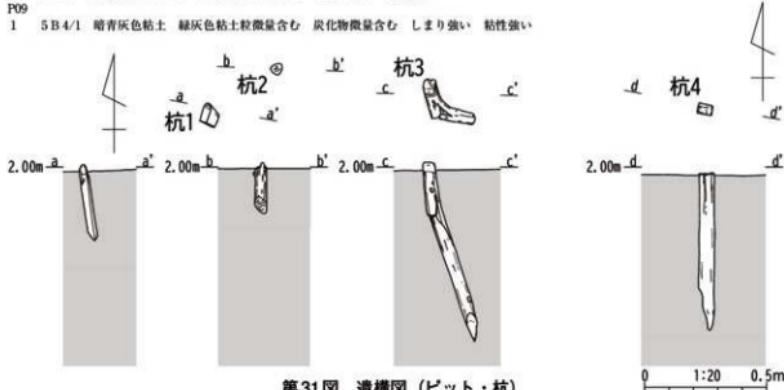
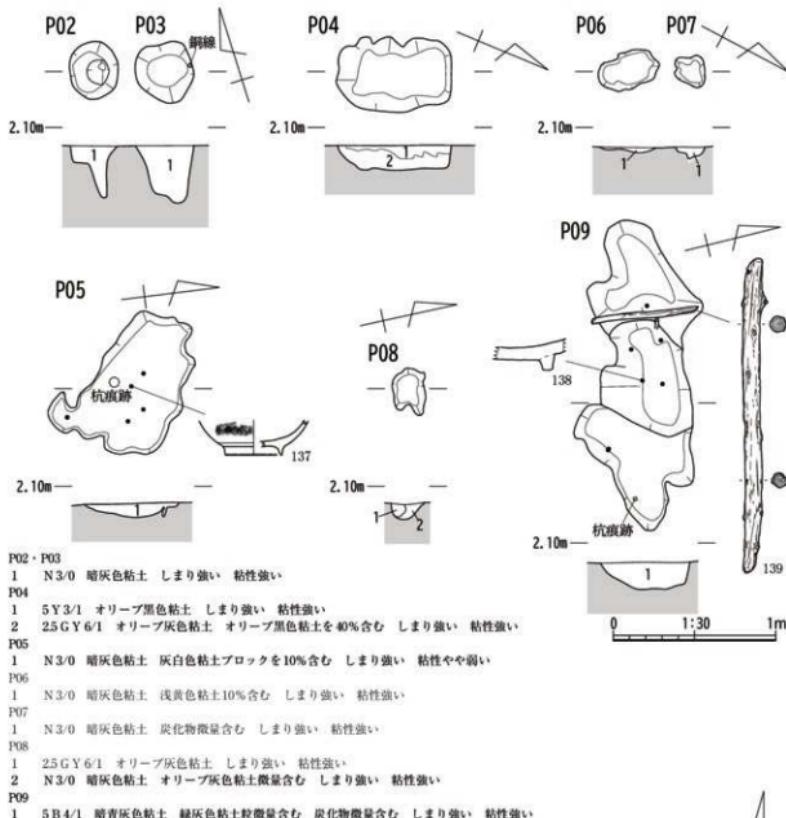
- 1 7.5 Y 2/1 黒色粘土 灰白色粘土微量含む しまり強い 粘性強い
- 2 2.5 G Y 4/1 暗オリーブ灰色粘土 しまり強い 粘性強い
- 3 2.5 G Y 6/1 オリーブ灰色粘土 しまり強い 粘性強い

SD14

SD14

- 1 7.5 Y 3/1 オリーブ黑色粘土 黒色粘土ブロックを10%含む しまり強い 粘性強い

第30図 遺構図 (SD12・SD14)



第31図 遺構図(ピット・杭)

第2表 造構一覧表

番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形	主軸方向	遺物	備考
SK01	4I-14・15・19・20	3.21	1.16	0.44	隅丸長方形	N - 10° - W	陶器、かわらけ、瓦質土器(焰培)、木製品(椀等)、板磚、モモ核	
SK02	4I-20, 5I-16	0.77	0.60	1.39	梢円形	N - 16° - E	板磚	高師小僧発達。
SK03	4J-2	0.70	0.61	0.84	円形	N - 13° - E	陶器、板磚、木製品、銅製品(錢)、モモ核	
SK04	4J-2・3	0.87	0.84	1.25	円形	N - 73° - W	—	
SK05	4I-7	1.08	0.87	1.15	円形	N - 72° - E	—	
SK06	4I-22・23	(0.83)	0.68	1.10	長梢円形?	N - 16° - E	瓦質土器(香炉)、板磚、木製品、モモ核	試掘トレレンチに切られる。
SK07	4I-24, 4J-4	0.62	0.56	0.78	不整形	N - 52° - W	瓦質土器(焰培)	
SK08	4J-3・8	0.96	0.92	1.70	不整円形	N - 70° - W	陶器、木製品、瓦質土器(焰培)	
SK09	4J-3・8・9	0.72	0.68	1.15	円形	N - 68° - W	瓦質土器(内耳鍋)、鉄製品(短刀)、鉄津、木製品	
SK10	3I-19・20・25	(0.89)	0.85	0.27	円形	N - 43° - W	—	SD03に切られる。
SK11	6I-12	0.67	0.56	0.12	不整形	N - 52° - W	—	
SK12	7I-19	0.94	0.93	0.56	円形	—	木製品	
SK13	6J-1・6	0.85	0.75	(1.62)	円形	N - 26° - W	瓦質土器(焰培)、板磚、鉄製品(小刀)、木製品、小瓶	
SK14	4L-18	0.60	(0.48)	0.26	不整形?	N - 76° - W	—	調査区外に延びる。
SK15	5J-24・25, 6J-21	3.60	1.13	0.20	長方形?	N - 88° - E	磁器、瓦質土器(焰培)、モモ核	試掘トレレンチに切られる。
SK16	5I-21, 5J-1	(0.92)	(0.62)	1.27	円形?	N - 75° - W	—	試掘トレレンチに切られる。
SD01	2J・3J・4J	(13.92)	(2.00)	0.23	直線	N - 72° - W	陶器、磁器、鐵製品、木製品(椀)、瓦質土器(焰培)、モモ核	調査区外に延びる。SD01と同連する。
SD02	3I-25, 4I-21, 3I-5・10・15, 4I-1・6・11	(6.10)	1.33	0.22	直線	N - 5° - E	磁器、種子、炭化物、小瓶、モモ核	調査区外に延びる。
SD03	3I-15・20・25, 4I-11・16	3.26	1.26	0.33	隅丸長方形	N - 5° - E	かわらけ、磁器、金属製品、種子、罐、モモ核	試掘トレレンチに切られる。
SD04	5I-9・10・14・15	(1.71)	0.64	0.04	直線	座標南北方向	—	調査区外に延びる。
SD05	5I-10・15・20	(3.75)	0.30	0.04	直線	座標南北方向	木片、モモ核	調査区外に延びる。
SD06	6I-12・13・14・15 7I-11 (東西部分) (南北部分)	7.23 0.65 (0.53) (0.48)	0.10(東西部分) 0.63(南北部分)	T字状	N - 84° - W (東西部分)	陶器、かわらけ、骨製品(サイコロ)	調査区外に延びる。 長軸、短軸、主軸は東西方向に延びる部分で計測。	
SD07	7I-11・12・16・17	(2.11)	1.19	0.36	直線	N - 2° - E	瓦質土器(焰培)、木製品	調査区外に延びる。
SD08	3J・4J	(11.74)	4.82	0.62	不整形	N - 76° - W 深い部分は N - 60° - W	陶器、瓦質土器(焰培)、かわらけ、石製品(板磚、石臼)、鉄津、木製品(カゴ状)、モモ核	調査区外に延びる。SD01と同連する。
SD09	2J・3J・4J・3K・4K・5K・6K・7K	(56.12)	1.56	0.47	直線	N - 77° - W	陶器、磁器、瓦質土器(焰培)、鉄製品(鑑)、罐、銅製品(キセル)、貝殻	調査区外に延びる。
SD10	6J・6K・7K	(15.51)	2.18	0.39	直線	N - 82° - W	陶器、磁器、瓦質土器(焰培)、板磚、瓦、モモ核	試掘トレレンチに切られる。

番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形	主軸方向	遺物	備考
SD11	2K・4K・5K・ 6K・5L・6L	(50.14)	(2.96)	0.26	直線	N - 77° - W	陶器、磁器、瓦質土器 (塔塔)、瓦、銅製品(キ セラ)、炭化物、モモ 核	調査区外に延びる。 落ち込みよりも古い。
SD12	2L-3・4・8・9	(2.62)	(1.64)	0.36	直線	N - 16° - E	木製品(杭)	両端に杭あり。両端が 調査区外に延びる。北 東・南西方向を長軸と みなした。
SD13	6K・7K	(7.58)	0.52	0.08	直線	N - 82° - W	かわらけ	試掘トレレンチに切られ る。
SD14	4K-25、5K-21	(2.15)	0.52	0.11	直線	N - 80° - W	—	調査区外に延びる。
P01	—	—	—	—	—	—	—	矢番
P02	6K-10	0.36	0.30	0.32	円形	N - 20° - E	陶器、かわらけ、木片	
P03	6K-10	0.37	0.37	0.35	円形	明確な主軸 なし	銅製品(鋼錐)、木製 品(筆軸?)	
P04	5K-2	0.56	0.46	0.15	不整形	N - 20° - W	—	
P05	6K-6	0.91	0.70	0.09	不整形	N - 60° - W	陶器、磁器、瓦質土器 (塔塔)、かわらけ	
P06	5K-2・7	0.38	0.23	0.04	不整形	N - 41° - W	—	
P07	5K-2	0.22	0.19	0.08	不整形	N - 19° - E	—	
P08	6K-1・2・6・7	0.27	0.20	0.11	不整形	N - 78° - W	—	
P09	6K-7・8	1.91	0.73	0.17	不整形	N - 80° - W	陶器、磁器、瓦質土器 (塔塔)、かわらけ、 木製品	
杭1	6K-10	—	—	0.29	—	—	—	
杭2	6K-10	—	—	0.18	—	—	—	
杭3	6K-10	—	—	0.71	—	—	—	
杭4	5K-8	—	—	0.64	—	—	—	
落ち 込み	1K・2K・4K・ 5K・6K・1L～ 6L・5M～7M	—	—	—	—	—	陶器、磁器、瓦質土器 (塔塔)、瓦、石製品、 銅製品、モモ核、貝殻	SD11を切る。
压痕	4I・5I・6I	11.92	—	—	—	N - 86° - W	—	円形压痕のみ。
压痕	5K・6K	4.59(北側) 11.29(南側)	—	—	—	N - 85° - W (北側) N - 86° - W (南側)	—	压痕同士の間隔は芯々 距離で0.45m。 [○○○]で一単位。
压痕	5K・6K	6.15(西側) 0.44(東側)	—	—	—	N - 3° - E (西側) N - 3° - E (東側)	—	压痕同士の間隔は芯々 距離で0.56m。 [○○○]で一単位。
足跡	4K-25	—	—	—	—	—	—	2歩分
足跡	4L-9	—	—	—	—	—	—	3歩分
鞋 痕跡	5I・5J・5K	26.2	1.16	—	直線	N - 2° - E	—	

4. 遺物

SK01（第32図）

1はかわらけの坏で内外面回転ナデ、底部は一方向の板ナデである。底部からの体部の立ち上がりは直線的である。2は板碑破片で種子や年号等の彫りは認められない。

3は木製椀で外面及び高台内は黒漆塗り、内面は赤色漆塗りである。高い高台が付くが、高台内の抉り込みは浅い。樹種はケヤキである。土圧によるためと思われるが重みがあり断面を2か所示した。4は木製の皿と考えたが蓋の可能性もある。疊付となっている部分は生きているかどうか不明瞭であり、より突出するかもしれない。外面は黒漆、内面は赤色漆塗りである。高台内は中心からやや外れて赤色漆で四つ菱、外面には赤色漆で植物文が描かれる。樹種はブナ属である。5は板材で木取りは柾目板、横断面の形状がややアーチ状となるため桶の側板か。上部は欠損している。6は幅の狭い板材で片側に向かうにつれ徐々に幅が狭くなる。

SK02（第32図・第33図・第34図）

7は板碑上半部破片であり、碑面の右半分が剥離している。頭部には二条線が刻まれ、キリーク下には蓮実がある。左上には割付線がT字に認められる。裏面は押し削りが認められる。8は板碑下半部破片であり、キリーク、蓮実と蓮弁が刻まれ、銘文は明円押尼広永廿二年十一月三日。応永22年は1415年。銘文の左右に梵字光明真言があり、6文字ずつ計4行に渡って刻まれる。基部及び裏面には押し削りが認められる。9は頭部が半分程度欠けた板碑破片で二条線とキリークがある。二条線はややくぼませる程度であり、二条線脇に羽根刻みがある。10は板碑破片だが銘文等ではなく、押し削りが片面にのみ認められる。大きさの割にやや薄い印象があり、片面が完全に剥離している可能性がある。

SK03（第34図）

11は実測図正面を遺構底面に向けて出土した、半截した木を加工した棒材である。全体的に欠損しており、欠損していない部分は樹皮が残る。

SK06（第34図・第35図）

12は瓦質土器の香炉であり、完形で出土した。底部回転糸切り後、撲土の三足がつく。体部外面中央に段を設け、段の直下には3つ一単位の竹管文を6か所押捺する。竹管文の間隔がバラバラのため、3回押捺して1つの文様としていることが分かる（写真図版19）。見込みは若干上げ底とする。内面口縁部付近には煤が全周確認できる。

13・14は板碑破片である。13は阿弥陀三尊板碑と思われ、蓮弁とサクがあり、銘文は蹟善〔 〕十一月。蹟の字は偏が不明瞭で別字の可能性がある。遺存している左側面側に割付線が認められる。14は頭部と基部を欠損している。蓮実と蓮弁が刻まれ、碑面を方形に区画する界線が三方に明瞭に刻まれる。紀年銘は文保二年十二月。文保2年は1318年。

15は桶の底板である。二枚矧であり、ほぞ穴の位置が対応する。春材部が痩せ、夏材部が突出している。樹種はスギである。

SK08（第36図・第37図）

16は瀬戸美濃系陶器の碗で、飴釉が掛かり微細な貫入が顕著である。SK03とSK08の接合遺物である。17は柾目の板材で2孔を穿つ。若干湾曲しているため桶側板の転用か。18~21は芯持ちの木で、18は全体的に腐朽しているが節の部分は良く遺存し突出している。19は遺構に横たわって出土したもので全体的に明確な加工痕は認められない。20は先端を斜めに切り落としている。上半部は腐朽して細り、節のみ良く遺存している。21は先細りとなる。上部は切断され、先端は欠損して杭状としていたかどうかは不明。ただし、先細りとなった側が遺構底面に向き出土した。側面に明確な加工痕は認められない。21のみ遺構に対して縦位に出土している。22は半截された木で、実測図正面は平らに加工されて板目板となっている。実測図左側面は若干湾曲し、右側面は節に沿って湾曲するが、両側面とも生きている部分があることから、幅は当時の状態を残していると考えられる。23は両側面とも生きている部分があり、実測図正面は平らに加工されている。24は腐朽が著しく生きている部分は少ない。

SK09（第37図）

25は内耳鍋の頸部が若干遺存する部分で、外面は使用のため煤が付着し、内面は黒色を呈する。15世紀から16世紀に比定される。

26は無反りの短刀である。庵棟であり、棟（峰）側にのみ関（区）をもち、形状は直角関である。茎の断面形状は刃部側の幅が狭くなる。茎の長さ1/3程の刀身側に直径5mmの目釘穴を1つもつ。切先は欠損している。茎含め刀身に木質痕跡等は確認できない。

SK12（第37図）

27~31は芯持ちの棒材で側面に明確な加工痕は認められない。27・28、29・30は出土状況から、それぞれ同一個体である。31は最上部の破片が黒色を呈しているため被熱している可能性がある。

SK13（第38図・第39図）

32は培烙破片で外面は底部立ち上がり際から口縁部にかけて遺存し、内面は内耳際部分である。17世紀前半と思われる。

33・34は小刀の刃部と柄部である。刃部は欠損と鏽彫れが著しく、切先は欠損している。鏽彫れしていない関（区）付近の厚みが3mmであり、刃部は薄化し2mm程度の厚みとなっているため、本来の厚みは鏽の進行や剥落等で損なわれていると考えられる。実測した以外にも遊離した破片が1つ出土しているが接合しない（写真図版38）。関（区）は刃部側と棟側で形状が異なり、刃部側・棟側共にナデ関であるが非対称である。34の柄部は芯持ち材で、茎の差し込み部分は長方形に抉られている。樹種はクワ属である。

35は阿弥陀三尊板碑でキリーク下には蓮実と蓮弁が刻まれる。銘文は文明十七年乙巳妙阿弥禪尼八月十五日。文明十七年は1485年である。ごくわずかであるが金泥が、キリークのアク点、蓮弁、サ、サク、文、十七年、妙、禪尼、月十五日の各文字に残る。頭部の二条線は浅い。割付線が蓮弁下から両側面に沿って引かれ、銘文の最下文字である「年」の字下約2cmに直行方向の割付線がある。36は板碑頭部で二条線はしっかりと段をつくり、キリークと蓮実・蓮弁をもつ。

SK15（第39図）

37はかわらけの坏で口縁部直下をやや薄く仕上げている。内外面とも回転ナデの跡が明瞭に残る。

SD01（第39図）

38は木製柾で外面の一部に黒漆、その上に赤色漆の痕跡がある。外面の大部分と内面は漆塗りが認められないが、恐らく剥落したものと思われる。

SD03（第39図）

39は不明金属製品で銅かと思われる。長方形の孔を少なくとも3つ並べて穿ち、長方形の孔の短辺片側に直径1mmの凹みがある。凹みは中央に位置する長方形の孔の上部と、両側長方形の孔の下部に位置する。下部に位置する両凹みは貫通しているように見えるが、欠損のためそう見えているのかもしれない。

SD06（第39図）

40はかわらけの坏で底部は回転糸切り後無調整。ロクロ左回転である。外面は底部から直線的に立ち上がったのち、立ち上がり付近の強い回転ナデにより外面中央はわずかに段が生まれ、その上部に若干くぼみを持たせたのち口縁部に至る。底部および内面は被熱しており、内面には黒光りする付着物が認められる。ほぼ完存しているが口縁部に一部欠損があるため、灯芯油痕は認められないものの、灯明皿として使用された可能性がある。41もかわらけの坏で、底部は回転糸切り後無調整。ロクロ左回転である。底面には木目が浮き出た作業台に押し付けられた際の圧痕が認められる。底面の圧痕と対応する位置の見込みには親指サイズの凹みが生じている。外面は底部から直線的に立ち上がる。体部中位で若干角度が変化するものの、40ほど明確ではない。内面は見込みから立ち上がる部分に若干の窪みをもつ。内面に被熱はないが、外面底部から体部にかけて被熱し黒く煤けている。

42は須恵質を呈する山茶碗窯系の片口鉢の底部である。内面は全面が研磨、割れ口は大部分が研磨されている。内面には墨跡があるため、転用硯として使用された可能性がある。

43は骨製のサイコロである。4つに破損しており、骨の表面に「一」「二」「五」「六」の目が確認できる。ただし、「二」「五」「六」は欠損しているため推定である。現代のサイコロと同様、対面の目の数を足すと7になるよう作られている。「三」「四」の目は骨の内部となる海綿質部分に刻まれていたと推測されるが腐朽し遺存していなかった。脆弱であるため接合した状態での展開写真撮影は難しく、写真図版20は2破片を接合した状態での撮影である。

SD07（第40図）

44は上面を平坦にし、木目に沿って円筒形に加工されていたと考えられ、実測図下方へいくにつれ厚みを減じる。45は板目板で済曲ではなく、他の事例のように桶彫板の転用材ではない。一直線に4か所穿孔され、うち実測図下から2孔目は孔径が小さく貫通していない。46は樹皮が所々に遺存する。

47は3破片に分かれ、先端に行くにつれ厚みを減じ、先端破片は刀状となっている。側面は基本的に未調整である。中央破片は2か所穿孔する。上部破片には穿孔らしき痕跡があるが破損していて不明瞭

である。頂部は加工により丸みを帯びている。

SD08（第40図～第46図）

48・49はかわらけの皿である。48は底部回転糸切り後無調整。ロクロ左回転である。若干上げ底気味となる。体部は丸みをもって立ち上がる。49の底部は回転糸切りで、糸切り後の調整は摩滅のため不明瞭である。体部は直線的に立ち上がり、見込み中央が若干窪む。

50～58は瀬戸美濃系陶器の皿である。50は全面に灰釉を施し、内面に緑釉を流し掛けする。高台内には目跡が2つ残る。17世紀前半に比定される。51・52はいわゆる志野皿である。51は内面全面及び外面口縁部から $3/4$ まで白い長石釉が掛かる。高台内の抉り込みは浅く、疊付の幅も一定していないため粗雑な印象を受ける。17世紀前半に比定される。52は高台内の釉掛かりは薄いものの長石釉が全面施釉されており、釉が薄い部分は赤いこげ（火色）が生じている。削り込み高台で葵筒底状となっており、高台内には直径1cm程の目跡が3つ残っている。口縁部が外反するものである。17世紀前半に比定される。53・54は内面全面及び外面口縁部から $1/2$ まで施釉される。露胎の部分のヘラ削りは強く、強い棱をもつ。17世紀前半から半ばに比定される。55は丸皿である。目跡が高台内に2つ、見込みに2つ残る。大窯第3段階のものであり、16世紀半ばから後半に比定される。56はいわゆる志野皿である。内面全面及び外面疊付まで長石釉が掛かる。高台内の抉り込みは浅い。見込には小さい目跡が1つ残る。17世紀前半から半ばに比定される。57もいわゆる志野皿である。外面下半は長石釉が梅花皮状になる。17世紀前半に比定される。58は丸皿である。灯明皿として使用しており、灯芯油痕が所々に認められるが、特に口縁部を打ち欠いた部分に集中している。大窯第1～2段階のものであり、16世紀前半に比定される。

59は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。天目釉が厚く掛かる。大窯第3～4段階のものであり、16世紀半ばから末に比定される。60は瀬戸美濃系陶器の鉢である。全面に灰釉を施し、内面に緑釉を流し掛けする。17世紀前半に比定される。

61は常滑焼の壺底部で、SD08とSD11との接合資料である。SD08出土部分のみ全体的に煤けており、内面が研磨されている。15世紀から16世紀に比定される。62・63は瀬戸美濃系陶器の描鉢底部である。卸目は62が14目一単位、63が29目一単位である。16世紀から17世紀に比定される。64～67は瀬戸美濃系陶器の描鉢口縁部で、64と65は同一個体か。66は片口付近である。いずれも17世紀前葉に比定される。

68～78は焙烙である。内耳が遺存するものは全て口唇部から体部内面下半に付く。68は欠損部が多いものの平面形状は楕円形を呈すると考えられる。底面及び側面下半部が剥落している。使用により内耳上半部が半円状に抉れている。体部は直線的に立ち上がる。69は体部中央に段をもつ。70は深身で、胎土に金雲母が多く含まれる。使用により内耳上半部が半円状に抉れている。体部は直線的に立ち上がる。71は使用により内耳上半部に擦り跡がある。体部は直線的に立ち上がり、体部外面上半部の器壁がやや厚くなる。72は使用により内耳上半部に若干の擦り跡がある。体部は直線的に立ち上がり、体部外面上半部の器壁が少し厚くなる。73～77は内耳が遺存していないもので、73～76は体部が直線的に立ち上がり、77は体部中央に段をもつ。76のみ胎土に金雲母を含み深身である。78は底部から内耳の下半部のみ遺存している。以上の焙烙は16世紀末から17世紀前半に比定される。

79~81は鉄滓で磁力は無い。79は他と比べ体積のわりに重量があり、小蝶が付着する。80・81はガラス化し、発泡が認められる。

82は安山岩製の石臼で、粉挽臼の上臼と思われる。83~88は板碑である。83は頭部破片で二条線とキリークの一部がある。84はキリークの一部がある。85は「月廿五日」と刻まれている可能性がある。86は実測図裏面部分が煤けている。87は頭部破片で二条線の一部が残る。88は実測図表面下端に斜め方向の工具痕がある。

89は木製椀で外面及び高台内は黒漆塗り、内面は赤色漆塗りである。高台内の抉り込みは浅い。外面に赤色漆で文様が描かれるが剥落のため不明瞭である。樹種はトチノキである。90は木製椀で高い高台をもち、内面赤色漆塗り、高台部は漆が剥落していると思われ確認できない。疊付は欠損していると思われる。91は木製椀で、外面黒漆塗りで一部赤色漆の文様がある。内面は赤色漆塗りである。口縁部は若干外反する。92は内外面黒漆塗りで外面に赤色漆の文様がある。93は木製椀で遺存状態が悪い。内外面黒漆塗り後赤色漆で文様を描いていると思われる。

94・95はカゴ状木製品である。便宜的に大きい部分と小さい部分の2つに遺物番号を分けているが、一連のものである。長軸と短軸方向共に若干湾曲しているため、カゴのような形態を想定したが、素材の厚みが薄く、少し触れるだけで破損してしまうため全体の検出は困難であった。樹種はいわゆるタケ・ササ類である。編み目にすき間が無い網代編みであり、竹ひごの幅と厚さが均一なものである。たてヒゴ・よこヒゴとも4本とびにしている。

96は板材で先端部は欠損し、頂部はへの字状に加工している。一方の側面に寄せて穿孔する。実測図左側面は平らに加工するが右側面は丸みを帯びている。97は先端を先細りさせていると思われる。98は頂部が切断され、先端は欠損により不明。99は芯持材で湾曲している。100は分枝した部分をL字状に切断して平坦面としている。分枝した部分の根元はくりぬかれているように見え、別材を差し込んでいた可能性があるが、最終的には杭として用いられていた。101は樹皮が残り特に加工は認められないが杭として用いられていた。102~104は明確な加工痕は認められない。105は先端を2方向から切り落として緩く尖らせている。上部は欠損している。106は明確な加工痕は認められない。削れている部分は調査中に付いた傷である。107は先端を尖らせ杭状にし打ち込まれていた。108は先端が欠損しているが杭として用いられており、杭先端よりも上部のほうが細くなる。109は杭として用いられているが先端は明確に尖らせていない。110は杭として用いられているが腐朽しており加工痕は認められない。上部は欠損する。111はSD08の杭のうち一番長いものである。樹皮が残り、杭として用いられているが先端は明確に尖らせていない。112は頂部が切断されている。それ以外に明確な加工痕は認められない。113は上下端欠損。明確な加工痕も認められないが杭として用いられている。114は杭として用いられているが先端は銳利になっていない。ほか明確な加工痕も認められない。115は二股に分枝した部位であり、先端は細くなるが剥落した結果の可能性がある。

SD09（第47図）

116は肥前系陶器で青緑釉が施された丸碗である。外面灰オリーブ色を呈し、釉薬にややざらつきがある。内面は灰白色を呈す。17世紀後半に比定される。117は熔炉の内耳で胎土に金雲母が多く含まれる。118は堺明石系陶器の擂鉢底部で、使い込まれており器壁がよく研磨されている。18世紀前半に比定さ

れる。

119は盤で、先端は先細りV字状となる。断面形状は方形である。120は材質不明で、表面には黒色から赤茶色の被膜があるよう見える。光を通すためべっ甲の可能性があるが、質感は革のようでもある。実測図上部には抉りがあり、側面は延長するため穿孔されていると考えられる。

SD10（第47図～第49図）

121は瀬戸美濃系陶器の内堀皿で、高台内含め全面鉄釉で施釉されている。削り込み高台で、高台内に重ね焼きの痕跡が認められる。見込は一段高くなり、鉄釉の拭き取りが甘く鉄釉が残る。体部が低く扁平で、大窯第4段階の後半～末の所産とみられる。16世紀末から17世紀初頭に比定される。122は瀬戸美濃系陶器の捕鉢で、小さい片口をもつ。卸目は10目一単位で10方向から放射状に施す。内面下半は使用により研磨されている。大窯第4段階の16世紀末に比定される。123・124は焙烙の口縁部で123は体部が直線的に立ち上がり、124は内面に段を有する。125・126は焙烙で共に体部は直線的に立ち上がる。125の内耳は使用のため摩耗し、幅が狭くなっている。126は胎土に金雲母が多く含み深身となる。内耳は摩耗していない。

127は板碑破片で種子や年号等の彫りは認められない。直線的になっている一側面は転用のためか研磨されている。

SD11（第50図）

128は肥前系磁器で高台脇まで施釉、高台及び高台内は露胎である。高台内には小さい兜巾がある。129はかわらけの口縁部細片である。130は明代の青花碗である。圓線内に渦文を施す。131は瀬戸美濃系陶器の鉢で、全面に灰釉を施し、内面に綠釉を流し掛けする。17世紀半ばから後半に比定される。132は摩滅して調整等が定かではなく、形状から土師器壺にも見える。ただし、胎土が粗いこと、土師器にしては焼き締まっている印象があることから、瓦質土器の可能性がある。遺跡の主体的な年代観とも合うため、瓦質土器としておきたい。133は焙烙の体部で内面に若干段を有する。

134は煙管の吸口である。腐朽した羅字が深さ1cm分ほど内側面に貼り付いている。

SD12（第50図）

135は東側に打ち込まれていた杭で、木取りは半截。先端両側面を中心に向かって削り、半截側は基本的には未加工で、先端部だけ若干削って尖らせている。端部は平坦であるが、全体的には鋭利に作り出す。136は西側に打ち込まれていた杭で、木取りは芯持ち材。3方向から中心部に向かって削り杭先をしている。上部には横方向の傷がありその付近が凹んでいることから、滑らないよう傷をつけた後に繩などを縛り付け、その結果強い力で圧迫され凹んだ可能性がある。それ以外の加工としては枝打ちをするのみである。

P05（第51図）

137は肥前系磁器の碗で高台脇に圓線をもち、主文様は不明。18世紀頃と思われる。

P09 (第51図)

138は瀬戸美濃系陶器の皿の底部破片である。外面は露胎、内面込みも露胎であるが少し外れた位置に灰釉がわずかに施釉される。

139は加工痕が見えないものの先端が先細りするため、杭として使用されたものか。頂部は丸みを帯びるため打ち込んだ際の痕跡かもしれない。ただしビット内に横たわっていたため、廃棄時には杭としての役割は終えていたと考えられる。

地山直上 (第51図・第52図)

140・151・152・158・162・164は地山直上から出土した遺物である。140は瀬戸美濃系陶器の灯明受皿で皿と棟に比高差があり、皿より棟の器高が低い。皿と棟の口縁部に煤が付着する。底面及び体部下半部のみ露胎である。

151は連珠三巴文軒丸瓦である。右巻きの巴文の周りには圓線がなく、連珠数は12珠と思われる。152は撫し瓦の平瓦である。158は和釘と思われる。

162は板目板で実測図上部左上隅が小さく抉られている。下半部は筋に沿って割れたことで欠損したと考えられる。164は芯持材で実測図表面と裏面は平らになっており、中心線からやや逸れた位置に、斜めに穿つ孔がある。孔の奥の方は長方形を呈するように見えるため、和釘が打ち込まれた結果の可能性がある。5K-2グリッドの地山に突き刺さって出土している。

落ち込み (第51図・第52図)

141～143・145～148・157・159・160は落ち込みから出土した遺物である。141は瀬戸美濃系陶器の皿で見込みに重ね焼きの痕跡が認められる。高台内及び体部下半は露胎、それ以外は灰釉で施釉されている。17世紀前半から半ばに比定される。142は肥前系磁器の碗で外面は植物文様、内面は四方擇。18世紀中頃に比定される。143は肥前系磁器の壺で17世紀後半から18世紀前半に比定される。145は瀬戸美濃系陶器の皿で、胎土は黒色を呈する。17世紀前半から半ばに比定される。146は古瀬戸の綠釉小皿で15世紀に比定される。147・148は熔融の体部で148は内耳が欠損している。147は体部下半に緩い段を有し、148は直線的に立ち上がる。

157は楔と思われる。159は流紋岩製の砥石で、欠損部以外全面研磨されている。160は凝灰岩で2つに割れている。実測図の裏面側が全面にわたり被熱しているため、被熱の結果割れた可能性がある。割れ口は被熱していないため、割れた後の被熱はなかったようである。割れ口に土中の鉄分が付着しているためきれいに接合しない。

その他遺構外 (第51図～第53図)

144は磁器の脚部でハの字状に開く。遺構検出中に出土したものである。149は表土掘削中に出土した近代の磁器皿である。150は堺明石系陶器の擂鉢で18世紀前半から中頃に比定される。排土中の出土であるが、状況から落ち込みの掘削埋土から出土したものと考えられる。

153～156は撫し瓦の平瓦である。153は両面が、154・155は側面が二次的に研磨されている。

163は板目板で、断面形状が僅かに湾曲すること、内面には底板が当たっていたと思われる部分が瘦

せずに僅かに突出することから桶側板と考えられる。165は先端を尖らせ杭とし、頂部は打ち込んだ痕跡のため丸みを帯びている。上半部は刃物により頭部に向かって削り出した痕跡が認められる。

杭1（第52図）

161は4面全てが平滑に加工された板目板である。先端は2方向から尖らせ、幅広の杭として打ち込まれたものである。上部は欠損している。実測図正面の方が平滑で裏面の方がやや加工が甘く僅かに凹凸が目立ち、木目も浮き出ている。

杭2（第53図）

166は中心からやや外れた位置に向かって、2方向から削り杭先としている。中間に枝が垂直方向に1.3cmほど突出しており、杭の加工としては丁寧さに欠いている。

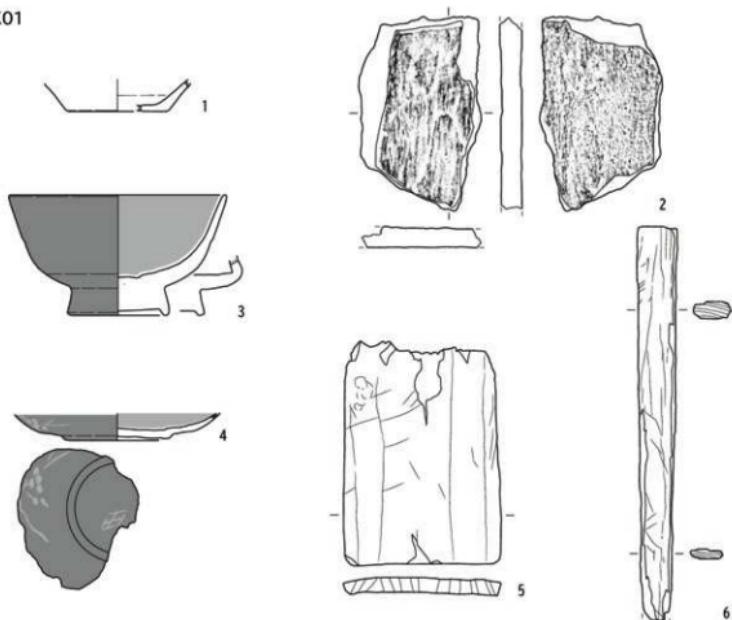
杭3（第53図）

168は表土掘削時に重機のバケットが引っかかり裂けてしまったものである。3方向から中心に向かって削ることで杭先とし、杭先端部は銳利となっている。杭先の上部には樹皮が遺存している。加工は杭先のみであり、それ以外には枝を落とす程度である。

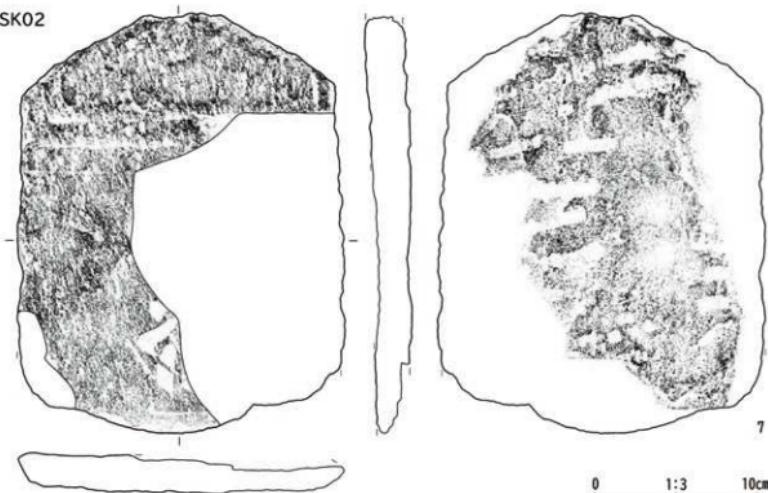
杭4（第53図）

167は追柾目板の3面を平滑に仕上げ、1面は削ったまま未調整である。先端は3方向から削り杭先としている。杭先の先端部は平坦である。上部は欠損している。

SK01

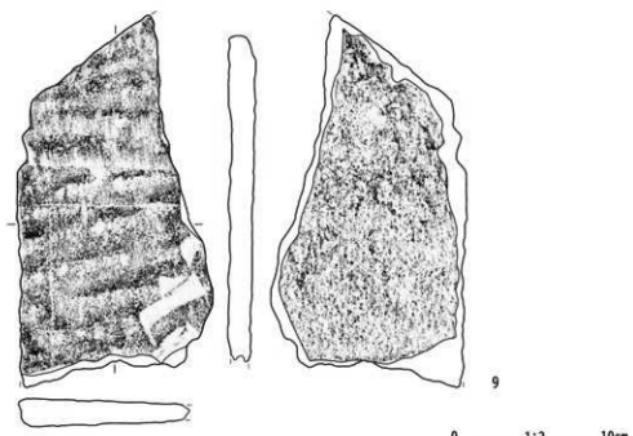
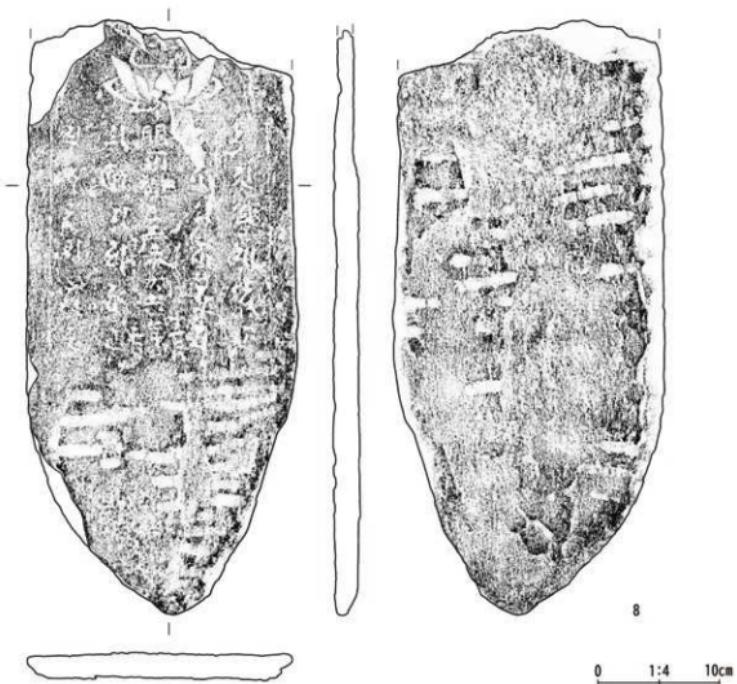


SK02

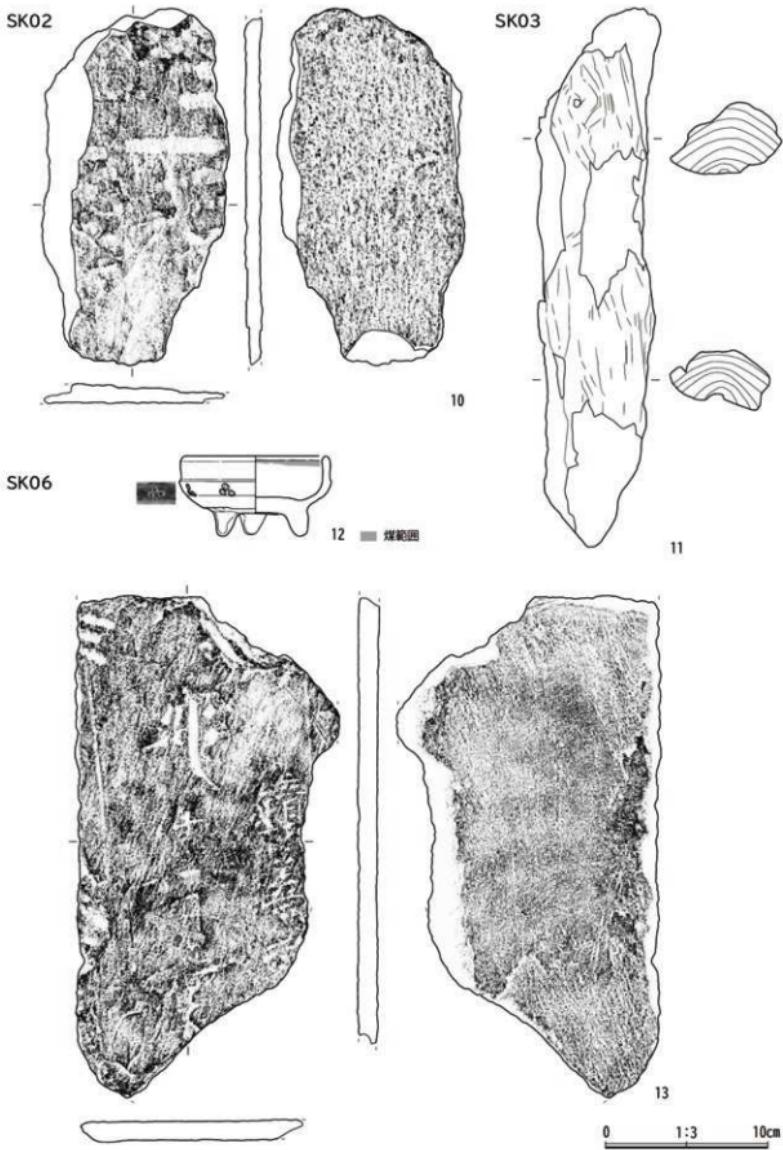


0 1:3 10cm

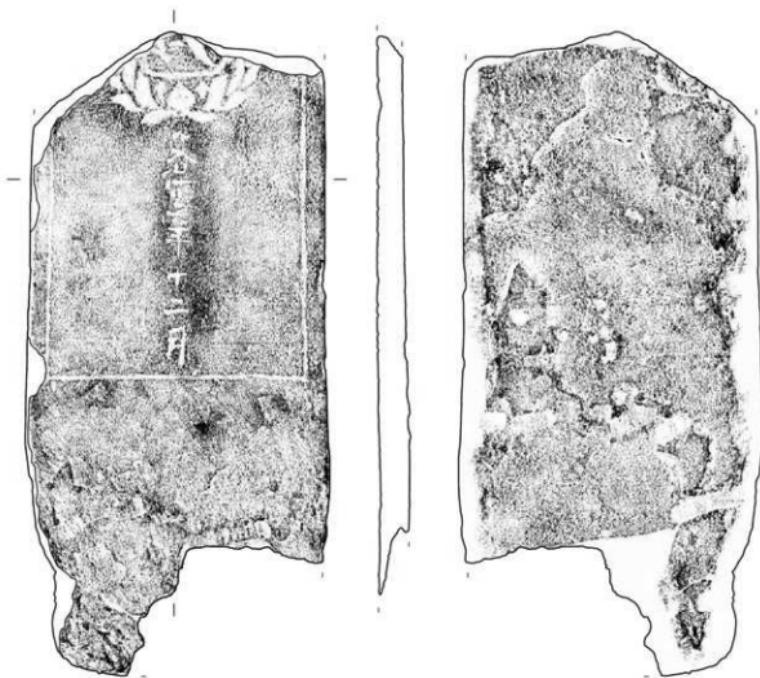
第32図 SK01・SK02 (1) 出土遺物



第33図 SK02 (2) 出土遺物



第34図 SK02 (3)・SK03・SK06 (1) 出土遺物



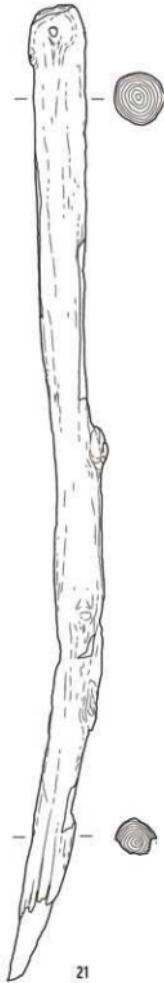
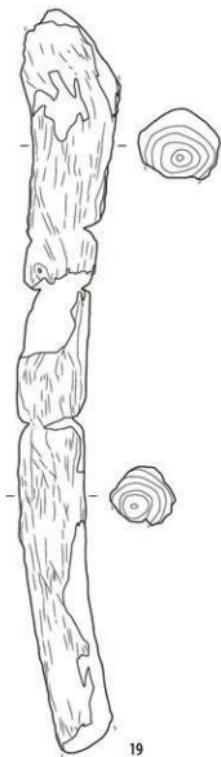
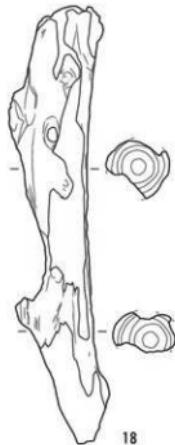
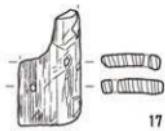
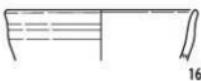
0 1:4 10cm

15

0 1:3 10cm

第35図 SK06 (2) 出土遺物

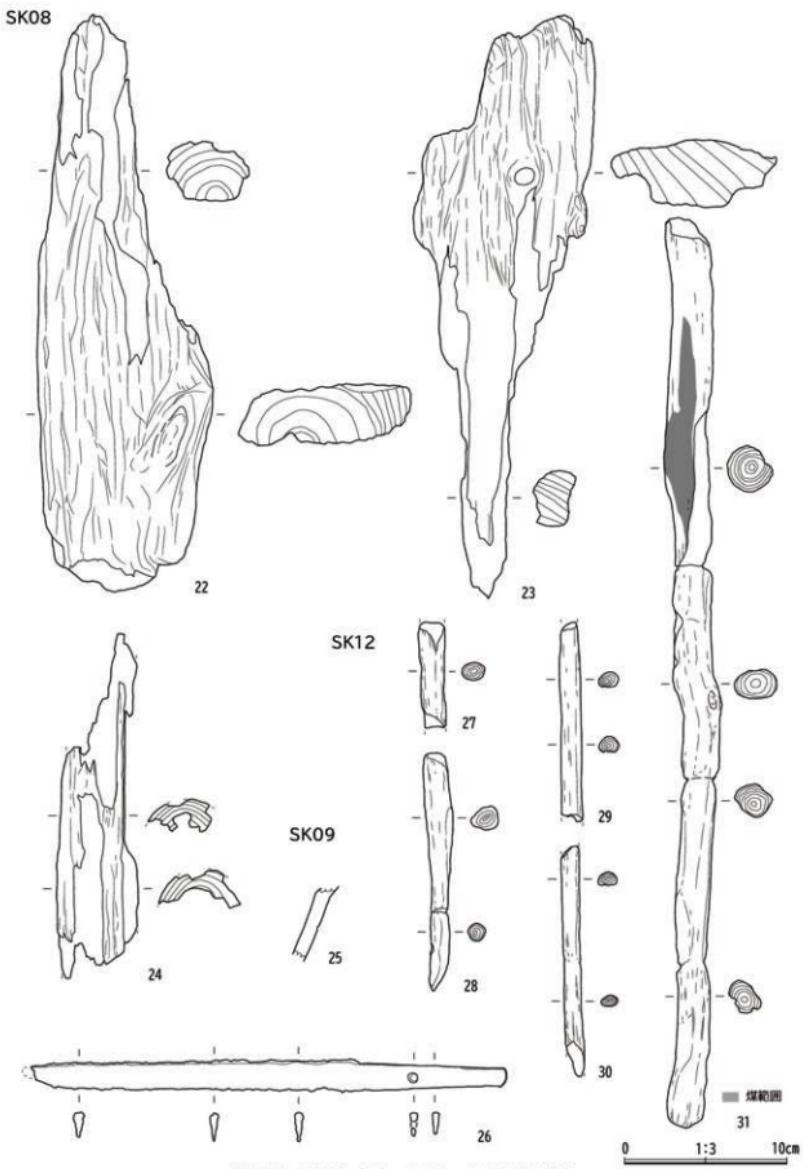
SK08



0 1:4 10cm (21)

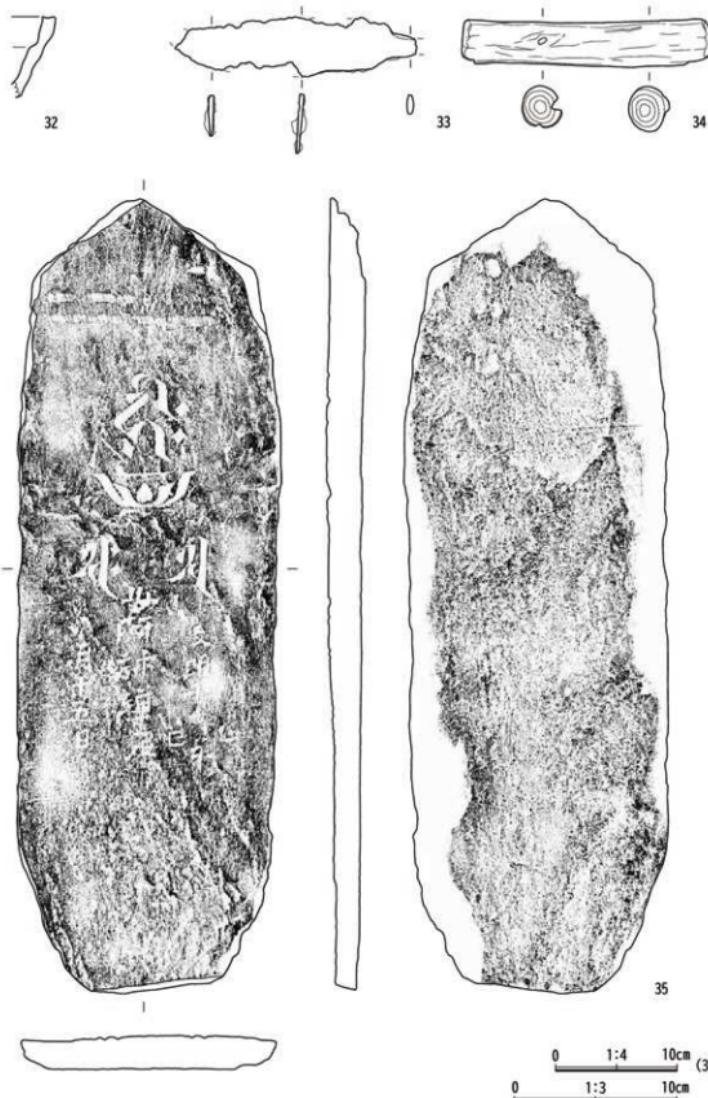
0 1:3 10cm

第36図 SK08 (1) 出土遺物

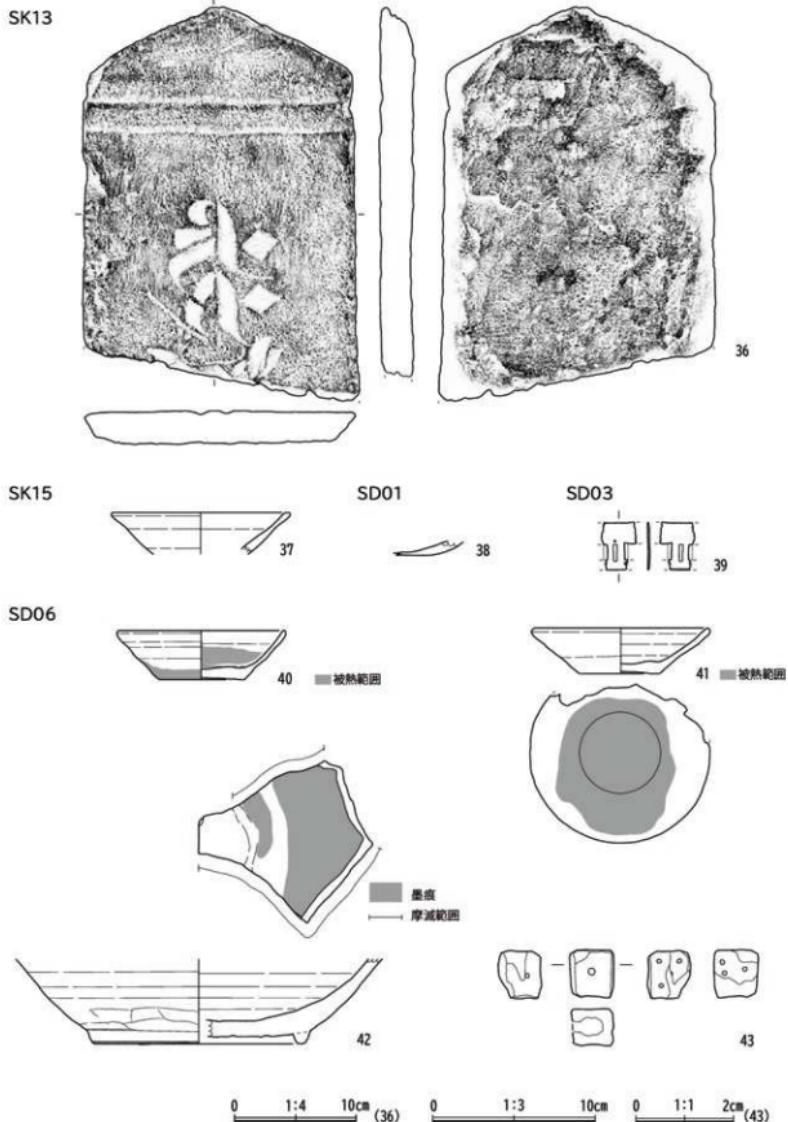


第37図 SK08 (2)・SK09・SK12出土遺物

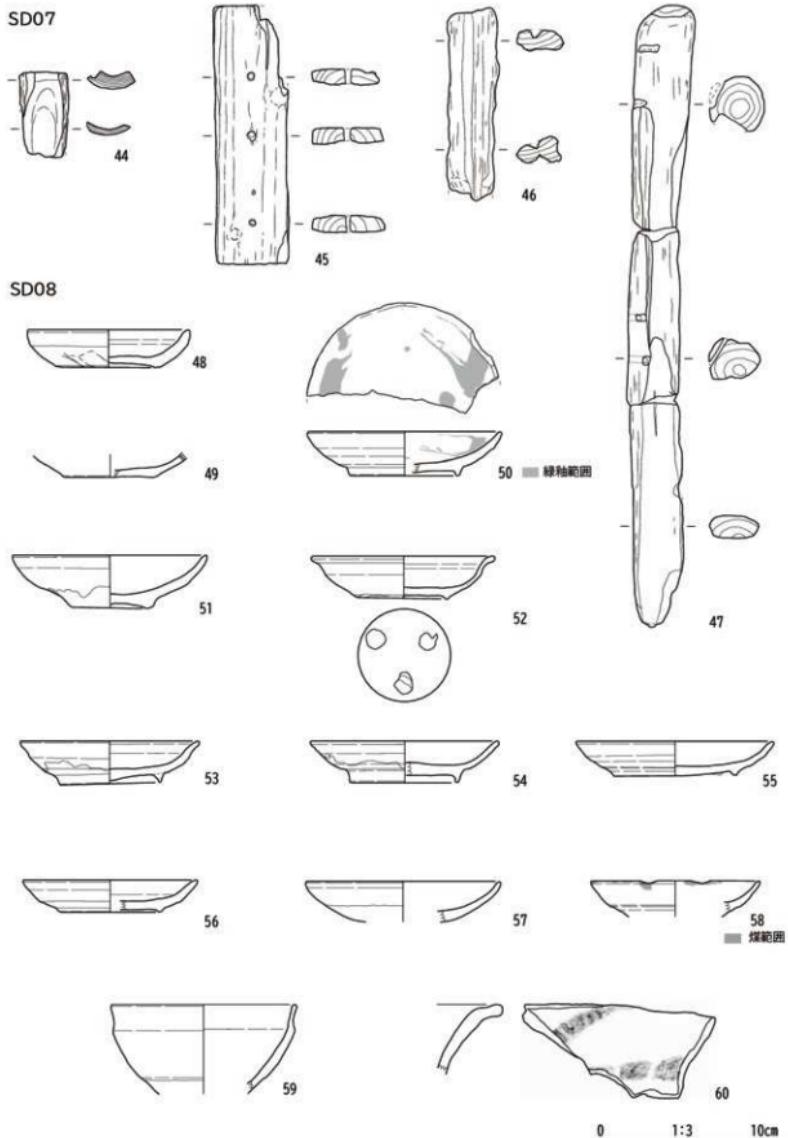
SK13



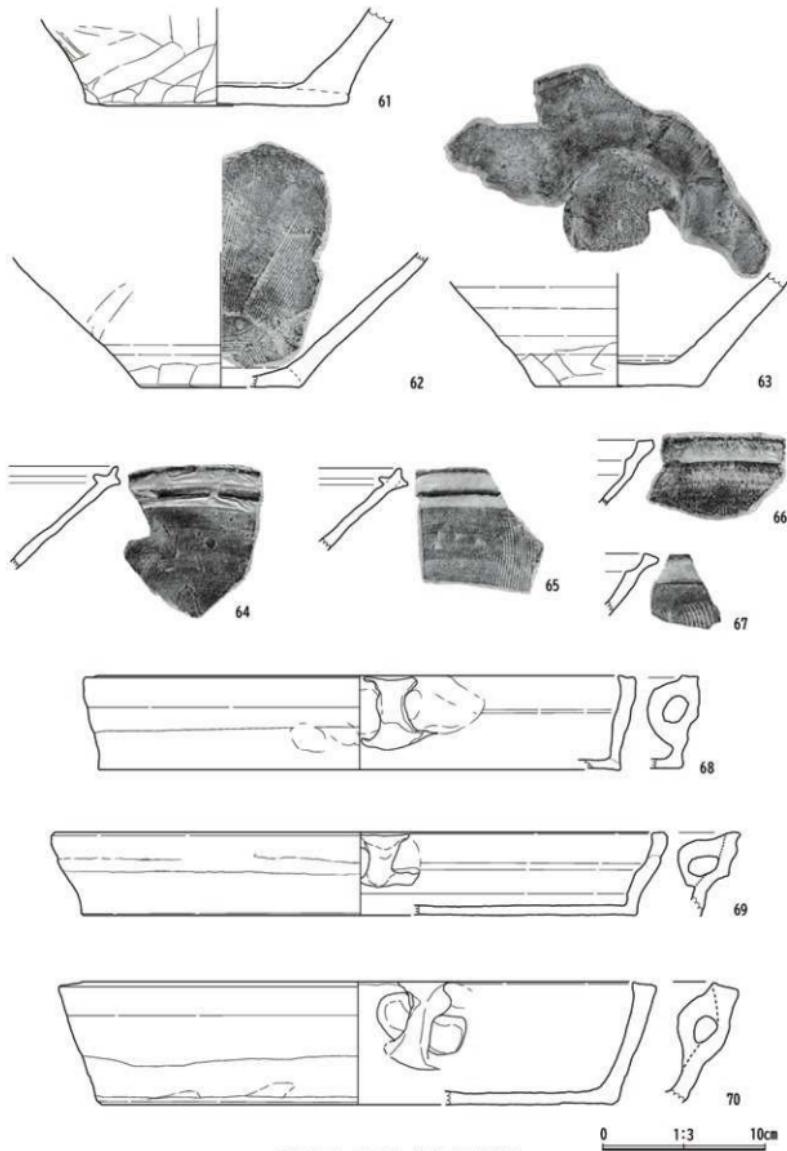
第38図 SK13 (1) 出土遺物



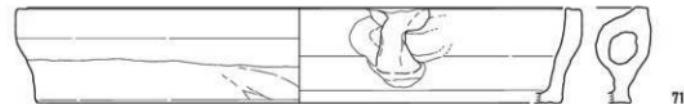
第39図 SK13 (2)・SK15・SD01・SD03・SD06出土遺物



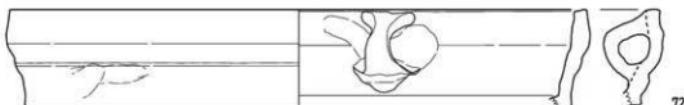
第40図 SD07・SD08(1) 出土遺物



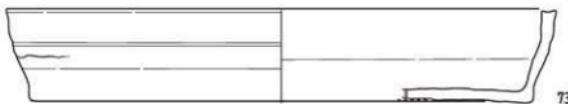
第41図 SD08 (2) 出土遺物



71



72



73



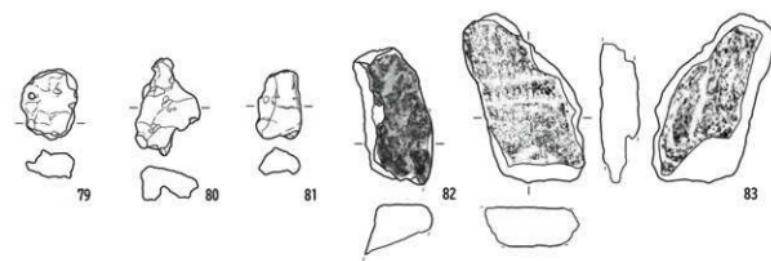
74

75

76

77

78



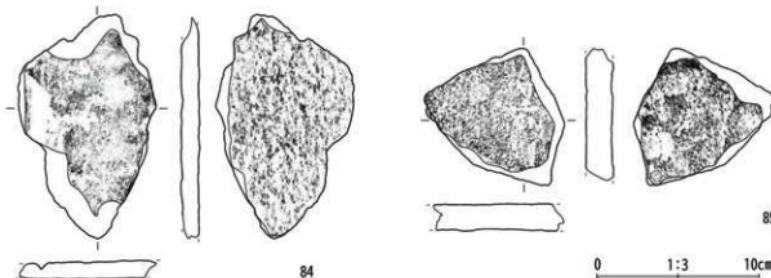
79

80

81

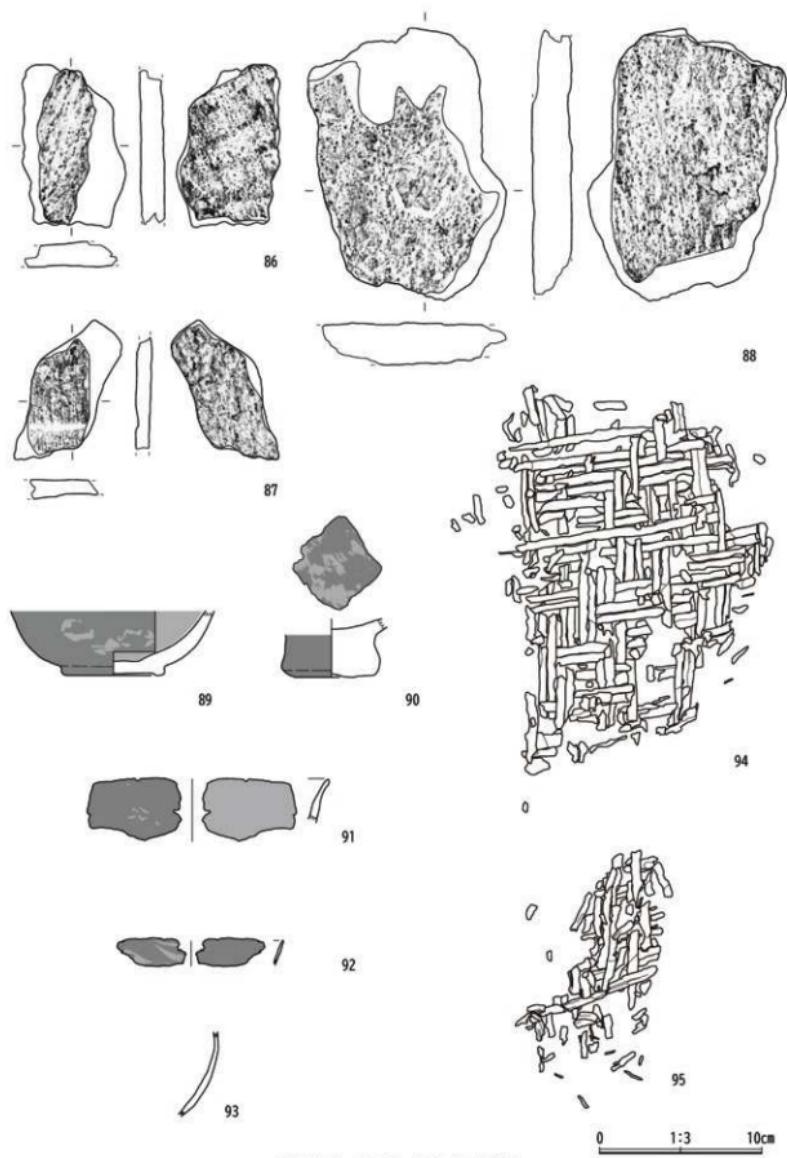
82

83

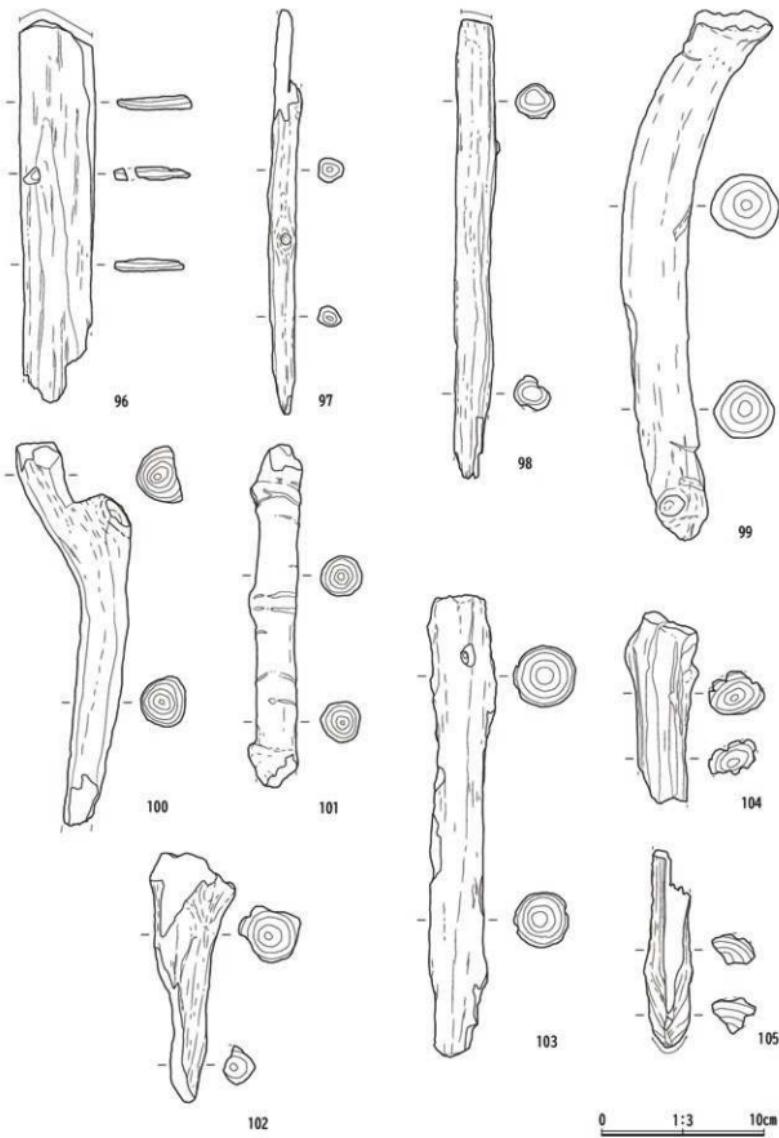


第42図 SD08 (3) 出土遺物

0 1:3 10cm

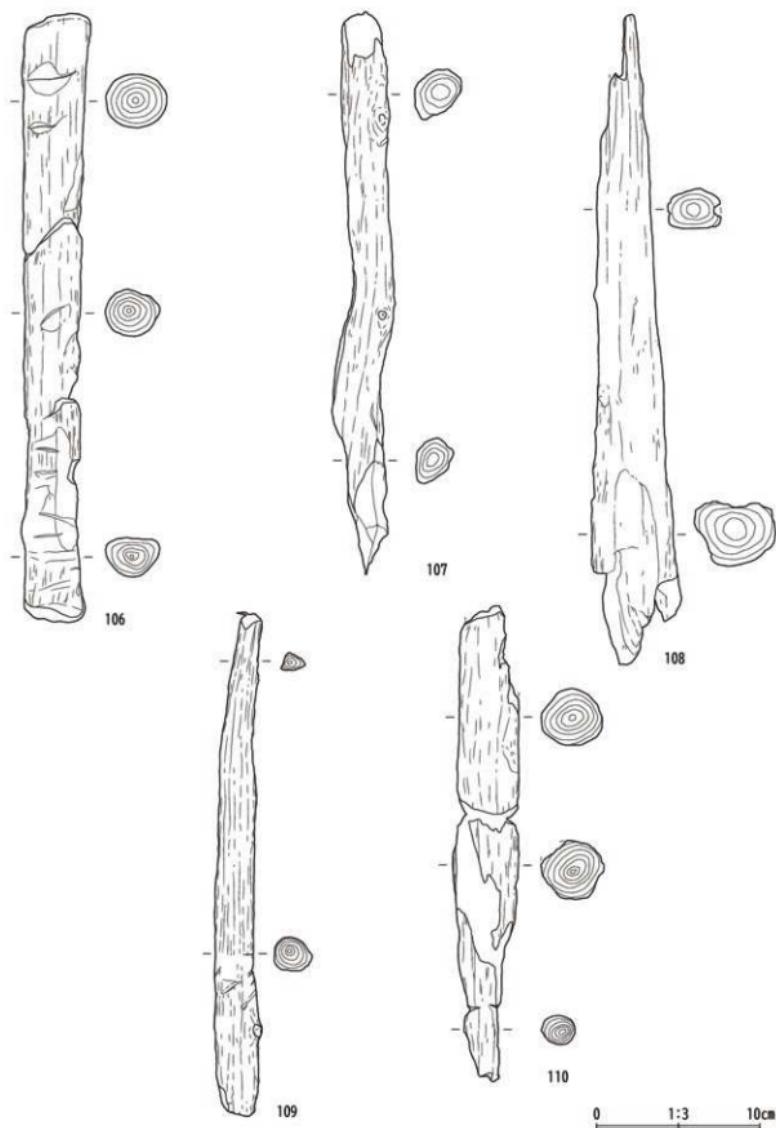


第43図 SD08 (4) 出土遺物

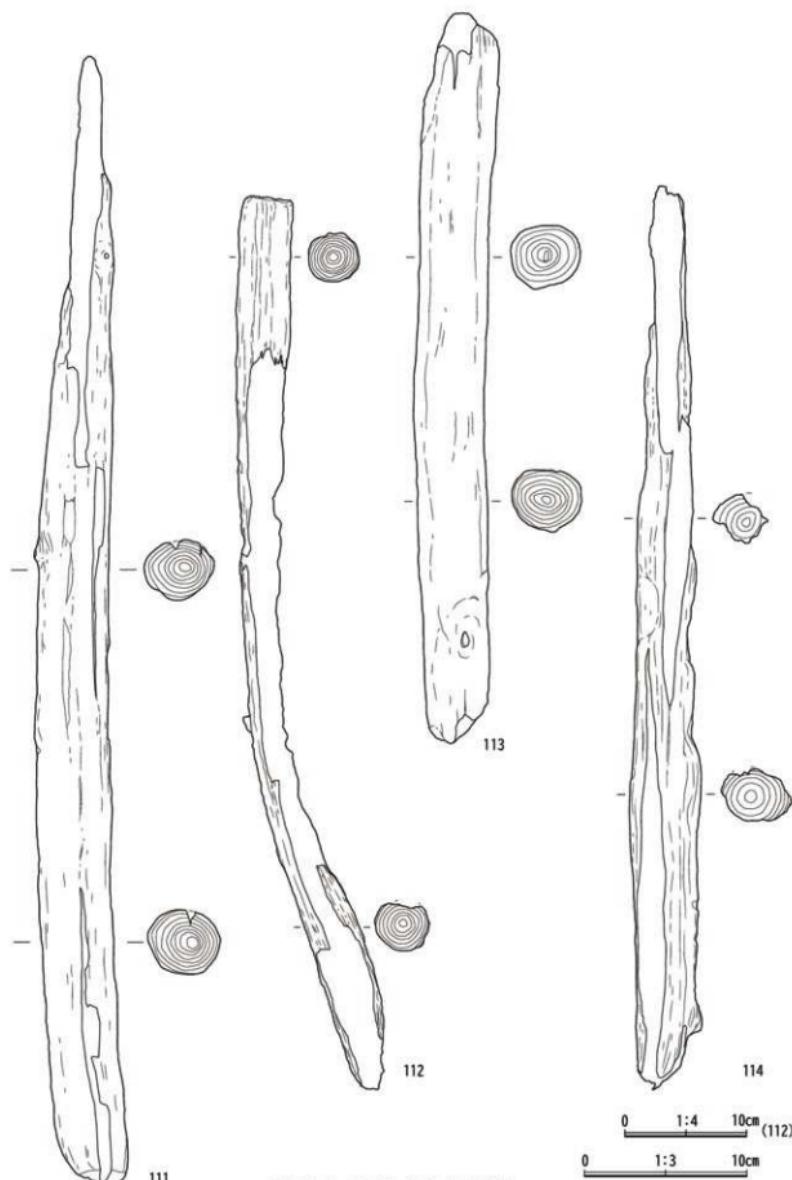


0 1:3 10cm

第44図 SD08 (5) 出土遺物

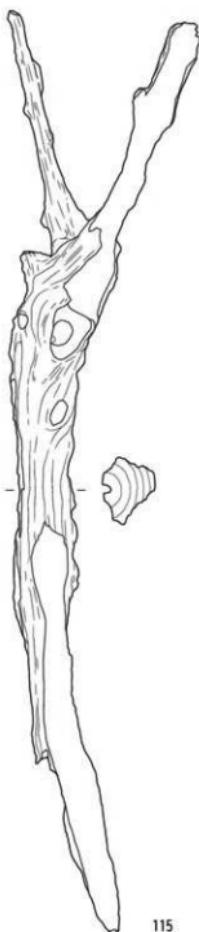


第45図 SD08(6)出土遺物

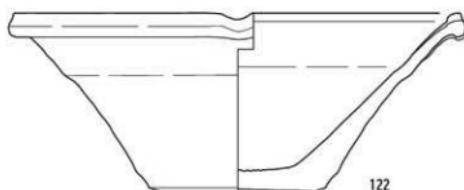
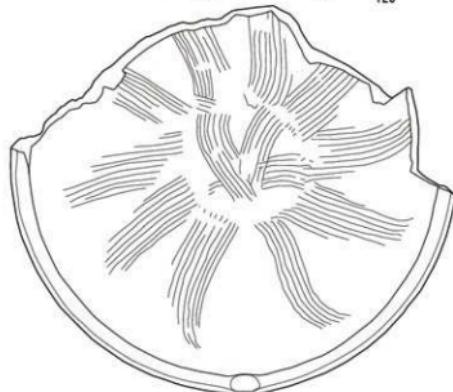
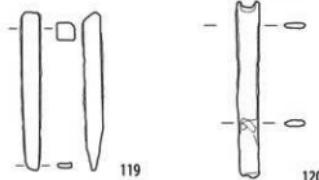
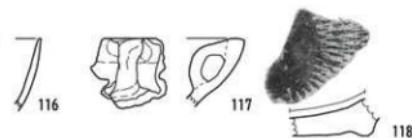


第46図 SD08(7) 出土遺物

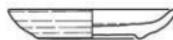
SD08



SD09



SD10



0 1:2 5cm (120)

0 1:3 10cm



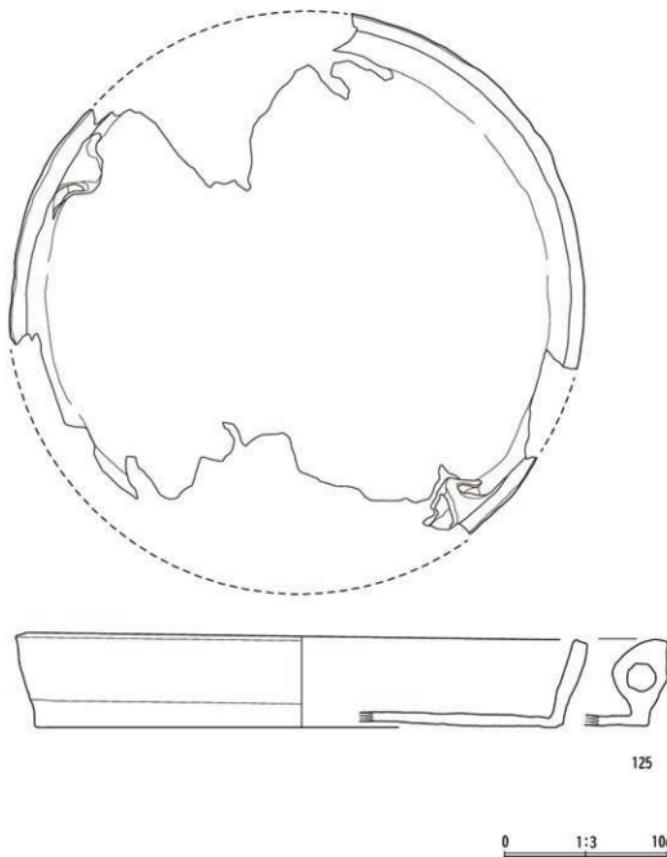
第47図 SD08 (8) · SD09 · SD10 (1) 出土遺物



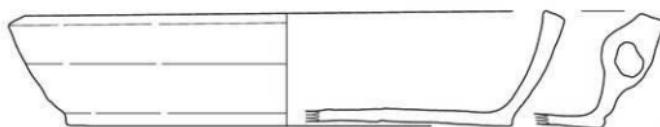
123



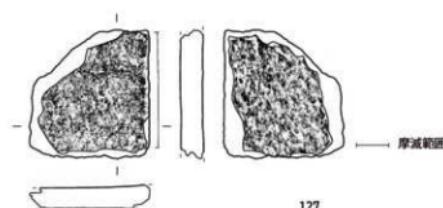
124



第48図 SD10 (2) 出土遺物



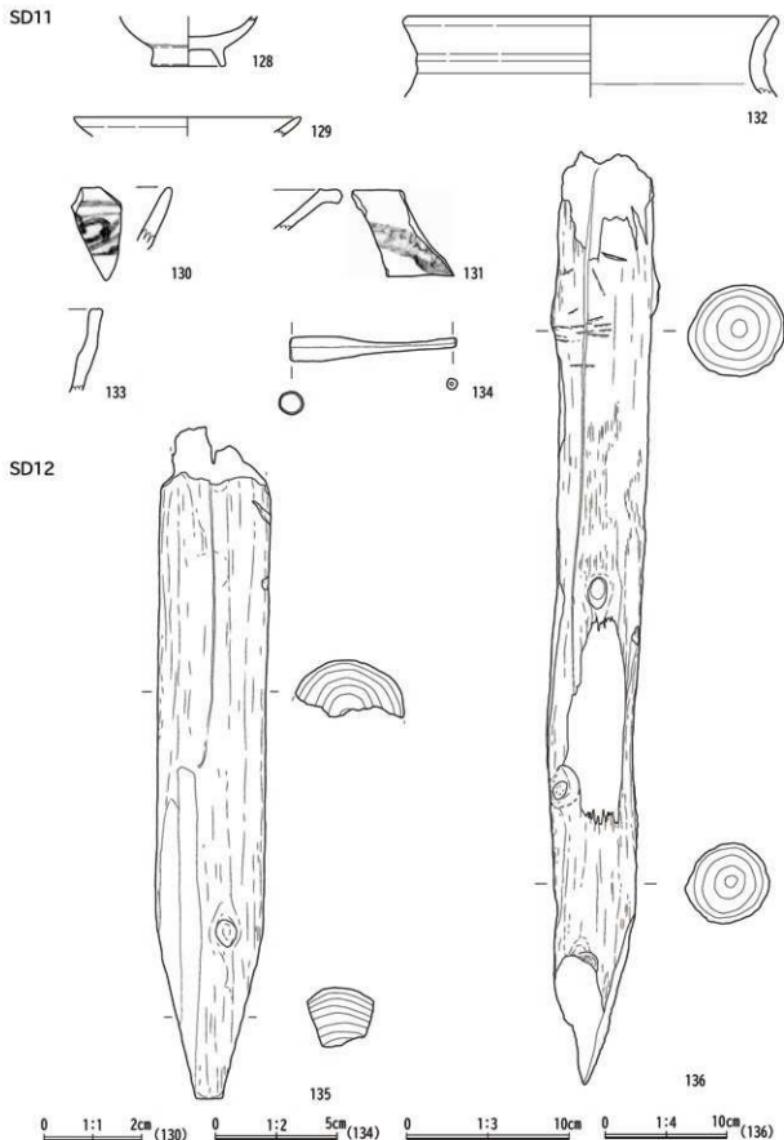
126



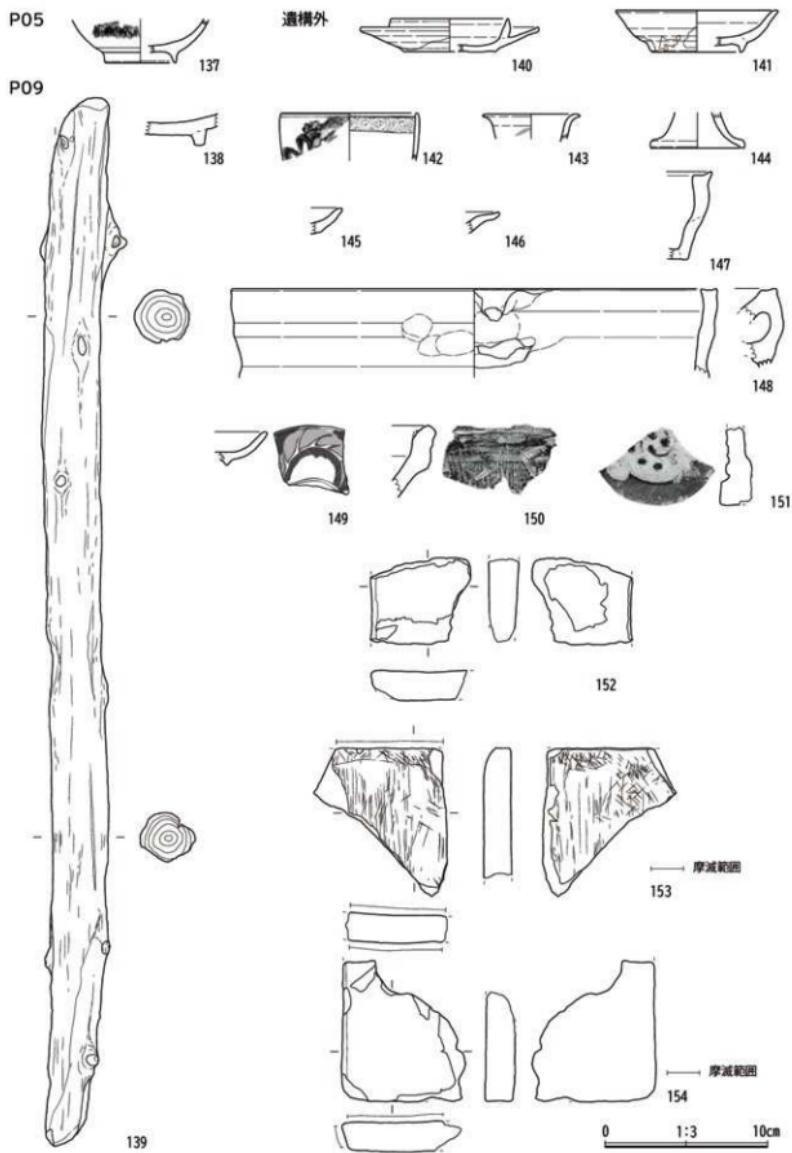
127

0 1:3 10cm

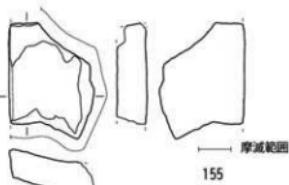
第49図 SD10 (3) 出土遺物



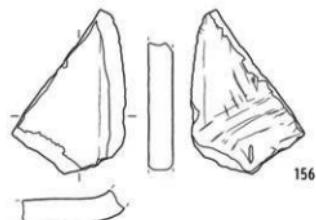
第50図 SD11・SD12出土遺物



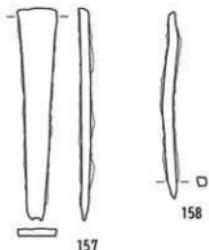
第51図 P05・P09・遺構外（1）出土遺物



155



156



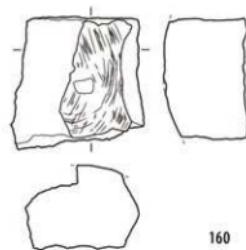
157



158

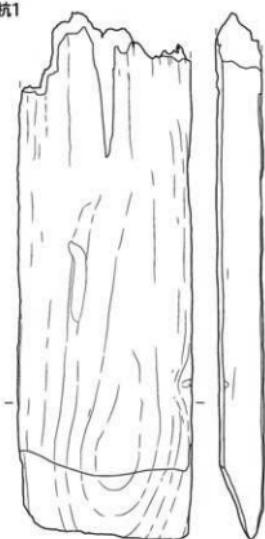


159

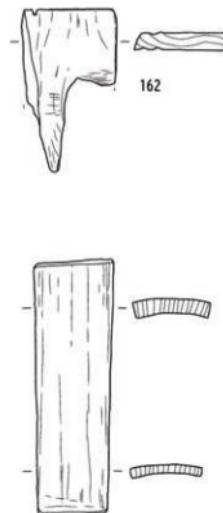


160

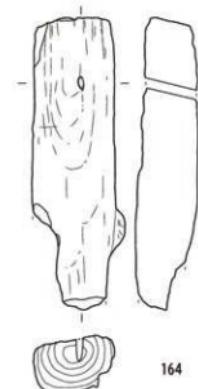
杭1



161



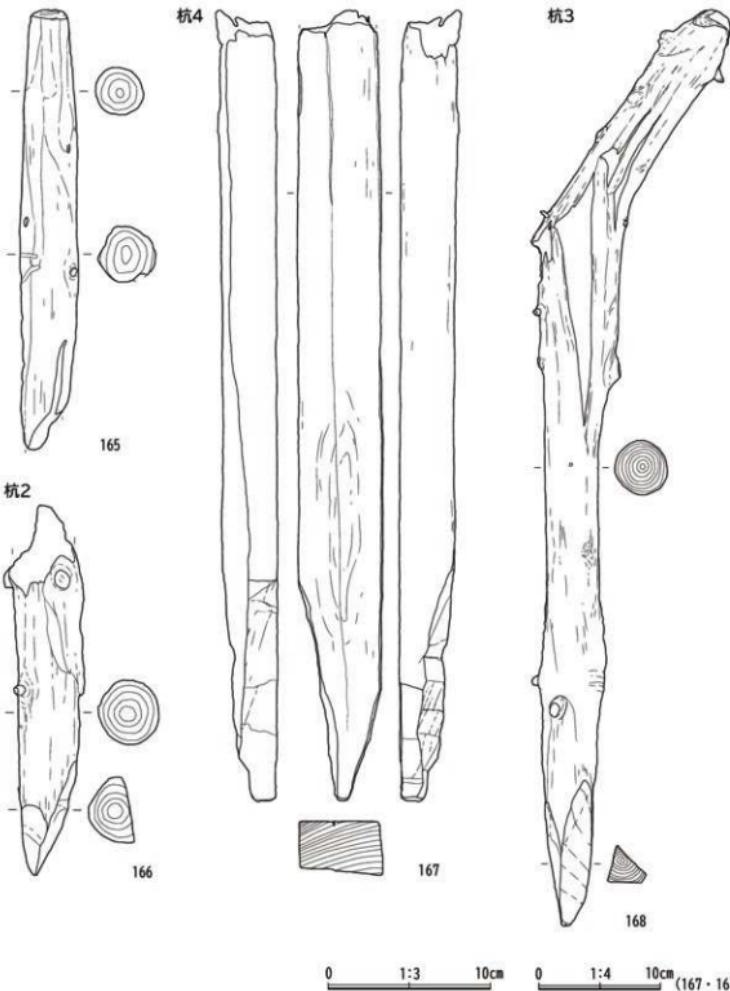
162



163

0 1:3 10cm

第52図 遺構外(2)出土遺物



第53図 遺構外（3）出土遺物

第3表 遺物観察表（土器・陶磁器等）

国版番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	上外面 下内面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	写真図版
32	1	SK01	かわらけ	环	—	6.4	(17)	白色粒(少量)・砂粒	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ、ナデ。底部一方向の板ナデ	回転ナデ			18
34	12	SK06	瓦質土器	香炉	8.8	6.4	5.0	白色粒・雲母・砂粒(多量)	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ、ナデ。竹管による押文。底部回転余切り後足部貼付。周囲ヘラ削り	回転ナデ		底部回転余切り。三足。宝形。竹管文6か所。口縁部内面に焼痕あり。	19
36	16	SK08	陶器	碗	11.8	—	(32)	白色粒(少量)	オリーブ褐・オリーブ黄 オリーブ・オリーブ黄	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	瀬戸美濃系陶器。SK03・SK08間で接合。		19
37	25	SK09	土器	鍋	—	—	(47)	白色粒・黒色粒	黒・黒褐 黒・黒褐	頭部横ナデ。腹部ナデ、ヘラナデ	横ナデ、ヘラナデ	内耳端。15~16世紀。外面全体に煤付着。		19
38	32	SK13	瓦質土器	培培	—	—	(49)	白色粒・雲母(微量)	黒・黒褐 黒・黒褐	回転ナデ。一部ユビナデ	回転ナデ。一部内耳際部分。17世紀前半。			19
39	37	SK15	かわらけ	环	11.0	—	(26)	白色粒・黒色粒・角閃石	灰褐・にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ			20
39	40	SD06	かわらけ	环	10.4	5.2	3.0	白色粒・黒色粒・角閃石・砂粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ、底部回転余切り後無調整	回転ナデ	底部及び内面被熱痕あり。ロクロ左回転。		20
39	41	SD06	かわらけ	环	11.0	4.9	2.8	白色粒・黒色粒・角閃石・砂粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ。底部回転余切り後無調整	回転ナデ	外面底部から体部に被熱痕あり。底部に作業台圧痕。ロクロ左回転。		20
39	42	SD06	陶器	鉢	—	12.8	(52)	黑色粒	黄灰 黄灰	回転ナデ。体下部ヘラ削り。高台付	回転ナデ。黒釉あり	山茶碗系。須質。全体を二次の研磨。軸用覗か。		20
40	48	SD08	かわらけ	皿	10.0	5.6	2.3	白色粒・黒色粒(多量)・角閃石(多量)	褐灰・明褐色 褐灰・明褐色	回転ナデ、横ナデ。体部ヘラ削り。底部回転余切り後無調整	回転ナデ	器面磨減のため調整不明瞭。ロクロ左回転。		21
40	49	SD08	かわらけ	皿	—	5.6	(13)	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母(少量)	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ。底部回転余切り	回転ナデ	器面磨減のため調整不明瞭。		21
40	50	SD08	陶器	皿	12.0	6.8	2.7	白色粒(少量)	灰白・浅黄 浅黄・綠灰	回転ナデ、灰釉	回転ナデ、灰釉に綠釉流し掛け	瀬戸美濃系陶器。高台内目路2つ。17世紀前半。		23
40	51	SD08	陶器	皿	12.0	5.0	3.2	白色粒(少量) 白色粒(微量)	灰白・灰 灰白	口縁・体部長石釉 体部下ナデ	回転ナデ、長石釉	瀬戸美濃系陶器。志野。17世紀前半。		23
40	52	SD08	陶器	皿	11.2	5.6	2.65	白色粒・小粒 白色粒(少量)	灰白 灰白	回転ナデ、底部回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り込み高台。長石釉、目路痕あり	回転ナデ。長石釉	瀬戸美濃系陶器。志野。高台内目路3つ。17世紀前半。12瓣形。		23
40	53	SD08	陶器	皿	11.0	6.2	2.7	白色粒・黑色粒	灰白・灰黄 灰黄・浅黄	回転ナデ、体下部ヘラ削り、底部回転ヘラ削り後高台貼付、釉流し掛け	回転ナデ、施釉	瀬戸美濃系陶器。17世紀前半~半ば。完形。		23
40	54	SD08	陶器	皿	11.6	6.8	2.6	黑色粒(少量)	淡黄・灰白 灰黄・浅黄	回転ナデ、底部回転ヘラ削り後高台貼付。釉流し掛け	回転ナデ、施釉	瀬戸美濃系陶器。17世紀前半~半ば。		23

図版番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調 上外面 下内面	調整・施文 (外側)	調整・施文 (内側)	備考	参考文献
40	55	SD08	陶器	皿	12.2	7.4	2.1	黒色粒(少量)	灰灰・灰白	回転ナデ、底部 回転ヘラ削り。	回転ナデ、施釉	瀬戸美濃系陶器。丸 皿。大窓第3段階。 日跡が高台内に2 つ、見込みに2つ。 16世紀半ば～後半。	23
								黄褐・灰黄・灰 白		施釉、底部目跡 痕粘土付着			
40	56	SD08	陶器	皿	10.8	6.0	2.0	白色粒・砂粒・ 小石	灰白	回転ナデ、体下 部回転ヘラ削り、 削り出し高 輪、貢入あり	回転ナデ、長石 軸	瀬戸美濃系陶器。志 野風。見込みに日跡 が1つ。17世紀前半 ～半ば。	24
40	57	SD08	陶器	皿	12.0	—	(2.5)	黒色粒(少 量)・白色粒 (微量)	灰白	回転ナデ、体下 部ヘラ削り・長 石軸、梅花皮状	回転ナデ、長石 軸、梅花皮状	瀬戸美濃系陶器。志 野風。17世紀前半。	23
40	58	SD08	陶器	皿	10.4	—	2.2	黒色粒・白色 粒(少量)	灰黄・浅黄	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉、 貢入あり。 口様部焼付着	瀬戸美濃系陶器。丸 皿。大窓第1～2段階。 16世紀前半。	23
								浅黄・灰オリー ブ					
40	59	SD08	陶器	天目 茶碗	11.4	—	(5.5)	白色粒・黑色 粒	黑褐・暗褐・明 褐	回転ナデ、体下 部ヘラ削り・口 縁	回転ナデ、施釉	瀬戸美濃系陶器。大 窓第3～4段階。16 世紀半ば～末。	24
								黑褐・暗赤褐					
40	60	SD08	陶器	鉢	—	—	(4.2)	白色粒・黑色 粒	浅黄・黄褐	回転ナデ、灰釉	回転ナデ、灰釉 に線釉流し掛け	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半。	24
								浅黄・灰灰					
41	61	SD08	陶器	甕	—	16.2	(5.3)	白色粒・角閃 石・石英・小 雜	にぶい橙・浅黄 橙	胴上部ヘラ削 り、胴下部ヘラ 削り	回転ナデ、ナデ、 底部の一部に指 頭圧痕	常滑焼。内・斷面に 被熱痕。内面二次的 研磨あり。SD08・ SD11間で接合。15 ～16世紀。	24
41	62	SD08	陶器	擂鉢	—	10.0	(8.0)	白色粒・黑色 粒・石英	浅黄橙・暗褐・ 褐	回転ナデ後胴下 部ナデ。胴下部ヘ ラ削り。鉄軸	回転ナデ、擂目、 鉄軸	瀬戸美濃系陶器。16 ～17世紀。	25
41	63	SD08	陶器	擂鉢	—	10.0	(6.5)	白色粒・白色 粒(少量)	暗灰・にぶい褐	回転ナデ後胴下 部ヘラ削り。鉄 軸	回転ナデ、擂目、 鉄軸	瀬戸美濃系陶器。16 ～17世紀。破壊面被 熱。	24
41	64	SD08	陶器	擂鉢	—	—	(6.3)	白色粒・赤色 粒・石英(少 量)	暗赤褐・浅黄 橙	回転ナデ、鉄軸	回転ナデ、擂目、 鉄軸	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半。No.65と 同一個体。	25
41	65	SD08	陶器	擂鉢	—	—	(5.0)	白色粒・白色 粒	にぶい赤褐・暗 赤褐	回転ナデ、鉄軸	回転ナデ、擂目、 鉄軸	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半。No.64と 同一個体。	25
41	66	SD08	陶器	擂鉢 (片口)	—	—	(4.0)	白色粒・黑色 粒・石英	極暗赤褐	回転ナデ、鉄軸、 口縁部下に沈雜 2本あり	回転ナデ、擂目、 鉄軸	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半。口縁部片 口一部残存。	25
41	67	SD08	陶器	擂鉢	—	—	(3.8)	白色粒・黑色 粒(少量)	黑褐	回転ナデ、鉄軸	回転ナデ、擂目、 鉄軸	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半。	25
								黑褐					
41	68	SD08	瓦質 土器	培烙	34.0	32.2	5.8	白色粒・赤色 粒・角閃石、 砂粒	白・黒褐・褐	口縁部横ナデ、 体部ナデ、指頭 圧痕	横ナデ、内耳あ り	16世紀末～17世紀 前半。	21
								黒・黒褐・褐					
41	69	SD08	瓦質 土器	培烙	38.0	34.2	5.1	白色粒・黑色 粒・赤色粒	浅黄橙・黑褐・ にぶい褐	口縁部横ナデ、 体部ナデ	横ナデ、内耳あ り	16世紀末～17世紀 前半。輪積み痕あり。	21
								黒褐・にぶい褐					
41	70	SD08	瓦質 土器	培烙	35.0	32.0	7.5	白色粒・砂 粒・金雲母(多 量)	黑褐	口縁部横ナデ、 体部ナデ、体下 部指頭圧痕	横ナデ、ナデ、 内耳あり	16世紀末～17世紀 前半。	22
								灰褐・褐					
42	71	SD08	瓦質 土器	培烙	35.0	32.4	5.85	白色粒・黑色 粒・角閃石	黑・褐灰	口縁部横ナデ、 体部ナデ、一部 指頭圧痕。口縁 部面取り	横ナデ、ナデ、 内耳あり	16世紀末～17世紀 前半。	22
								褐灰・褐					

図版番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	上外面 下里面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	参考文献
42	72	SD08	瓦質土器	焰烙	35.0	33.4	6.1	白色粒・黒色粒・角閃石・橙色粒(少量)	黒 灰黄褐	口縁部横ナデ、 体下部ナデ、一 部ユビナデ。口 唇部面取り	横ナデ、ナデ、 内耳あり	16世紀末～17世紀 前半。外面に煤付着。	22	
42	73	SD08	瓦質土器	焰烙	34.0	31.0	5.7	白色粒・黒色粒・角閃石	黒・褐灰 黒・黒褐	横ナデ、ナデ。 口縁部に沈線あり	横ナデ	16世紀末～17世紀 前半。	21	
42	74	SD08	瓦質土器	焰烙	—	—	(5.1)	白色粒・黒色粒・角閃石・ 橙色粒(多量)	褐灰 褐灰	回転ナデ、ナデ、 体下部指頭圧痕。 口脣部面取り	回転ナデ	鉄分付着。16世紀末 ～17世紀前半。	22	
42	75	SD08	瓦質土器	焰烙	—	—	5.5	白色粒・黒色粒・角閃石	黒褐・黒 黒褐・褐灰	横ナデ、ナデ、 口脣部面取り	横ナデ	16世紀末～17世紀 前半。	22	
42	76	SD08	瓦質土器	焰烙	—	—	6.4	白色粒・黒色粒・金雲母	黒・黒褐 灰黄褐・灰褐	横ナデ、ナデ、 体下部指頭圧痕。 口脣部面取り	横ナデ、回転ナ デ	16世紀末～17世紀 前半。	22	
42	77	SD08	瓦質土器	焰烙	—	—	5.6	白色粒・黒色粒・角閃石	黒褐・にぶい黃 褐 褐灰	回転ナデ、ナデ、 体下部指頭圧痕	回転ナデ、ナデ	16世紀末～17世紀 前半。	22	
42	78	SD08	瓦質土器	焰烙	—	—	(2.3)	白色粒・角閃石・砂粒	褐灰 褐灰・黒褐	ナデ	横ナデ、ナデ、 内耳あり	16世紀末～17世紀 前半。	22	
47	116	SD09	陶器	碗	—	—	(4.5)	眼窓・黒色粒	灰オリーブ 灰白	回転ナデ。青緑 釉	回転ナデ。灰白 釉	肥前系陶器。17世紀 後半。	26	
47	117	SD09	瓦質土器	焰烙	—	—	(4.2)	白色粒・黒色粒・角閃石・ 金雲母	褐灰 にぶい赤褐	回転ナデ。体下 部指頭圧痕	回転ナデ。内耳 あり		26	
47	118	SD09	陶器	擂鉢	—	—	(2.3)	白色粒・角閃石(多量)	褐灰 褐灰	回転ナデ。底部 削り出し高台	擂目	珊瑚系陶器。内面、 高台部を二次的研磨。 18世紀前半。	26	
47	121	SD10	陶器	皿	10.4	6.4	1.8	白色粒・黒色粒・赤色粒(ごく少量)	にぶい赤褐 にぶい赤褐	回転ナデ、鉄釉、 底部削り込み高台	回転ナデ、鉄釉、 底部削り込み高台	瀬戸美濃系陶器。内 充里。ほぼ完存。大 室第4段階後半～ 木。16世紀末～17世 紀初頭。	26	
47	122	SD10	陶器	擂鉢	27.3	10.8	10.9	黑色粒・橙色粒・金雲母	赤褐 赤褐・にぶい橙	回転ナデ。鉄釉、 底部回転系切り	回転ナデ、鉄釉、 底部回転系切り	瀬戸美濃系陶器。片 口。内面を二次的研 磨。大室第4段階。 16世紀末。	26	
48	123	SD10	瓦質土器	焰烙	—	—	4.9	白色粒・黒色粒・ 角閃石・オリーブ黒	にぶい黄褐・黒 橙	横ナデ、体下部 ナデ、一部指頭 圧痕	横ナデ	内外面に煤付着。	27	
48	124	SD10	瓦質土器	焰烙	—	—	(4.8)	白色粒・黒色粒・角閃石	黒・黒褐 暗灰	横ナデ、体下部 ナデ、一部指頭 圧痕。口脣部面 取り	横ナデ、ナデ		27	
48	125	SD10	瓦質土器	焰烙	33.4	31.8	5.85	白色粒・黒色粒・橙色粒・ 角閃石(多量)	黒褐 褐灰	回転ナデ、体下 部ナデ、指頭圧 痕	回転ナデ、ナデ、 内耳あり		27	
49	126	SD10	瓦質土器	焰烙	32.0	27.2	6.8	黑色粒・砂粒・ 橙色粒・金雲母(多量)	暗褐 にぶい褐	回転ナデ、ナデ、 内耳あり	回転ナデ、ナデ、 内耳あり		27	
50	128	SD11	磁器	碗	—	4.6	(3.0)	黑色磁粒	浅黄・灰白 灰白	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	肥前系磁器。内面燒 成時の付着物。	27	
50	129	SD11	かわらけ	环	14.0	—	(1.2)	白色粒・橙色粒・角閃石	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ		27	

図版番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調 上外面 下里面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	写真図版
50	130	SD11	磁器	碗	—	—	(13)	緻密	灰白 灰白	透明釉、溝文染付	透明釉	中国明代。青花。	27
50	131	SD11	陶器	鉢	—	—	(25)	白色粒(少 量)・黒色粒 (微量)・角 閃石	灰白	回転ナデ、灰釉	回転ナデ。灰釉 に経釉流し掛け	瀬戸美濃系陶器。17 世紀半ば~後半。	27
50	132	SD11	瓦質土器	壺	23.2	—	(50)	白色粒・黒色 粒・釋・砂粒 (多量)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	胎土粗く、摩滅著。	27
50	133	SD11	瓦質土器	焰壺	—	—	(50)	白色粒・黒色 粒・角閃石	黒褐 褐灰	回転ナデ、体下 部指頭圧痕	回転ナデ		27
51	137	P05	磁器	碗	—	4.4	(26)	緻密	灰白 灰白	透明釉、染付	透明釉	肥前系磁器。18世紀。	27
51	138	P09	陶器	皿	—	—	(12)	白色粒・小釋 ・雲母(微量)	灰白・灰黄 灰黄・にぶい黄 橙	体下部ヘラ削 り、底部高台貼 付後回転ナデ	回転ナデ。一部 灰釉	瀬戸美濃系陶器。	27
51	140	地山上	陶器	灯明 受皿	7.1	5.6	21	白色粒・黒色 粒・角閃石(少 量)	にぶい褐・赤褐 赤褐・角閃石	回転ナデ、体下 部同転ヘラ削 り、鉄輪	回転ナデ、鉄輪 部に煤付着。5K-2 グリッド出土。	瀬戸美濃系陶器。口 ~底部回転ヘラ削 り、灰釉	29
51	141	落ち込み	陶器	皿	9.8	5.6	26	白色粒・黒色 粒・角閃石(微 細)	灰白・にぶい橙 灰白・明灰・オ リーブ灰	回転ナデ、体下 ~底部ヘラ削 り、灰釉	回転ナデ。底部 に乗ね焼きの痕 跡あり。灰釉	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半~半ば。6 Lグリッド出土。	28
51	142	落ち込み	磁器	碗	8.4	—	(29)	緻密	灰白 灰白	透明釉、植物文	透明釉、四方擇	肥前系磁器。18世紀 中頃。	28
51	143	落ち込み	磁器	壺	5.6	—	(15)	緻密	灰白・青灰 灰白	回転ナデ、透明 釉、染付	回転ナデ、透明 釉	肥前系磁器。17世紀 後半~18世紀前半。 4Lグリッド出土。	28
51	144	6K-1	磁器	脚部	—	5.6	(22)	緻密	灰白 灰白	回転ナデ、透明 釉	回転ナデ、透明 釉	遺構検出中出土。	29
51	145	落ち込み	陶器	小皿	—	—	(16)	白色粒・角閃 石(少量)	黄灰 黄灰	回転ナデ、施釉、 回転ナデ、施釉、 貫入あり	回転ナデ、施釉、 回転ナデ、施釉、 貫入あり	瀬戸美濃系陶器。17 世紀前半~半ば。4 Lグリッド出土。	28
51	146	落ち込み	陶器	小皿	—	—	(13)	白色粒(微細)	灰白・灰オリーブ 灰白・灰オリーブ	回転ナデ。綠釉	回転ナデ。綠釉	古瀬戸。15世紀。3 L~4Lグリッド出 土。	28
51	147	落ち込み	瓦質土器	焰壺	—	—	54	白色粒・黒色 粒・角閃石・ 雲母	黒褐・にぶい黃 褐 黒褐・黄褐	回転ナデ、ナデ、 制下部ユビナナ テ	回転ナデ	輪積み痕あり。試掘 時出土。	28
51	148	落ち込み	瓦質土器	焰壺	30.0	—	(55)	白色粒・黒色 粒・角閃石	黒褐・褐灰 黒褐・黄褐	横ナデ、ナデ、 指頭圧痕	横ナデ、ナデ、 内耳あり	外面に煤付着。試掘 時出土。	28
51	149	遺構外	磁器	小皿	—	—	2.0	緻密	灰白・白 灰白	白色釉、透明釉 染付	白色釉、透明釉 染付	表土剥離中出土。	29
51	150	耕土中	陶器	擂鉢	—	—	(45)	白色粒・石英 小難	赤褐・明赤褐 赤褐・明赤褐	回転ナデ。口縁 部に2本の沈縫 あり	回転ナデ、擂目	單明石系陶器。18世 紀前半~中頃。	29

第4表 遺物観察表（瓦）

国版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	胎土	色調	上外面 下内面	備考	写真 図版
51	151	地山上	軒丸瓦	(4.8)	(7.2)	2.0	49.4	白色粒・黒色粒 角閃石	黒褐 灰白	達珠三巴文軒丸瓦...右巻きの巴文。達珠数12。31-22グリッド出土。	29	
51	152	地山上	平瓦	(5.1)	(6.2)	1.8	56.5	白色粒・黒色粒 角閃石	暗灰 暗灰	凸凹面ナデ、側面ヘラ削り。二次的研磨。 6K-6グリッド出土。	29	
51	153	拂土中	平瓦	(9.15)	(8.2)	1.7	125.0	白色粒・黒色粒	黒 黒	全体に二次的研磨。砥石として転用か。	29	
51	154	遺構外	平瓦	(8.7)	(7.6)	1.8	97.0	白色粒・黒色粒 角閃石	黒 黒、にぶい橙	凹面と側面に二次的な研磨あり。表土掘削中出土。	29	
52	155	遺構外	平瓦	(7.1)	(5.2)	1.8	61.4	白色粒・黒色粒 角閃石	黒 黒	側面に二次的研磨。砥石として転用か。 表土掘削中出土。	29	
52	156	擾乱中	平瓦	(9.2)	(6.9)	1.5	80.0	白色粒・黒色粒 角閃石	暗灰 暗灰	凸面に傷あり。二次的な研磨あり。 5K-6擾乱中出土。	29	

第5表 遺物観察表（石製品）

国版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考			写真 図版
32	2	SK01	板碑	(11.9)	(7.4)	1.3	2106				18
32	7	SK02	板碑	(25.7)	(20.1)	2.5	2,200	キリータ一部残存。裏面に工具痕と被熱痕あり。頭部完存。二条縞。達実あり。割付縞あり。重量10g単位切り捨て。			18
33	8	SK02	板碑	(48.8)	22.3	2.2	4,500	キリータ。梵字光明真言4行。明円淨尼「永廿二年十一月三日。1415年。達実と運介あり。重量10g単位切り捨て。			18
33	9	SK02	板碑	(21.5)	(11.7)	1.7	6750	キリータ。二条縞。羽根刻み。			18
34	10	SK02	板碑	(21.8)	(11.25)	1.2	4123	押し削り痕。			18
34	13	SK06	板碑	(31.3)	16.45	1.35	1,200	阿弥陀三尊板碑。サク。顕善〔 〕十一月。運介あり。割付縞あり。重量10g単位切り捨て。			19
35	14	SK06	板碑	52.8	25.0	2.8	6,500	文保二年十二月。1318年。界縞あり。達実と運介あり。重量10g単位切り捨て。			19
38	35	SK13	板碑	65.2	21.7	2.7	8,100	阿弥陀三尊板碑。金泥混存。二条縞。達実と運介あり。割付縞あり。完形。文明十七年乙巳妙阿弥淨尼八月十五日。1485年。重量10g単位切り捨て。			20
39	36	SK13	板碑	(30.5)	22.4	2.8	4,100	キリータ。二条縞。達実と運介あり。重量10g単位切り捨て。			20
42	82	SD08	石臼	(8.0)	(4.2)	(3.0)	83.7	粉挽臼(上臼)。上面に擦痕と工具痕。二次的研磨あり。安山岩。			25
42	83	SD08	板碑	(8.9)	(6.0)	2.4	224.2	二条縞。キリータ。			25
42	84	SD08	板碑	(13.6)	(8.5)	1.1	181.6	キリータ。			25
42	85	SD08	板碑	(8.05)	(8.25)	1.7	187.4	月廿五日か。			25
43	86	SD08	板碑	(9.8)	(6.25)	1.5	163.7	被熱痕あり。1面と断面の一部に媒付着。			25
43	87	SD08	板碑	(6.8)	(4.75)	1.2	72.6	二条縞。			26
43	88	SD08	板碑	(16.8)	(12.2)	2.6	780.0	実測図表面下端に斜め方向の工具痕。			26
49	127	SD10	板碑	(7.9)	(7.4)	1.5	156.8	1側面を二次的研磨。			26
52	159	落ち込み	砾石	6.1	3.8	2.3	73.1	上面を除く5面に使用痕あり。舞面2面に刃傷の痕跡。流紋岩。4Lグリッド出土。			28
52	160	落ち込み	礫	8.1	8.2	5.2	522.0	裏面側に被熱痕。凝灰岩。			28

第6表 遺物観察表（金属製品）

国版 番号	遺物 番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	写真 図版
37	26	SK09	短刀	29.2	2.0	(極) 0.4	54.1	無反り。ほぼ完形。棒側直角間。直径 5 mm の目釘穴 1 つ。	19 38
38	33	SK13	小刀	14.8	3.7	(茎) 0.3	36.7	ナゲ闇。茎部の 3 mm が本来の厚みか。	19 38
39	39	SD03	不明	2.9	(2.1)	0.1	2.3	鋼か。方形孔 3 つ。方形孔短辺に 1 ミリの凹みあり。	20
42	79	SD08	鉄滓	4.4	3.5	1.7	33.9	小躍付着。	25
42	80	SD08	鉄滓	6.0	4.1	2.1	17.1	ガラス化。発泡。	25
42	81	SD08	鉄滓	4.2	2.8	1.7	18.9	ガラス化。発泡。	25
47	119	SD09	鑿	9.8	1.2	1.2	62.5		26
50	134	SD11	煙管	6.9	1.0	1.0	6.6	吸口。銅製品。	27
52	157	落ち込み	楔	13.1	2.4	0.45	57.8	ほぼ完形。3L ~ 5M グリッド出土。	28
52	158	地山上	和釘	11.45	0.55	0.5	30.3	4J 8 グリッド出土。	28

第7表 遺物観察表（骨製品・材質不明品）

国版 番号	遺物 番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	写真 図版
39	43	SD06	サイコロ	1.0	0.9	0.85	0.5	骨製。1・2・5・6 の目残存。脆弱。	20
47	120	SD09	不明	(7.2)	0.9	0.2	1.6	一部に被膜か。材質べっ甲か。先端に孔あり。	26

第8表 遺物觀察表（木製品）

国版 番号	遺物 番号	遺構名	種類	長さ・口径 (cm)	幅・底径 (cm)	厚さ・器高 (cm)	備考	写真 図版
32 3	SK01	椀	口径 13.2	底径 5.9	器高 7.4		外面及高台内黒漆。内面赤色漆。高台部完存。歪みあり。 ケヤキ。	30
32 4	SK01	皿	口径 —	底径 6.4	器高 (1.7)		赤色漆で四つ足と楕物文あり。外面は黒漆。内面赤色漆。 楕の可能性あり。ブナ属。	30
32 5	SK01	板材	(13.8)	9.7	0.9		上面に刃物による工具痕あり。上部欠損。柄側板か。	30
32 6	SK01	板材	(24.2)	2.5	1.1		上面に工具痕あり。	30
34 11	SK03	棒材	32.3	7.2	4.3		全体的に欠損。刃物による工具痕あり。	30
35 15	SK06	桶底板	22.6	(21.3)	1.6		二枚組。ほぼ完存。ほぞ穴2か所あり。スギ。	30
36 17	SK08	板材	(6.9)	3.8	0.9		刃物による工具痕あり。2か所穿孔あり。柄側板の転用か。	30
36 18	SK08	棒材	26.8	4.9	3.1		全体的に欠損。	31
36 19	SK08	棒材	45.1	5.9	4.2			32
36 20	SK08	棒材	37.2	4.6	4.6		加工痕あり。	32
36 21	SK08	杭	80.0	4.7	4.3			36
37 22	SK08	杭	34.9	10.7	3.6		刃物による工具痕あり。	31
37 23	SK08	杭	33.5	10.6	4.1			31
37 24	SK08	板材	(19.8)	5.0	1.7			31
37 27	SK12	棒材	(6.5)	1.6	1.1		No.28と同一個体。	32
37 28	SK12	棒材	14.6	1.7	1.4		No.27と同一個体。	32
37 29	SK12	棒材	(12.2)	1.3	1.0		No.30と同一個体。	32
37 30	SK12	棒材	(14.1)	1.1	0.8		No.29と同一個体。	32
37 31	SK12	棒材	55.9	2.8	2.9		2か所の破断面を平坦に加工か。被熱痕あり。	36
38 34	SK13	柄	15.2	2.9	2.6		小刀No.33の柄部。ほぼ完存。クワ属。	19
39 38	SD01	椀	—	—	器高 (0.9)		外面一部に黒漆。その上に赤色漆の痕跡あり。	32
40 44	SD07	不明	(5.2)	3.0	1.0		上面を平坦に加工。	32
40 45	SD07	板材	15.9	4.4	1.0		3か所の穿孔。1か所未貫通の小孔あり。	32
40 46	SD07	板材	(11.7)	3.0	1.6		樹皮遺存。	32
40 47	SD07	棒材	38.5	3.4	3.3		2か所の穿孔。上部に穿孔らしき加工痕2か所あり。先端部刀状に加工。	32
43 89	SD08	椀	口径 —	底径 6.0	器高 (3.9)		外面及び高台内黒漆。赤色漆の文様あり。内面赤色漆。 トチノキ。	33
43 90	SD08	椀	口径 —	底径 5.1	器高 (3.1)		内面赤色漆。	32
43 91	SD08	椀	口径 —	底径 —	器高 (2.7)		外面黒漆。赤色漆の文様あり。内面赤色漆。	32
43 92	SD08	椀	口径 —	底径 —	器高 (1.5)		内外面黒漆。外側赤色漆の文様あり。	32
43 93	SD08	椀	口径 —	底径 —	器高 (5.2)		内外面黒漆後赤色漆で文様を描いていると思われる。	32
43 94	SD08	カゴ状	(23.8)	(17.0)	—		タケ・ササ類。No.95と同一個体。	33
43 95	SD08	カゴ状	(13.0)	(8.1)	—		タケ・ササ類。No.94と同一個体。	33
44 96	SD08	板材	(23.5)	4.7	0.8		上部平坦に加工。穿孔あり。	34
44 97	SD08	棒材	(24.9)	1.8	1.5			34
44 98	SD08	棒材	(28.2)	2.6	2.1		頭部切断。	34
44 99	SD08	棒材	32.6	4.2	3.8		彎曲。	34
44 100	SD08	杭	(23.6)	5.3	4.1		L字状に切断。	33
44 101	SD08	杭	(21.1)	3.0	2.5		樹皮残る。	33
44 102	SD08	杭	15.3	5.1	3.5			33
44 103	SD08	杭	28.4	4.0	3.8			34
44 104	SD08	杭	(11.75)	4.3	2.6			33
44 105	SD08	杭	(12.1)	3.0	2.2		先端部加工。	33

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ・口径(cm)	幅・底径(cm)	厚さ・器高(cm)	備考	写真図版
45	106	SD08	棒材	37.4	4.0	3.4		34
45	107	SD08	杭	34.6	3.1	3.1	先端部加工。	34
45	108	SD08	杭	40.0	5.1	4.0	杭として使用。	34
45	109	SD08	杭	30.9	2.9	2.0	杭として使用。	34
45	110	SD08	杭	29.2	4.1	3.6	杭として使用。	34
46	111	SD08	杭	69.4	4.5	3.9	杭として使用。樹皮残る。	36
46	112	SD08	棒材	73.3	4.4	4.0	頂部切断。	36
46	113	SD08	杭	44.9	4.6	4.0		34
46	114	SD08	杭	55.5	4.4	3.2	杭として使用。	36
47	115	SD08	棒材	56.8	11.8	4.1		36
50	135	SD12	杭	41.3	6.7	3.6	杭先2面加工。上部に工具痕あり。	37
50	136	SD12	杭	76.5	8.5	7.5	杭先3面加工。一部に刃傷あり。	37
51	139	P09	杭	64.5	5.3	3.2		37
52	161	杭1	杭	(31.9)	10.7	2.9	板状。先端部2面加工。	35
52	162	地山上	板材	(10.0)	5.9	1.1	上部に抉りあり。6Kグリッド出土。	35
52	163	遺構外	橋脚板	15.6	4.9	1.0		35
52	164	地山上	杭	(18.0)	5.3	3.8	斜めに穿つ孔あり。5K2グリッドに突き刺さって出土。	35
53	165	遺構外	杭	(26.7)	3.6	3.4		35
53	166	杭2	杭	(22.7)	4.8	4.0	杭先2面加工。	35
53	167	杭4	杭	64.8	6.9	4.8	角材。杭先3面加工。	37
53	168	杭3	杭	75.1	4.4	4.5	杭先3面加工。樹皮一部残存。	37

IV 出土遺物の保存処理・樹種同定

出土遺物のうち以下の木製品と鉄製品については保存処理を実施した。本章では保存処理方法について記載するとともに、木製品については保存処理過程で得られた知見について記載する。

1. 木製品

(1) 保存処理方法

- ア. 処理前調査：現状確認。写真撮影。樹種同定。
- イ. クリーニング（乾燥前）：遺物に付着している泥やゴミを刷毛等で除去する。
- ウ. EDTA処理：金属系物質（錆など）を捕捉する性質の薬剤（EDTA）に浸漬して、遺物中の阻害物質を除去する。
- エ. 置換処理：遺物中の水分とPEG（高分子系樹脂）とを化学的に入れ替えるために前述の濃度を徐々に上げて行き、40~60%まで含浸する。
- オ. 予備凍結：遺物を-45℃の冷凍庫に入れ、予備凍結を行う。
- カ. 真空凍結乾燥：乾燥庫内を-40℃（コールドトラップ-80℃）にし、遺物を強制的に乾燥させる目的で真空乾燥を行う（フリーズドライ）。
- キ. 表面処理：遺物の表面に吹き出たPEGを、蒸気で払拭する。
- ク. 経時変化調査：処理後、一定期間変化の有無を確認する。
- ケ. クリーニング（乾燥後）：遺物に付着しているゴミを刷毛等で再度、除去する。
- コ. 接合・復元：接合部位があれば接合し、亀裂等に合成樹脂を充填して補強する。
- サ. 処理後調査：写真撮影。保存処理記録作成。

(2) 樹種同定

- ア. 分析方法（No.3・4・15・34・89）

生材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作成し、電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

- イ. 分析方法（No.94・95）

剃刀を用いて、横断面の徒手切片を作製し、ガムクロラールで封入してプレパラートとする。プレバ

ラートは、生物顕微鏡で組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。

ウ. 結果

広葉樹4種類（ケヤキ、ブナ属、クワ属、トチノキ）、針葉樹1種類（スギ）、タケ亜科1種類に同定された（第9表）。以下に検出された試料の植物解剖学的所見を述べる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1～2列。孔圈外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クワ属 (*Morus*) クワ科

環孔材で、孔圈部は2～3列、晚材部では単独または2～4個が複合して斜方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～10細胞高。

・タケ亜科 subfam. *Bambusoideae* イネ科

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の纖維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、纖維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

いわゆるタケ・ササ類であるが、節

第9表 木製品樹種同定結果

の形状や稈柄の有無等が確認できないため、属・種の同定は困難である。

遺物No.	遺構名-取り上げNo.	遺物種類	樹種
3	SK01-No.7	椀	ケヤキ
4	SK01-No.6	椀	ブナ属
15	SK06	桶底板	スギ
34	SK13	小刀柄	クワ属
89	SD08-No.157	椀	トチノキ
94・95	SD08	カゴ状木製品	タケ亜科

2. 鉄製品

短刀（No.26）と小刀（No.33）について、以下のとおり実施した。

（1）保存処理方法

ア. 処理前調査：現状確認。写真撮影。X線撮影。

イ. クリーニング：精密機器を用いて、慎重に鏽を除去する。

ウ. 脱塩処理：遺物中の塩化物イオン等の陰イオンを洗浄するため、オートクレーブ装置により脱塩処理を行う。

エ. 樹脂含浸：アクリル樹脂を減圧含浸する。

オ. 接合・樹脂充填・復元：必要に応じ接合箇所の亀裂等には合成樹脂を充填して補強する。また、欠損箇所に復元の必要があれば、合成樹脂で復元する。

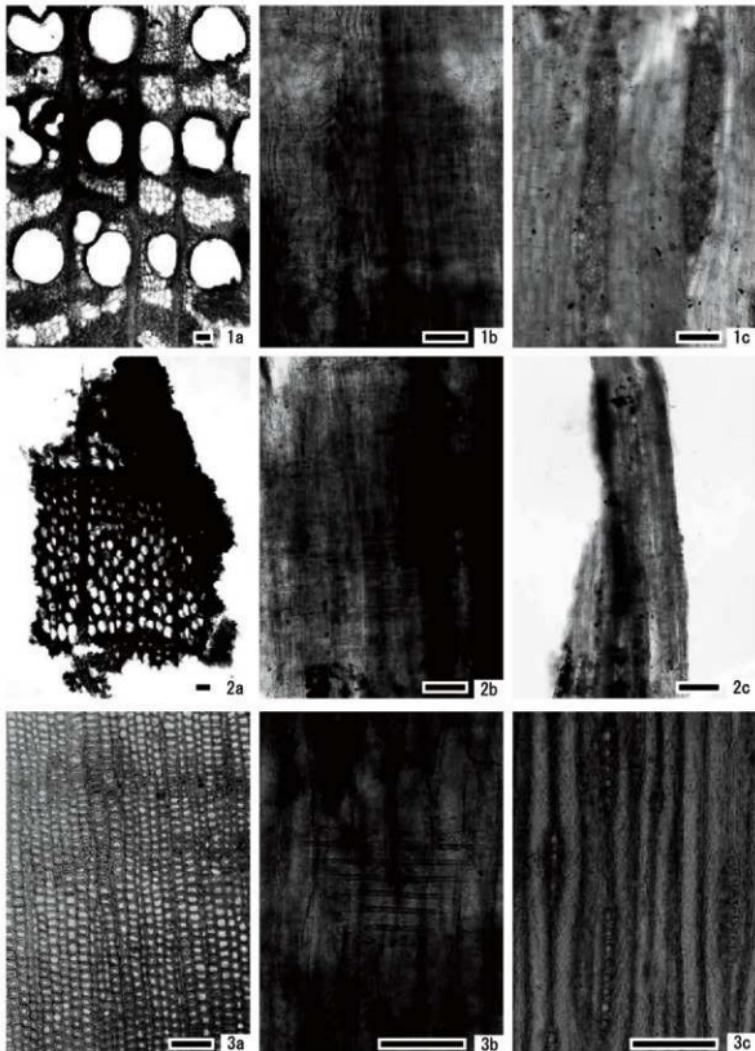
カ. 彩色：充填、復元箇所は、顔料、アクリル樹脂エマルジョンを用いて補彩を行う。

キ. 経時変化調査：処理後、一定期間変化の有無を確認する。

ク. 処理後調査：写真撮影。保存処理記録作成。

引用文献

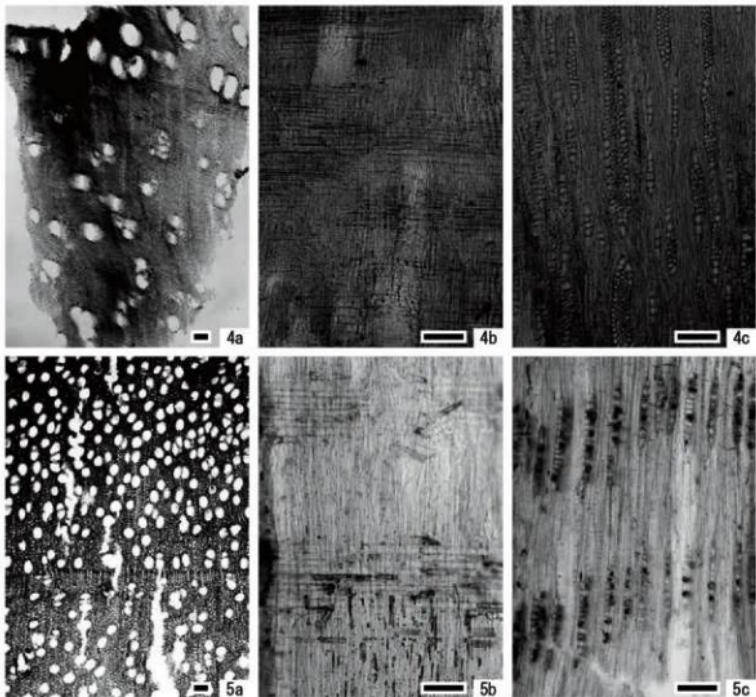
- 林 昭三, 1991. 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p.
- [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982. 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. ケヤキ (No. 3 : 楢)
2. プナ属 (No. 4 : 榛)
3. スギ (No. 15 : 桧底板)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μm

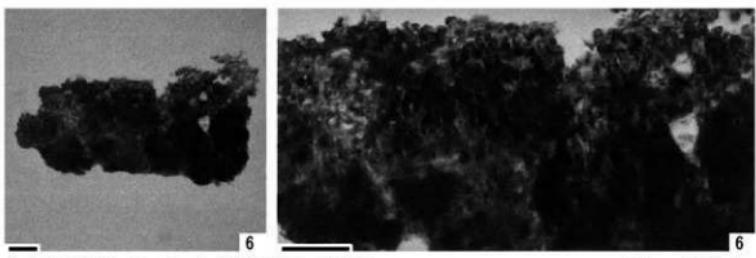
第54図 木製品 (No.3・No.4・No.15) 光学顕微鏡写真



4. クワ属 (No. 34 : 小刀柄)
5. トチノキ (No. 89 : 梱)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μm

第55図 木製品 (No.34・No.89) 光学顕微鏡写真



6. タケ亜科 (No. 94・95: カゴ状木製品) 横断面

スケールは0.1mm

第56図 木製品 (No.94・No.95) 光学顕微鏡写真

V 総括

1. 東方西口遺跡と旧東方村下組中村家の関係

今回の発掘調査は旧東方村下組中村家の名主を代々勤めた中村氏の所有地において実施されたものである。東方村は元禄11年（1698年）に幕府領から忍領に組み入れられ、近隣の見田方、南百、四条、別府、千疋、麦塚、柿ノ木の各村（通称柿ノ木領八か村）と共に廃藩置県まで忍領となっていた。東方村は上組と下組に分かれ、両組に名主が置かれたため名主は2人制であった。『新編武藏風土記稿』では民家85と記されている。

東方村下組中村家には作成時期の異なる系譜が何点か現存している。それらの系譜から歴代当主をまとめる第10表とのおりとなる。ここでは天保3年（1832年）に14世中村興治によって記され、嘉永4年（1851年）に15世中村義徳が修正した系譜（第57図）を取り上げる。この系譜の冒頭には中村家の謂れが書かれているほか、家を再興した時の苦労や功労を子孫へ代々伝えていきたいという想いが記されている。

なお、第57図では興治は11世、義徳は12世となっているが、中村家の別の系譜では中村左近将監を元祖（初代）とし、その後に継ぐ3世代分を「中村某」としているもの、世代の数に含めている。よって、どの系譜を根拠とするかによって3世代分ズレが生じてくる。本報告では現在のご当主が20世と称していることから中村左近将監を元祖（初代）とした記述を行う。以下第57図の冒頭を要約するが、「○世」の部分は3世代分増やして記載し、第10表と整合を持たせている。

第57図冒頭要約

「伝えられている当家の先祖、中村左近将監は平家千葉の庶流である中村太郎・平忠将の逸裔である。文明年間（1469年～1487年）に太田道灌に仕え、大相模の郷士となる。

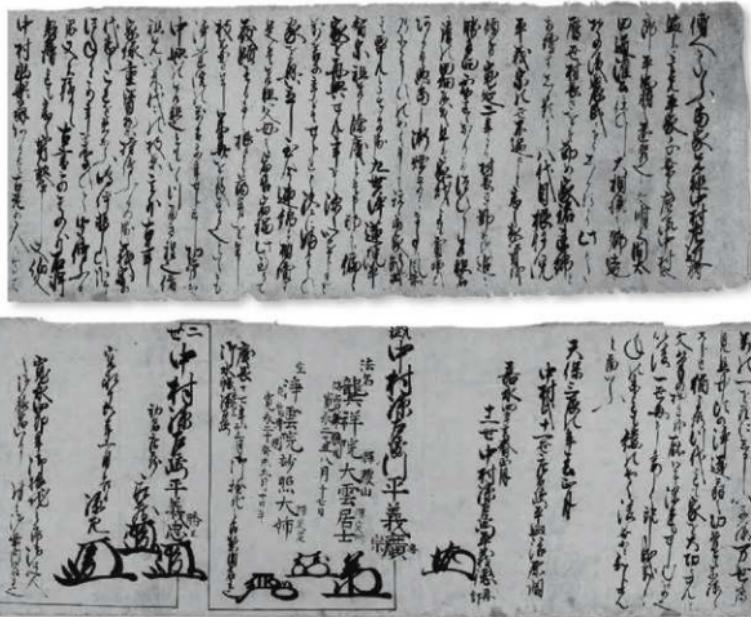
その後、農民となって代々、村長（名主）を勤める家柄として連綿と相続してきたが、11世の義宗の代では不遇にして家財を傾け、寛延2年（1749年）からは村長を勤めないようになり、次第に勝手向きが不如意となり、ついには先祖から伝えられた田畠、屋敷、家財までも売り払い、風前の灯のような有様となり、当家断滅となるところであった。

12世の智宗は家を再興しようと深く思われ、万苦千辛を重ねて、ついに再興してこれまで連綿と相続してきた。これは先祖父母が前世に積んだ福徳である。ここに至って根から萌芽し、枝葉を生じ、実りを得るがごとき状況になった。これら智宗の万苦千辛とした功労は、中興の祖とも言うべきものである。

先祖以来代々の枝葉、その他古事、家禄、宝物など伝来の物が、義宗の代でことごとく失われてしまった。何と悲しいことだろう。このことを憂えるので、聞き伝わる事や、残った古書、石碑や過去帳などでも追及し、あるいは伯父の中村幽楽翁（東方村上組中村家当主・第10表参照）や古老に聞いて万の一をここに書き記す。これによって子孫万世のために智宗の功労をも伝えていく。翁は家を大切にしようと、文筆のつたないことも厭わずに伝え残そうという想いであった。今後は一代ごとにことごとく記録して、子孫に知らせたいと思う。」

第10表 東方村下組中村家当主一覧

世代	姓・氏名	業績等
元祖	中村左近将監	千葉氏の庶流・中村太郎=平忠将の後裔。太田道灌の家臣となり、後に大相模郷の郷士となる。
:	中村某	不明
4世	中村孫左衛門 平義廣（義忠・義宗）	慶長17年（1612）の検地の際、案内した名主。 寛永2年（1625）8月17日卒。
5世	中村孫左衛門 平義忠・勝正	幼名は庄蔵。寛永4年（1627）の検地の際、役人が宿泊し、案内した名主。 正保3年（1646）4月16日卒。
6世	孫左衛門 平義継	寛文10年（1670）9月9日卒。
7世	孫左衛門 平義繁・智胤	幼名は莊藏。 元禄10年（1697）9月10日卒。
8世	孫左衛門 平義隆	幼名は五郎八。後に孫八郎。 宝永5年（1708）12月5日卒。
9世	幸右衛門 重義	寛保2年（1742）11月11日卒。→書き換えの跡あり。 享保13年（1728）11月11日卒。
10世	孫左衛門（善太夫） 増重	八条領登戸村名主関根八右衛門増顕の男。重義の養子となる。 寛保2年（1742）11月3日卒。
11世	庄右衛門 智榮・義宗	不遇にして身上向き不如意となる。 寛延4年（1751）10月23日卒。52歳。
12世	孫左衛門 智宗	中興の祖 天明元年（1781）9月27日卒。53歳。
13世	孫左衛門 近義	妻りうは上組の中村七郎右衛門熙治（ひろはる）の次女で、中村政謹（=幽栗翁）の姉。 寛政6年（1794）8月13日卒。43歳。
14世	庄右衛門 興治	寛政元年（1789）9月27日生。幼名は幸次郎。 9歳で名主役となる。
15世	孫左衛門 重貞・義徳	文政元年（1818）10月21日生。幼名は千之助。 八条領西袋村小澤平右衛門重圓（農功）の三男で、天保2年（1831）8月14日に興治の養子となる。後に培根（ばいこん）と号す。
16世	治太郎 義寛・義直	天保10年（1839）9月10日生。 明治になって小学校教員、村会議員を務める。
17世	雄太郎 義正	慶応2年（1866）6月17日生。 村会議員や社寺総代を務める。 昭和13年（1938）10月11日卒。73歳。
18世	貞治	明治29年（1896）5月18日生。 大相模小学校教員、村議、久伊豆神社総代を務める。大戦後の農地改革により、田畠2町歩以外失う。
19世	重義	大正13年（1924）11月12日生。
20世	治雄	昭和24年（1949）11月9日生。現在のご当主。



第57図 東方村下組中村家系譜

以上、冒頭から読み取れることとして①下組中村家は少なくとも文明年間まで系譜が辿れること、②11世義宗の代（18世紀中頃）に不遇にして身上向きが不如意となったこと、③家勢の浮き沈みはあつたものの中村家は連綿と相続されてきたこと、の3点がある。

さらに4世（第57図では元祖）義廣の項には「慶長17年（1612年）3月御検地之節案内名主也」と記されており、④江戸時代初期から名主を勤めていたことが分かる。

上記①～④について、発掘調査で得られた成果との関係を見ていきたい。①については出土遺物を見ると、14の文保2年（1318年）の板碑、8の応永22年（1415年）の板碑、35の文明17年（1485年）の板碑があり、古文書記載の文明年間の板碑があるほか、それ以前に遡る板碑も発見されている。また、板碑の他にも146の古瀬戸緑釉小皿など、15世紀の遺物も散見されている。今回出土した中世遺物の年代と中村家の年代がそのまま結びつけられるかどうかは断言できないが、文明年間以前から板碑を造立する勢力がいて、その勢力が文明年間に太田道灌に仕えた可能性がある。

②については18世紀以降の遺物の出土があまり見られない。わずかに実測遺物として肥前系陶器や堺明石系陶器鉢がみられる程度である。未実測遺物の中にも当該期の遺物が存在している可能性はあるが、実測対象外遺物は細片のものが多く、出土量は多くない。このことは、11世の義宗の代で身上向きが不如意となり中村家としての活動が停滞したこと、遺物が確認できなくなった可能性がある。

だが、調査区は水田であったことから推測すると、18世紀頃から土地利用が水田に変化し、遺物が出土しない土地利用となった可能性もある。現時点ではそれを判断する明確な根拠は無いが、落ち込みは18世紀代の遺物を含みつつ自然に埋没していると思われること、12世の智宗が中興の祖として、比較的短期間に中村家を再興していること、旧東方村下組中村家の居宅である市指定有形文化財・旧東方村中村家住宅の建築年代が安永元年（1772年）であることから、中村家としての活動が停滞したというよりも、土地利用が水田に変化したことで、遺物が出土しない土地利用となったと考えておきたい。

③については15世紀から18世紀の遺物が出土しており、連続性がみられること、④については培塿や瀬戸内美濃系陶器など、17世紀前半の遺物が多く出土し、江戸時代初期からの積極的な活動の痕跡が窺える。

以上のように、遺跡の年代と中村家の歴史を比較した際には多くの符合する点が見られる。また、時期により遺物の多寡が認められるため、家勢や土地利用の変化などを反映している可能性がある。今回の調査により、東方村下組中村家の歴史のみならず東方村の歴史を考える上で重要な調査例になったと言えるだろう。

伝へいふ、当家先祖中村左近侍
監は其先平千葉義之庶流中村太
郎忠翁之遠裔也と、文明二年間、太
田源公二仕ひし大相模之郷士也、
その後農民二下り、しかるより此かた、
歴世村長さをば勤め、家塾連傳と
相続す、しかるに八代目楳性院
平義宗の世、不遇にして悉く家費財
傾け、寛延三年より村長さも勤めず、追々
勝手向不如意ニなりて、つひに先祖名
請の田畠屋敷且は家財迄も光景ひ
あるは典當し、漸煙立のミ、ま事ニ風前
乃ともしひの如くにして、諸々当家断滅
ニも覃んとするの處、九世清選院平
智宗、祖先之聲慶とは申らざる、偏ニ
家を再興せん事をと深く心懃らべ、
萬苦千辛をばせられて、終にふたたび
家を興立し、至今連継と相続す、
是は先祖父母之宿善宿福此ニ至りて
發顯するにて、根より萌芽を生じ
枝葉を生じ葉□を發する也といふとも
淨蓮院の萬苦千辛せられし功劳は
中興の先祖也ともい、つべき程也、信、
祖先以来代々の枝葉、其外古事、
家錄重宝等持伝ふるの處ニ義宗の
代、悉くこれを失なふ、嗚呼悲しひ哉
つね、この事を憂ひて聞伝ふる
處、又は残りし古書もの、その外石碑
鬼譯文も悉く穿鑿し、又、伯父
中村幽斎翁あるは古老の人二間で

萬のを茲にしてし、以子孫万世之為
□中頃の淨蓮院之功勞とも子孫ニ
しらせ、猶よろづ代孫も家を大切ニせんと
文筆の書きを厭はず、深筆せしむるもの也
以後一世毎に委しく記し、幾萬々
年の末迄も續の如く後業ニ知らせん
と爾いふ

天保三年の年春正月

中村氏十一世庄右衛門平興治原調

嘉永四年亥春正月

十二世中村孫左衛門平義徳再訂

花押

元祖 中村孫左衛門平義廣 忠

法名 輝瓊山 植定門

號祥院大雲居士

信寶印

寛永二乙丑八月十七日

室 植定尼

淨雲院妙照大師

貞貴洪鏡

寛永二十癸未五月十日卒

花押

花押

御水報 孫左衛門

案内は

中村幽斎翁あるは古老の人二間で

第57図翻刻（世代数は第57図のとおり）

2. 発掘調査区と絵図・地図との対比

前述のとおり今回の発掘調査は、旧東方村下組中村家の名主を代々勤めた中村氏の所有地において実施されたものである。旧東方村下組中村家の現当主・中村治雄氏（昭和24年生まれ）からの聞き取りでも、調査区は古くから下組中村家の土地であるとされている。ここでは発掘調査成果と現存する絵図・地図を比較し、調査区との対応関係を検討する。

中村家の敷地が絵図に描かれた例として、「八潮市史史料編　近世II」に掲載されている「東方・見田方村絵図」がある。これは武藏国埼玉郡八條領西袋村の村役人を代々勤める小澤家九代目・小澤豊功が書き遺したものである。絵図の作成年代は、天保九年（1838年）巡見使が村々を訪ねてきた際に村明細帳に添えて提出された絵図と同じ頃と考えられている。

第58図は「東方・見田方村絵図」の一部を切り出したものである。絵図が示す場所を現在地に対応させる過程は省くが、水路（構堀）に囲まれた東側の長方形区画が旧東方村下組中村家を示しており、調査区は長方形区画の内側南端に位置すると考えられる。なお、敷地西側は水路、北側は水路と道、東側はクランクする道と水路、南側は道であることが分かる。

次に、少し時代は下るが、絵図よりも測量精度の高い図面として、明治9年（1876年）の「見田方村地引番号図」（『越谷市諸家文書目録』 地図の部 147）がある。第59図左はその一部である。まず第58図と比較すると、水路に囲まれた敷地の形状は若干異なるものの、水路や道のあり方は良く一致する。「東方・見田方村絵図」では描ききれなかった詳細な区割りを表している。

この図面と平成23年度越谷市白図（第59図右）を対比したものが第59図全体である。越谷市白図に今回の調査位置を落とし込んでいるが、地引番号図との対比が可能なことが分かる。

第60図は地引番号図に発掘調査区を重ねた図である。図面の精度が異なるため完全に一致させることは難しいが、土地の区割り線がSD09など溝の主軸と一致する点や、南北方向の畦痕跡が一致する点は共通する。ただし対応しない点も多く、今回の調査で検出された溝（SD01・SD08・SD09・SD11）が地引番号図の区割りに対応することはない。今回調査で見つかった溝は出土遺物からおおむね17世紀代には埋没していると考えられ、明治9年（19世紀後半）には溝の痕跡やそれに伴う当時の土地利用の痕跡はなくなっていたと考えられる。

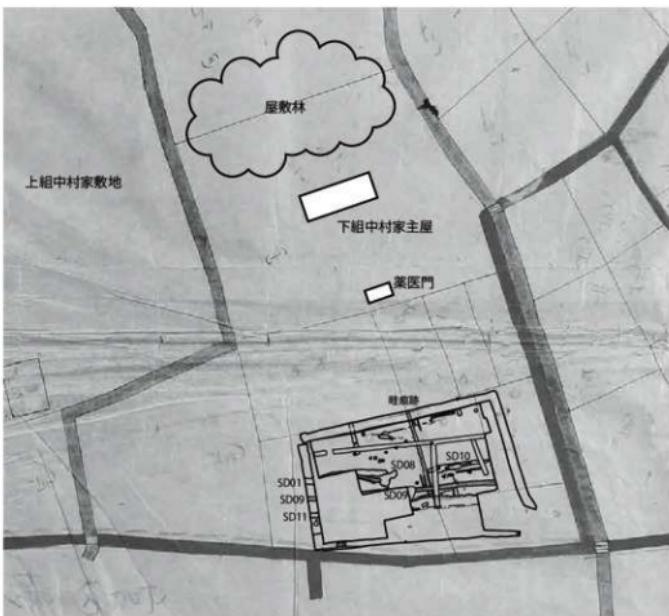
以上、発掘調査成果と現存する絵図・地図を比較したが、絵図・地図に描かれた例が19世紀以降であり、遺跡の主体的な時期である17世紀とは時間的な隔たりがあるため、土地利用をする際の方向が共通するという以外に明確な対応関係は見出せない。ただし、今回の調査は東方村下組中村家の土地の一部を発掘調査したということが絵図・地図から分かり、基本的に今回の調査成果は旧東方村下組中村家の活動の痕跡であるといえ、東方西口遺跡は東方村下組中村家の歴史と深いかかわりがあることが推測される。



第58図 東方・見田方村絵図



第59図 明治期の地引番号図と平成23年白図の対比



地図と調査区の位置合わせは見た目で行っている。
主屋・薬医門・屋敷林等の大きさ・位置はイメージである。

第60図 明治期の地引番号図と発掘調査区の対比

3. SD08足場状痕跡について

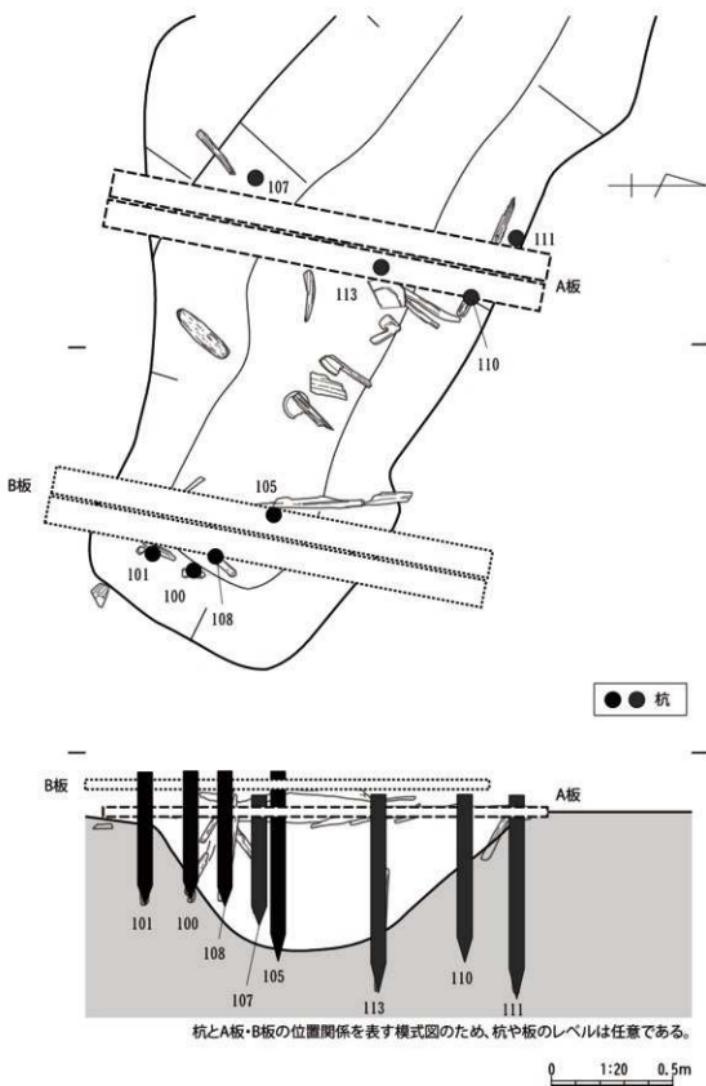
SD08には杭と溝両側にまたがる木材が認められた。杭は東側の一群（100・101・105・108）と西側の一群（107・110・111・113）に分けられる。各群はおよそ1.2m離れて打ち込まれており、一直線上に並んでいる訳ではなく、各群とも2列とするようである。各列の幅は約25cm離れており、間隔は一定ではなくまばらである。杭は深いもので地中に50cm以上打ち込まれている。杭として使われているとはいえ、先端を明確な杭状にするものはほとんど見られない。溝に渡された木材（112・115等）は杭に沿うように出土するが、腐朽もあるためか脆弱である。

ここでは杭と溝にまたがる木材がどのような役目を果たしていたのかを出土状況を勘案しながら推測する。第61図は第24図を加工し復元図としたものである。原位置を留めていると思われる杭を丸印で置き換え（東側の一群を灰色丸、西側の一群を黒丸で表現）、溝にまたがる木材は復元のうえ破線で表現し、A板・B板とした。なお、杭の長さやA板・B板の位置関係は分かりやすいよう配置したもので、実際の出土状況を正確に表しているわけではない。

まず、A板とした方を見ると、両側を挟むように杭が打ち込まれている。B板は西側の杭列が1本しかなく心許ないが、やはりA板と同じように両側を挟むよう杭が打ち込まれている。このことから、溝をまたぐ木材（A板・B板）が動かないよう、両側に杭を打ち込んで固定していたと考えられる。

具体的に遺物番号を当てはめて言えば、西側ではA板（No.112に相当）とした木材を溝に渡し、4本の杭（107・110・111・113）を打ち込んでA板を挟み込んでいる。東側でも同様にB板（No.115に相当）とした木材を溝に渡し、4本（100・101・105・108）の杭を打ち込んでB板を挟み込んでいる。杭はあまりにまばらであるが、抜き取られた可能性や、それほど補強する必要がないため簡素なつくりであった可能性がある。

これらが何の痕跡かを推測するのは難しいが、用途としては足場状の痕跡と推定した。とはいえる、歩行するにしても溝にまたがる木材の幅=杭列の幅は25cmであり、歩行としての用途では幅が狭すぎる。遺構構築当時の状況を想定すると、調査区は湧水が著しく、当該地点は溝の端部であることから水が集まりやすく、基本的に滯水していたと考えられる。そのため、滯水した水を利用した施設と考えられるが、具体的な用途を想定することは現状では困難である。



第61図 SD08 足場状痕跡復元図

引用・参考文献

- 浅野春樹 1991「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報告第31集』 国立歴史民俗博物館
- 菟原雄大・鬼塚千花 2020「越谷市増林中妻遺跡－市域で初めて確認された古墳時代前期の遺跡－」『埼玉考古』 第55号
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究辞典』 柏書房
- 大田区教育委員会 2012『大田区の板碑集録』 大田区の文化財 第39集
- 加須市教育委員会 2011『騎西城武家屋敷跡 K.B大英寺・1・2区調査』 加須市埋蔵文化財調査報告書 第2集
- 加須市教育委員会 2019『騎西城武家屋敷跡 第42・48次調査—中近世編— 騎西城跡遺物概観（漆器・かわらけ）』 加須市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会10周年記念
- 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013『八條遺跡—中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第407集
- 越谷市 1975『越谷市史一通史上』 越谷市役所
- 越谷市教育委員会 1971『見田方遺跡発掘調査報告書』
- 越谷市教育委員会 1989『越谷市諸家文書目録』
- 越谷市教育委員会 2015『越谷市指定有形文化財 旧東方村中村家住宅 展示解説図録』
- 越谷市教育委員会 2016『大道遺跡発掘調査報告書I－西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 越谷市教育委員会 2017『越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書I－サンリットタウン越谷A・サンリットタウン越谷B新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集
- 越谷市教育委員会 2022『海道西遺跡発掘調査報告書1－分譲住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 埼玉県・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022『越谷警察署前遺跡－越谷警察署仮設庁舎建設工事（越谷警察署前遺跡（No.78-016）埋蔵文化財発掘調査業務委託）埋蔵文化財発掘調査報告書』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第478集
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『川越城／小在家II 県立川越高等学校・桶川西高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告』 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第273集
- 草加・八潮遺跡確認調査団 1981『中川低地遺跡確認調査報告書』
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 水口由紀子 2016『武藏・下野の土器』『中世武士と土器（かわらけ）』 高志書房
- 八潮市役所 1987『八潮市史 史料編 近世II』



写真1 調査区南端から旧東方村中村家を望む（昭和40年代）



写真2 調査区北端から旧東方村中村家を望む（昭和40年代）

写真図版 2



写真 3 調査区遠景（南から）



写真 4 調査区遠景（北から）



写真5 調査区全景（合成写真・左が北）

写真図版 4



写真6 調査区全景（1回目撮影・上で北）



写真7 調査区全景（2回目撮影・上で北）



写真8 SD01完掘状況（南東から）



写真9 SD01土層断面（東から）



写真10 SD09完掘状況（南東から）



写真11 SD09土層断面（東から）



写真12 SD11完掘状況（南東から）



写真13 SD11土層断面（東から）



写真14 SD01・SD09・SD11完掘状況（南東から）



写真15 落ち込み完掘状況（北東から）

写真図版 6



写真16 SK01検出状況（南西から）



写真17 SK01完掘状況（南東から）



写真18 SK01漆器楕（No.3・No.4）出土状況（南から）



写真19 SK01漆器楕（No.3）出土状況（南から）



写真20 SK02検出状況（南から）



写真21 SK02土層断面（南から）



写真22 SK02板碑（No.7～No.10）出土状況（南から）



写真23 SK02完掘状況（南から）



写真24 SK03検出状況（南から）



写真25 SK03土層断面（南から）



写真26 SK03遺物（No.11）出土状況（南から）



写真27 SK03遺物（No.11）出土状況（南から）



写真28 SK04検出状況（南から）



写真29 SK04完掘状況（南から）



写真30 SK05検出状況（南から）



写真31 SK05完掘状況（南から）

写真図版 8



写真32 SK06 試掘調査時点検出状況（南から）



写真33 SK06 土層断面（南から）



写真34 SK06 遺物（No.12～No.14）出土状況（南から）



写真35 SK06 遺物（No.12～No.14）出土状況（北西から）



写真36 SK06 遺物（No.15）出土状況（南から）



写真37 SK10 土層断面（南から）



写真38 SK07 検出状況（南から）



写真39 SK07 土層断面（南から）



写真40 SK08・SK09検出状況 (南から)



写真41 SK08・SK09完掘状況 (南から)



写真42 SK08木製品 (No.22・No.23) 出土状況 (南から)



写真43 SK09短刀 (No.26) 出土状況 (南から)



写真44 SK11検出状況 (南から)



写真45 SK11土層断面 (南から)



写真46 SK12検出状況 (南から)



写真47 SK12土層断面 (南から)

写真図版 10



写真48 SK12木製品 (No.28~No.30) 出土状況 (南から)



写真49 SK12完掘状況 (南から)



写真50 SK13土層断面 (北から)



写真51 SK13遺物 (No.33~No.36) 出土状況 (北から)



写真52 SK14土層断面 (北から)



写真53 SK15土層断面 (東から)



写真54 SK16土層断面 (北から)



写真55 SK16完掘状況 (北から)



写真56 SD01 漆器楓（No.38）出土状況（東から）



写真57 SD02 土層断面（南から）



写真58 SD03 土層断面（南から）



写真59 SD04 土層断面（南から）



写真60 SD05a-a' 土層断面（南から）



写真61 SD05b-b' 土層断面（南から）



写真62 SD06 土層断面（南から）



写真63 SD06 遺物（No.40・No.41）出土状況（南から）

写真図版 12



写真64 SD06 遺物 (No.40・No.41) 出土状況 (南から)



写真65 SD06b-b' 土層断面 (東から)



写真66 SD07 土層断面 (南から)



写真67 SD07 木製品 (No.44～No.47) 出土状況 (南東から)



写真68 SD08 挖削状況 (東から)



写真69 SD08e-e' 土層断面 (北から)



写真70 SD08d-d' 土層断面 (東から)



写真71 SD08c-c' 土層断面 (東から)



写真72 SD08b-b'土層断面（東から）



写真73 SD08b-b'土層断面（東から）



写真74 SD08a-a'土層断面（東から）



写真75 SD08足場状痕跡検出状況（南から）



写真76 SD08足場状痕跡検出状況（南東から）



写真77 SD08足場状痕跡検出状況（南西から）



写真78 SD08遺物（No.51）出土状況（南から）



写真79 SD08遺物（No.70）出土状況（南から）

写真図版 14



写真80 SD08遺物 (No.48・No.63・No.69) 出土状況 (北から)



写真81 SD08 カゴ状木製品 (No.94・No.95) 出土状況 (北から)



写真82 SD09a-a' 土層断面 (東から)



写真83 SD09b-b' 土層断面 (西から)



写真84 SD09 完整状況 (西から)



写真85 SD10b-b' 土層断面 (西から)



写真86 SD10遺物 (No.121・No.122・No.125・No.126) 出土状況 (南から)



写真87 SD10遺物 (No.121・No.122) 出土状況 (南西から)



写真88 SD10遺物 (No.122・No.125・No.126) 出土状況 (南西から)



写真89 SK15・SD10完掘状況 (西から)



写真90 SD12土層断面 (南から)



写真91 SD12東側杭 (No.135) 断面 (南から)



写真92 SD12西側杭 (No.136) 断面 (南から)



写真93 SD13検出状況 (南西から)



写真94 SD14土層断面 (西から)



写真95 6Lグリッド落ち込み掘削状況 (北から)

写真図版 16



写真96 P02土層断面（南から）



写真97 P03土層断面（南から）



写真98 P04土層断面（東から）



写真99 P05遺物（No.137）出土状況（東から）



写真100 P06・P07土層断面（東から）



写真101 P08土層断面（東から）



写真102 P09土層断面（東から）



写真103 P09木製品（No.139）出土状況（東から）



写真104 桁1断面 (南から)



写真105 桁2断面 (南から)



写真106 桁3断面 (南から)



写真107 桁4断面 (南から)



写真108 5Kグリッド圧痕 (西から)



写真109 5L-11グリッド圧痕 (南西から)



写真110 4K-25グリッド足跡 (南から)



写真111 4L-9グリッド足跡 (西から)

写真図版 18



SK01 出土遺物



SK02 出土遺物



SK06～SK13出土遺物

写真図版 20

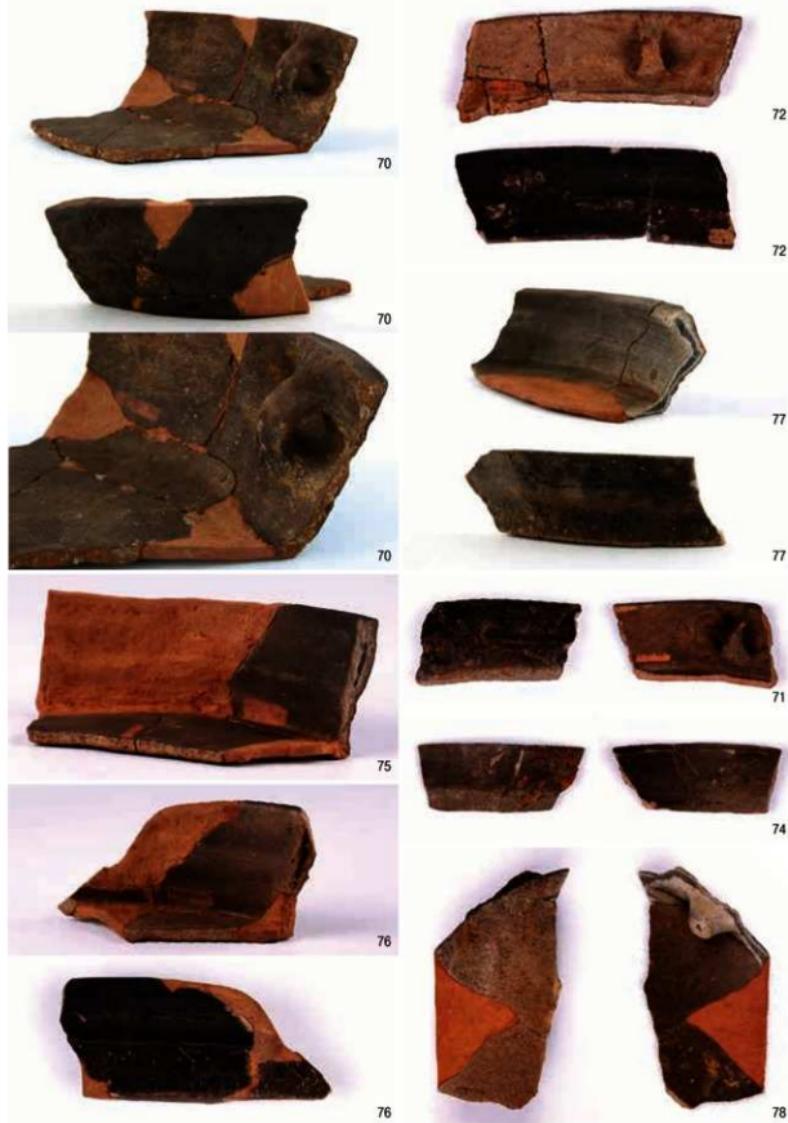


SK13・SK15・SD03・SD06出土遺物



SD08出土遺物 1

写真図版 22



SD08出土遺物 2



SD08出土遺物 3

写真図版 24



SD08 出土遺物 4



SD08 出土遺物 5

写真図版 26



SD08~SD10出土遺物



SD10・SD11・P05・P09出土遺物

写真図版 28



146



147



148



150



152



153



154



156

落ち込み・グリッド出土遺物



157



158



グリッド他出土遺物

写真図版 30



3



4



5



6



11



15



17

SK01・SK03・SK06・SK08出土木製品



18



24



22



23

SK08出土木製品

写真図版 32



SK08・SK12・SD07・SD08出土木製品



89

95



100



101



102



104



105

SD08 出土木製品

写真図版 34



SD08 出土木製品



遺構外出土木製品

写真図版 36

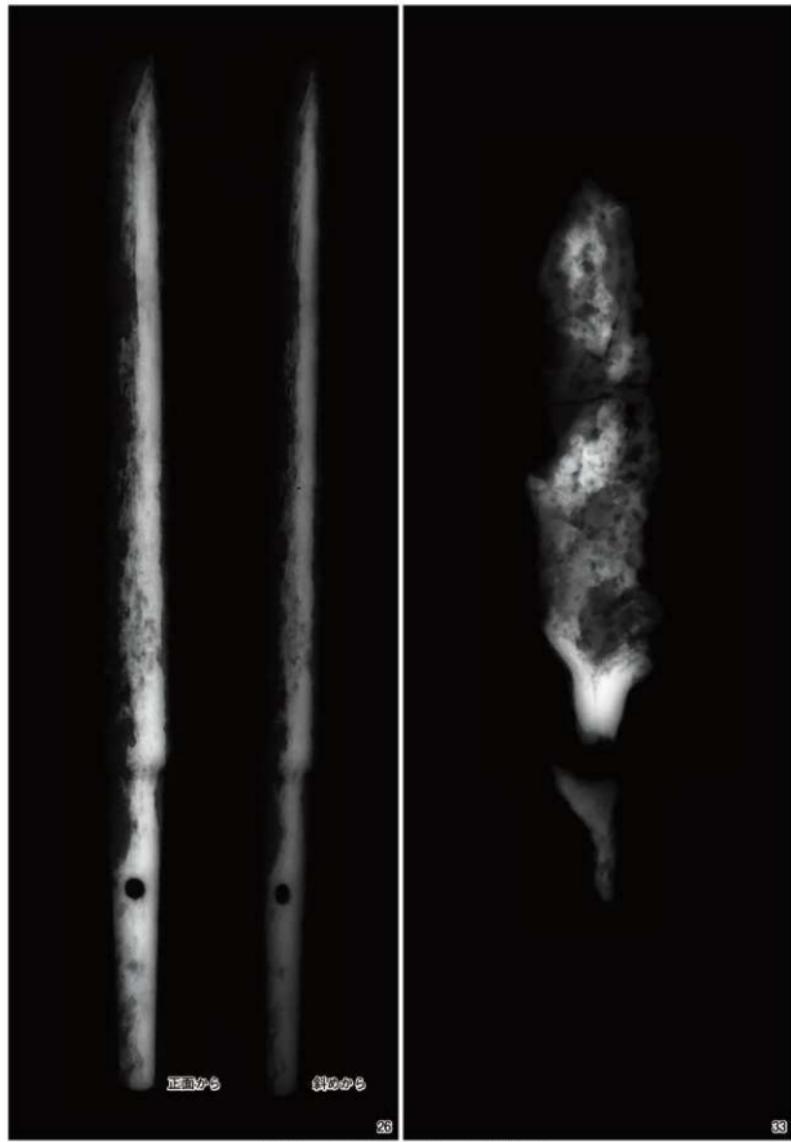


SK08・SK12・SD08出土木製品



SD12・P09・遺構外出土木製品

写真図版 38



鉄製品 (No.26・No.33) X線撮影写真

報告書抄録

ふりがな	ひがしかたにしぐちいせきはっくつちょうさほうこくしょⅠ
書名	東方西口遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	大相模保育所建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	一
シリーズ名	越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	荒原雄大・鬼塚千花・安井陽子
編集機関	越谷市教育委員会
所在地	〒343-8501 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号 TEL 048(964)2111
発行年月日	西暦2023年(令和5年)3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ひがしかたにしぐちいせき 東方西口遺跡	埼玉県越谷市大成 町二丁目287番3、 288番1、289番1 の一部	11222	78-019	35°53'06"	139°49'02"	20170828 ～ 20171006	300	保育所 建設 (よう壁)
ひがしかたにしぐちいせき 東方西口遺跡	埼玉県越谷市大成 町二丁目287番3、 288番1、289番1 の一部	11222	78-019	35°53'06"	139°49'02"	20171204 ～ 20171213	100	保育所 建設 (よう壁)
ひがしかたにしぐちいせき 東方西口遺跡	埼玉県越谷市大成 町二丁目287番3、 288番1、289番1 の一部	11222	78-019	35°53'06"	139°49'02"	20190930 ～ 20200210	1500	保育所 建設 (本体及 び外構)

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
ひがしかたにしぐちいせき 東方西口遺跡	集落跡	鎌倉時代 室町時代 江戸時代	土坑 溝 ビット 杭 地形の落ち込み	16基 14条 8基 4本	陶器、磁器、かわらけ、 瓦質土器、板碑、瓦、木 製品（椀）、鉄製品（小 刀）、銅製品（錢）、鐵滓、 骨製サイコロ、モモ核	東方西口遺跡における初 の発掘調査。中世遺物 が出土し、旧東方村下組 の名主・中村家との関連 が想定される。

要約	<p>東方西口遺跡は元荒川の右岸に立地し、調査区北側には文明年間に太田道灌に仕え、江戸時代初期から旧東方村下組の名主を勤めた中村氏の居宅が位置している。</p> <p>遺跡は平成28年まで使用されていた水田耕作土直下で確認される。本調査区は自然堤防の高まりの部分と後背湿地の落ち込み部分の境目となっている。調査では土坑・溝等が確認でき、陶器、磁器、かわらけ、瓦質土器、板碑などが出土した。</p> <p>旧東方村下組中村家の歴史と遺跡の年代観が一致するため、調査成果は中村家との関連が想定され貴重な事例である。</p>
----	---

越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

東方西口遺跡発掘調査報告書1

－大相模保育所建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発 行 越谷市教育委員会
埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号
電話 048(964)2111
発行日 令和5年3月31日
印 刷 株式会社 秀飯舎